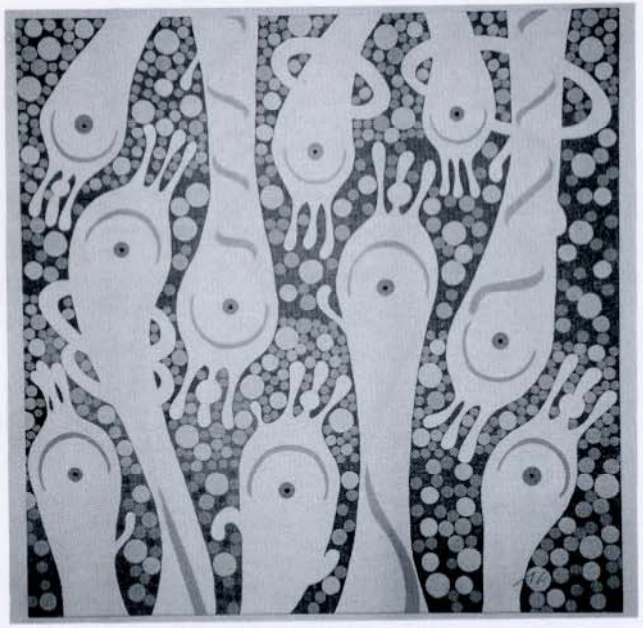
全日本リアリズム演劇会議機関誌

# 演劇会議



全リ演（東・西会議）総会報告

今日のリアリズム　シリーズ④　　栗原　省

劇曲『今どき現代史講座』―ブロークン・ファミリー―　佐藤逸平

92　1996年12月　¥700

娼婦との邂逅、
晩年の死病を通して
大愚・良寛の深層に迫る
一人芝居と小説

『隠れん坊－私の良寛－』
岡田　和義　著

四六判・99頁
発行所／武蔵野書房　定価1,545円（本体価格1,500円）

しなやかに、新鮮に　好評の第一集につづいて贈る　西日本からの戯曲の風

西日本劇作家の会編　戯曲選集2
ドラマの森 1995　定価／¥2,200（送料別）

＜収録作品＞
◇栗原省「河童詫証文」
ユーモラスで、そしてあまりにも悲しい河童と小作人男の恋。各地で上演された栗原民話の傑作。木の国民話シリーズ第3話。
◇和田澄子「わが町大阪・ひがし」
「戦争と女性」というテーマを一貫して追い続けるベテラン劇作家が描く大阪の町。庶民をいとおしく描き、劇団未来の舞台が好評を博した。
◇楠本幸男「幻想列車」
怒涛のような激動の時代に、仲間を裏切り、一人生きていくアンチヒーロー、機関士・重田欣蔵。今まさに衝突せんとする列車に人間の危機の影がせまる。
◇広島友好「カンボジアダンス」
戦禍のカンボジアを舞台に、ユニークな視点とみずみずしい感性で描く。いま精力的に書き続ける若手作家の才能あふれる作品。
◇内田昌夫・桜井敏「火の華・サイタ」
廃墟となった町に生きる人々の脳裏に、50年前の神戸大空襲がよぎる。震災の傷跡が生々しい作者と劇団が苦渋の中からやっと叫ぶことのできた人間賛歌。

申し込み　TEL 0729(41)0554　FAX 0729(41)4401　東川（うのかわ）まで

1996年12月15日発行　第92号

# 演劇会議

## ■ もくじ


●グラビア（舞台）…… 1
●全リ演（東・西会議）総会報告…… 8
●今日のリアリズム　シリーズ④　リアリズム演劇論・リアリズム演劇運動と「リアリティ」についてのメモ　栗原　省（劇団いこら）…… 29
●＜海外演劇レポートA＞八仙過悔　異彩粉呈 ―― '96北京話劇（新劇）舞台―― 瞥 ―― 劉平（嶋田恭子訳）…… 40
●＜海外演劇レポートB＞韓国演劇ツアー報告…… 47
●＜海外演劇レポートC＞ロシア演劇のレベルの高さ　オムスクのフェスティバルに参加して　内田　勉（京浜協同劇団）…… 48
●＜本の紹介＞評伝・平澤　計七　後藤　陽吉（青年劇場）…… 51
●ヴォイストレーニングの実際④　やまもとのりこ…… 52
●「全速力で駆け抜けた　飴谷隆治を偲んで」　大阪府職員演劇研究会一同…… 54
●沖縄の９月　謝名元　慶福…… 56
●中グラビア ―― 額 ―― （隅広誠二，河東けい，竹橋団）…… 58
●＜ロシア演劇レポート７＞　ビョートル・フォメンコとその「工房」　桜井　邦子…… 64
●北から南から（劇団通信）…… 72
●西日本劇作家の会第13回総会の報告　作家と劇団の緊張関係　楠本幸男（演劇集団和歌山）…… 87
●草の根的演劇まつり（大阪春の演劇まつり実行委員会）　事務局・ユースサービス大阪文化課　新保憲一…… 90
●戯曲『今どき現代史講座 ―― ブロークン・ファミリー ―― 』　佐藤逸平…… 92
●劇評　劇団支木『千年の丘』　きしだみつお（劇作家）　劇団京芸『国語元年』　尾川原和雄…… 124
●演劇講座（全リ演西会議）…… 128
●事務局ニュース…… 134
●全日本リアリズム演劇会議　劇団住所録…… Ⅰ～Ⅵ


表紙絵＝「ＰＰ（ピアニッシモ）」田中亜希（川崎市在住，高校３年）

## 公演　舞台

◇劇団コーロ『刻（とき）を踏むー「タイムショップ」（講談社刊）よりー』。
原作・川人　博　脚本・藤田　傅／沼田幸二
演出・藤田　傅（撮影・森口ミツル）

◇関西芸術座『ロンリー・ハート』
作・ベン・ヘンリー　訳・安達　紫帆
演出・門田　裕

◇劇団大阪『思い出してよ』
作・窪田吉宏　演出・斎藤　誠

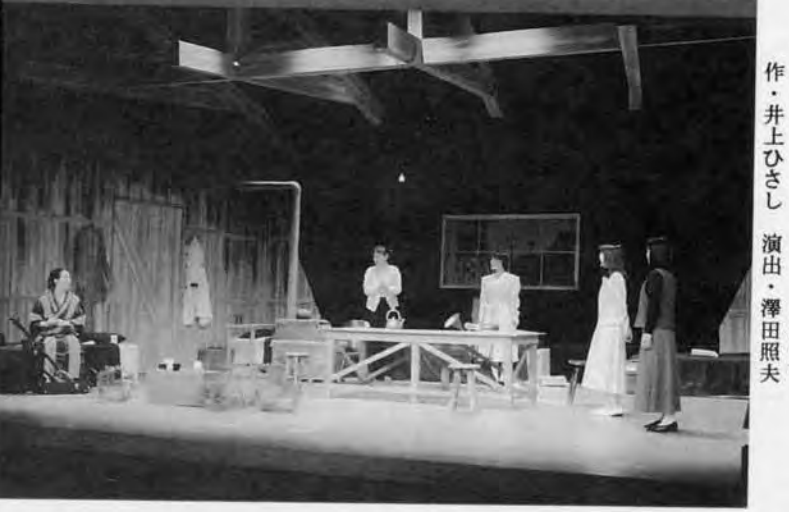
◇劇団はぐるま『アリババと四〇人の盗賊』

◇劇団名古屋研究公演『恋愛日記』
作・作内銑一郎　演出・矢野弘次

◇劇団弘演『おこんじょうるり』

◇劇団はにわ『淡墨色の桜たち』
作・小島真木

◇演劇集団石るつ『大江戸ドケチ伝』
作・矢野　喬　演出・境野修次



◇劇団久喜座『マンザナ・わが町』
作・井上ひさし　演出・澤田照夫

◇劇団四紀会『おせん藤太』
作・木下順二　演出・岸本敏朗

◇劇団支木『千年の丘』
作・北野　茨　演出・堅倉　憲

◇東京芸術座『家族』
作／演出・平石耕一

◇宇部市民劇団若者座『私を返してください―ヒロシマの心』
原作・早坂　暁　脚色／演出・天羽新平

◇三浦半島劇団〃海〃『歌の町』
作／演出・神田時枝

◇京浜協同劇団『父が帰える家』
作・本庭久美子　演出・室野定子

公演　舞台

◇青年劇場『私よりましな私』
作・J・N・ファンウィック
訳・高橋　啓　演出・松波喬介

◇劇団阿修羅『どん底』
作・ゴーリキー　演出・松木　圓

◇劇団だいこん座『じてんしゃ』
作・森　治美　演出・高橋　寛

◇劇団銅鑼『カウナスの夏』
作／演出・平石耕一

◇劇団さっぽろ『猫の事務所』

◇劇団名芸『ピノッキオの冒険』
脚本・栗木英章　演出・佐野秀明

# 東総会議会 <1996年>

# 報告

八月十日（土）午後三時～
十一日（日）午後一時まで

劇団群馬中芸未来スタジオ

全リ演（東会議）

運営委員会　8月10日（土）午後1時～2時30分
総　　会　8月10日（土）午後3時～
　　11日（日）午後1時まで
会　　場　劇団群馬中芸未来スタジオ

（1）

昨年は戦後50年に当たる。50年、50年、と騒がれたにもかかわらず、国会決議に表れているように、従軍慰安婦での責任逃れに表れるように、50年の句切りは何ら果たされず、戦争責任は相変わらずあいまいなまま51年に逃げ込もうとしている。これで永遠に逃げ込めるか、とんでもない。仏教では因果は必ずめぐるというが、そのツケは必ず払わなければならないのである。今後このまま経済大国を維持するとは思えないが、維持できたとしても金で日本民族の信頼と尊敬をアジアの民衆からかちとることはできない。できないどころか、ツケは早いほどいいというが、そうした姿勢で伸ばせばのばすほど重くのし掛かるのである。

それではその責任はすべて自民党中心の連立政府の責任といえるか。政府の責任を明確にさせるわれわれ民衆の責任はどうなのだろうか。これが今日あいまいであり、政府のあいまいさを許しているのではないだろうか。

そのあいまいさの今日の状況をどう表現していいか、それが劇団報告に表れているといって間違いないと思う。また劇団報告をどう分析していいか、分析できたとしてもどう対策が組めるのか全く事務局としても分からないのが今日というほかないようである。こうした状況はもう十数年、いや一九七〇年に入ってから、二十数年になるのである。とくに冷戦体制の崩壊以後、思想界も半ばファッショ化し現実の歴史に対応する力を失っている。



マルクスのいう共産主義とは、ロシアのスターリン体制のような達成されるべき思想や状態ではなく、「現状を止揚する現実的運動」であり、「この運動の諸条件は今現存している諸条件諸前提から生じる」といっているのである。環境問題、食料問題、人口問題、南北問題等、諸条件諸前提はわれわれの周りに事欠かない。いわんや、資本主義の矛盾はいかに大国間で調整しようと解決できるものではない。それをふまえて現状を止揚して行くのが現実的運動とすればマルクスは今でこそ生きてきているといわねばならない。それがただ混迷しているだけである。

（2）

この混迷の状況は組織的危機として劇団報告にも表れ始めている。黒石劇研は「『やりたいもの』『やれるもの』『やらなげればならないこと』と現実との間でどう折り合いを付けるかというのは永遠の課題であろう」といい、弘演は「今にマッチした、劇団員の人数もまにあい、観客の呼べるものとなるとなかなか見つからない。となるとやはり創作劇を創らなければと思うが、台本の書き手、題材など問題は山積みで、どうしても実現できない」

東京芸術座は「学校公演の不振として、教師の世代替わりもあり、教師、生徒の演劇への嗜好にも変化が出てきて

いるか?」といっているが、その嗜好の変化をどうとらえていいか。

静芸は「意識的に取り組まなければ観客は自分たちのものになっていかない」そのとおりであるが意識的に取り組む主体は何なのか。からっかぜは「各劇団員の意識の高め方。一部の人たちにしわ寄せがいっている。(作品面、制作面)意識の低い人たちに振り回されている現状がある」

劇団名古屋は「演技論も集団論も観客論も、そして文化論も後退した。『やりたいことをやればいい』に十分対抗しえぬまま、やりたいことがいつの間にかなくなっていく危険はないか」また「プロの集団の仕事に比して業余集団の仕事はどう位置づけられるか。業のあいまいな者もいるので、劇団にとっても不明確。だからその仕事も不明確。全リ演の縁が薄くなりかけていないか」と極めて具体的である。また劇団すがおも「他劇団との交流も極めて積極的に行っているが、全リ演とは縁が薄いのが問題。作品がキャラメル的路線に偏っている。若い劇団員の傾向であるが、見直しの声も出始めている」という。

以上で今日的危機はすべていい尽くされていると思う。

## (3)

こうした中でレパートリーの再生産は困難であることは当然である。とくに非専門劇団にそれは集中している。公演を持続するのが精一杯で今日に対応する劇団としての主体的企画はほとんど見られないのである。レパートリーの再生産なくして劇団の存在意義はない。いわんやそれで変革を求めるリアリズム演劇会議といえるのだろうか。

その点さすが専門劇団は困難な条件の中で求めている。劇団さっぽろは「地元作家と手を組むことで、創作劇をコンスタントに生み出せてる」。群馬中芸は戦後50年を「ちょっと昔の物語」で問い、生産主義の今日を「カチカチ山の狸どん」で訴えている。東京芸術座は戦後50年については「私は貝になりたい」「あわて幕やぶけ芝居」で問い、このところリアリズム演劇の旗手として躍りでた平石耕一の「ブラボー!ファーブル先生」を提出した。劇団銅鑼は同じく平石耕一の、「凍土の蝎よ」で戦争の悲劇を別の角度から問い、青年劇場は戦後50年を青年劇場として新しくメッセージを提出しようと努力し、結果的に「青春の砦」の再演となったが、「鮮やかな朝」を上演、日本人としてアジア意識を厳しく問うた。

しかし、非専門劇団で戦後50年に取り組んだ劇団は極めて少ない。弘演の「この子たちの夏」劇団名古屋の「ゼロの記録」、上野市民劇場の「アンネの日記」、劇団はぐるま、の再演であるが「カンナの咲き乱れるはて」だけである。全リ演にとって戦後50年が創造的主体的にとらえられなかったということは、すなわち政府の戦争責任を問い質すわれわれの立場のあいまいさの表れといっていいのでなかろうか。

このように現状認識があいまいで組織的創造的な主体が確立されていないとすればレパートリーの再生産が困難なのは当然の帰結である。再生産が行き詰まれば組織が停滞する。どこでも見られるのは劇団員の減少であり、高齢化である。その悲鳴はやませ、仙台小、だいこん座、京浜、静芸、からっかぜ、演集、夜明け等から上がっている。それは当然創造面、制作面に跳ね返り、悪循環をなしている。今日の若者に魅力のある創造とは、組織とは何であるか。素直に改めて議論する必要があるのではないだろうか。

## (4)

そうした中でそれぞれの集団は工夫を凝らし、地域とどうつながるべきか探っているのである。弘演は「この子たちの夏」「ブンナよ~」で一般公募し、とくに後者では千人の観客を集めるエネルギーを生み出している。仙台小は移動公演、依頼公演(救急医療大会)を定着させ、また京浜は新しい稽古場を武器に、「父が帰る家」では近隣の町内会に回覧版を通じ五千世帯に劇団のメッセージを伝え、10回の公演すべてを満員にしている。名芸は名劇協30年記念公演で「明治転回」を、続いて反核舞台人の集い、沖縄裁判市民劇「弥勒世ややがて、」電通日本のうたごえ、国鉄のうたごえ祭典の演出構成を通じて地域とのつながりを強めている。とくに沖縄裁判劇では一七八〇人の観客を集めている。

更にここで強調しておかなければならないのは当然のことであるが創作劇を生み出している劇団は非専門劇団でも強い創造エネルギーを持っているということである。中でも注目すべきは劇団支木の青森演劇鑑賞協会創立40周年記念企画となった「千年の丘」である。劇団支木としては未上演の作品の鑑賞会の例会化は初めてであり、これは劇団支木のこれまでの創造的力量の積み重ねが高く評価された結果であることはいうまでもない。続いて劇団やませも来年の八戸市民劇場の本例会に「我が内なるラピュータ」を取りあげられることになったが、劇団支木とともに奥羽ブロックに与える創造的刺激は大きい。

そして劇団はぐるまである。ここで注目すべきは地方自治体がソフトを求め始めたことである。この数年岐阜市からの求めに応じ、エンターティメントの要素が多いが、信

長シリーズとして野外劇を重ね成功させてきた。この成果は大きい。今年大垣市からの依頼で「江馬細香と頼山陽」を、続いて今年の秋には岐阜県からの依頼で飛騨編入百二十周年を記念し、幕末の大原騒動の咎人上木甚兵衛を描いた「新島の飛騨んじい」を上演する。続いて劇団はぐるまには数都市からの依頼が来ている。地方自治体も箱物の文化会館につづいて中身の創造発信を求め始めたのである。これからはこれに応える体制を作ることが緊急の課題になってくるのである。

## (5)

劇団報告を見てもらえば分かるように専門劇団のレパートリーは実に多彩である。さすがといわねばならない。これを見ても今日の状況を切り開こうとする、いや、それは今日では専門劇団がになっているといって過言ではない。明らかに非専門劇団の衰弱と対照的に専門劇団の役割が大きくなっているのである。

しかし、その専門劇団の抱える情勢も極めて厳しいといわねばならない。どこも学校公演は多かれ、少なかれ劇団の財政基盤になっている。しかし、その基盤が週休2日制によって崩れつつあるのである。劇団さっぽろは「収入のない時でも払わなければならない給料体制の抜本的見直し、制作力、オルグ力の低下」を訴えている。これは群馬中芸も同じで制作への過重な負担に苦しんでいる。在京の3劇団(東京芸術座、銅鑼、青年劇場)の学校公演も同様厳しいが、東京公演の財政保証も大変に厳しいのが現実である。当面観客五千人がギリギリの目標であるが、辛うじて達成しているのは青年劇場だけで東京芸術座、銅鑼はすべての公演が赤字なのである。この上消費税5%アップがあれば公演不能もあり得ることになる。

こうした中でアーツプラン21の一九九六年度の採択事業が発表された。申請した演劇団体は68団体に上っている。が、支援の対象は5団体、文学座、青年座、劇団プーク、木山事務所、青年団である。全リ演として全く関係ないといっていいわけはない。これをどうわれわれの運動とつないで行くかは、21世紀を展望しての課題といわねばならない。リアリズムを求める全リ演傘下の劇団がこの対象となった時いかにわれわれの展望が大きく開かれるか。こうした諸条件をわれわれは無視してはいけない。

## (6)

昨年は戦後50年だったが、今年はその悲惨な戦争の反省の上にたって発布された平和憲法の50年である。戦争責任のあいまいさと平行して憲法の空洞化が押し進められてきたが、あの手この手の歴代の内閣の狂奔にもかかわらず、国民の暮らしに根を張った憲法の改悪は簡単にできないのが現状なのである。

それどころか昨年9月少女暴行事件をきっかけにした沖縄県民の基地反対闘争はついに日米安保条約の土台そのものを揺るがし始めたのである。政府にとっては阪神大震災以上に予想も出来なかったことだと思う。そして米軍基地強制使用に対しての太田知事の「代理署名拒否」は全国の喝采を浴び県民の支持による自治意識が国家権力をも揺り動かすことを国民の前に見せつけたのである。21世紀はアジアの時代といわれるが、アジアへの前線基地としての沖縄の闘争はその夜明けを象徴的に示している。この闘争への全国的な支援はアジアへの連帯ということを忘れてはいけない。

またHIV訴訟における川田龍平親子の立ち上がりは多くの青年を奮い立たせ、全国的な共同行動を呼び起こし、ついに厚生大臣を謝罪させ、牢固として動かせない官僚制度に風穴をあけたのである。また住専問題の原因をあいまいにしたままの解決は許されず、ツケの行方は必ず大蔵省へと跳ね返ってゆくに違いない。いずれにしてもバブル崩壊後の長期的な不況はいろんな矛盾を一杯露呈させ、逆にドラマの材料に事欠かなくなっているともいえるのである。

## 経過報告

1. 日誌

| | |
|---|---|
| '95・9・18~19 | 東会議総会(宮城県大和町) |
| | 劇団久喜座、劇団蒼生樹が加盟 |
| 19~20 | 東会議演劇ゼミナール(宮城県大和町) |
| 11・18 | 「演劇会議」第89号発行 |
| '96・1・27~28 | 東西合同議長団会議(大阪) |
| 2・16 | 全リ演ニュースNo.4発行 |
| 2・17~18 | 東会議運営委員会(熱海) |
| 2・29 | 全リ演(東)ニュースNo.5発行 |
| 3・ | PANの仲間とともに非営利法人制度化の署名運動 |
| 4・7 | 「演劇会議」第90号発行 |
| 4・21 | 萩坂桃彦さんを忍ぶ会(京浜) |
| 5・10 | 「ドラマシアターども」が加盟 |
| 5・20 | 「全リ演加盟のおすすめ」を発行 |
| 6・12 | 全リ演ニュースNo.5発行 |
| 7・21 | 「演劇会議」第91号発行 |

## 活動方針（96年8月～97年7月）

1、地域で影響力を持つ劇団に

自分の劇団が地域でどのような影響力を持っているか、という視点で見つめ直してみよう。企画の面白さ、ユニークさ、創造力量、観客数、地域の運動との連帯、行政との関係などについて考えてみたい。

創作劇をはじめ、オリジナリティを持った作品を生み出すことが地域劇団としての存在価値を高めることになる。

創作劇を生み出すために今年も作家会議を計画したい。

2、全リ演の仲間と刺激しあって

全リ演に入って良かったと思えるような刺激を受けているか。仲間劇団から何を吸収するのか。機関誌「演劇会議」をそのために活かしているか。

創造力量を高めるために演出者を、また、観客をふやすために制作者を、他劇団から招いてみるような試みももっとあっていいのではないか。

私たちの周りにはすぐれた活動をしている集団がもっとあるのではないか。全リ演の仲間をもっとふやそう。東会議は4年連続して加盟劇団をふやしている。今年も新しい仲間を迎えよう。

「演劇会議」は私たち自身の雑誌である。自らの要求や希望を反映させてさらに充実させていこう。

加盟劇団をふやすこと、「演劇会議」読者をふやすこと、この二つの課題で各ブロックは話し合って下さい。

3、全日本演劇フェスティバル

今年夏に行う予定だった全日本演劇フェスティバルは阪神大震災で神戸での開催ができなくなっていた。開催時期を1年延期するとともに、開催地を大阪などに移すことで西会議が検討してきましたが、会場の都合や助成金の件などでそれも無理となり、西会議の運営委員会はこのほど神戸に戻して、来年一九九七年8月29日（金）、30（土）、31（日）に開催することにした。被災地を励ますためにもやはり神戸でと考えたもので、ぜひ成功させたい。

4、その他

（1）国際交流

今年10月に韓国の馬山市で開かれる演劇祭に出演を含む観劇ツアー団を派遣することになった。

（2）「演劇会議」前編集長、故萩坂桃彦氏の追悼文集の発行が遅れているが、来年3月3周忌に向けて発行したい。

宮岸泰治先生

# 東会議・総会——あれこれ!!

参加劇団

劇団さっぽろ、劇団弘演、劇団支木、劇団だいこん座、仙台小劇場、劇団群馬中芸、劇団埼芸、劇団久喜座、青年劇場、劇団銅鑼、東京芸術座、演劇集団さくれ、演劇集団石るつ、京浜協同劇団、劇団蒼生樹、劇団やまなみ、劇団静芸、劇団からっかぜ、劇団火の鳥、岡崎演劇集団、劇団名芸、劇団名古屋演集、劇団上野市民劇場、劇団すがお、劇団はぐるま。早川昭二編集長、楠本幸男（西会議から）、川島柳一（個人）、特別講演の宮岸泰治先生。計44名（うち女性10名）。

一、こばやしひろし議長団代表のあいさつ

二、特別講演　宮岸泰治先生

三、特別報告

①群馬中芸「未来スタジオ建設の経過とその存在意義」

②劇団支木「青森演劇鑑賞協会例会に新作『千年の丘』がとり上げられるまでの活動と経過」

③劇団静芸「シアター・オリンピックス静岡開催し地方文化行政の動向」

四、全体討議　五、二年間の活動方針

☆　☆　☆

前橋駅から国道五十号を横切り、赤城道路をしばらく進むと小暮に出る　更に行くと、畜産試験場が在る、ここまでくると村という感じた。それを左に国道三五三号を行けば、とうもろこし畑で、道も細くなる。赤城山麓だ。前方に畑と林に囲まれた未来スタジオがニューと頭を突きだしていた。

劇場は群馬中芸が8月23日に向けての仕上げで道具作りで中を見るだけ。稽古場に敷物を敷き、机、椅子を運び込んでの総会の場所造りから作業が始まった。東会議事務局で会場探しに苦労した未、期日が迫ってからの群馬中芸に無理なお願いをした訳で、本番を間近に控えた群馬中芸の人たちへ心から感謝している。

総会は定刻より30分遅れて開かれた。

総会議長団は、石垣政裕（仙台小劇場）、矢野弘次（劇団名古屋）の二人を選出した。

先ず、城谷事務局長から『演劇会議』の編集体制などを96号から西会議で担当することが提起された。（東、西で三年交替で担当するということは先の東西議長団会議で確認されている）

もう一点は、ＮＡＤとの交友関係を更に発展させる。であった。

こばやしひろし議長団代表のあいさつは、沖縄の大事件、食料問題から環境問題にふれて、今日の状況は曲り角にあり、矛盾が大きくなっている。今日、大切なことは、人間とは何んであるか、をみつめ、人間とはやさしさがあるもの、即ち芸術、文化の時代だ。二十一世紀に向けてあと四年、展望を見い出したい。腹から正直な討論をして欲しいと結んだ。

宮岸泰治先生の講演は時代と人間の意識変化が話され、リアリズムの現状に進む。

今は見えないが矛盾を探り出すことよって見えてくるもの。実際のことをどう見るかが問題。達観ではいけない、「上から下から」「陽の部分、陰から」両方を観て判断することだ。見えにくい世の中をどうみるかは、先にリアリズムがあるのではない。結果、生まれてくるもので、日常の描写からではない、見えないもの、あるものをどう堀り下げるかが大事。

木下順二の『夕鶴』を分析し、対立の本質を話され、現実に歴史が一緒になることを指摘された。――

①群馬中芸の報告（石川祚子）

創立33年目。60年安保後の斗いの中で、この地で人間らしいあり方を――と演劇を！

五周年目、中芸友の会結成。三年後、稽古場と事務所と地域の人々とカンパ活動をし、建設する。

15周年に劇場をつくろと、81年に土地購入、86年に建設。『未来スタジオをつくる千人の会』をつくる。資金三億円を集める。

地域の拠点として、人々の集いが生わる。

教育実践（文民研）――子供の実際、千登校生など。

②劇団支木不の報告

青森演劇鑑賞協会は、新作をやる場合の三つの条件を出している。①実力のある作家がいる。②会員にとって魅力ある俳優がいること。

③その作家や俳優が一度は例会でやっていること。尚且つ評判が良いこと。

青森演観と支木との間で再演と創作などをめぐって議論がなされ、『千年の丘』にって、公開稽古とな、演観側との批評等を含め、例会に持っていく支体の迫力は大きい。制作上、スタッフの力量を高めていくことが大切



であり、演鑑にどんどん入っていくと、中野氏は結んだ。

③劇団静芸の報告（略ー91号参照）

静芸の報告に対して、こばやし氏は、地域文化をどう創るか、具体的対案が必要だ。と。

西会議代表の楠本氏から、リアリズム研究会を発足させた。22、23日西会議総会で討議する。また、組織拡大にも取り組んいる。93年の『ドラマの森』第二集がほぼ完売する。引き続き発行していきたい。と報告があった。

2日目は、こばやしひろし氏から、文字に書けない問題が沢山ある。各劇団が抱えている問題の一つで、若い人が入ってこない。と指摘があった。弘演では、残業などで稽古場の集り状況がわるい、観客も男性は少ない。対して蒼生樹は、二十二、三名が稼働。女性を中心にしながら劇団運営をする。演集も大切なことは女性がやっている老いたかどうかの問題ではない、自分が何んで芝居をやっているかの問題意識だ。

青年劇場の報告は、劇団制の持続のために65才停年制を設け、古い連中が元気なうちに基盤を作って次代へ渡す。しかし創造面の継承が難しい。だいこん座は年二回公演をどう続けるかで悩み、すがおは、若い子が中心でキャラメルボックス路線で活性化。すかさずこばやしさんが、あまりメッセージがない方がいいの？

火の鳥では23人中7人が実動、運営委員会は男性一、女性六。現状をどうかするか、考えている。京浜協同劇団では、創立時、男性が多かったが、女性は下から支えて来た。今、稽古場建設期のような賭るものがあった時はいいが、五、六人の中堅どころが来なくなった。どういう劇団にするか、成り行きまかせではいけない、地域に影響力を与える劇団にするために、自己の人生を賭けられるかが問われる。青年劇場では研究生が今年は一人も入ってこない、とマスコミ指向性者の増大。

すがおの加藤氏から、韓国シアーの報告がなされた（本号を参照ー略）。

討論のあと。各ブロックでのゼミナールの準備状況や企画の報告があった。そして、運動方針の決定である。特に、来年夏の全日本演劇フェスティバル（神戸）の参加をどうするか各ブロックは討議を深めることが確認された。

閉会のあいさつでこばやしひろし議長団代表はー。

アジアの時代であり、地方の時代だ。地方が文化を創る力、地域に応える力をどつから創るのか。今、創っておかないと人々から見離される、これからの二十年、準備を重ねていかなければならない。レパートリーの再生産に苦しみ、再生産の基盤が弱い。生々とした目が輝く活動が出来るよう、力を注ごう。

再生産の基盤を創ろう。

――――　散会　――――（文責　境野）

# 足下が崩れた時代のリアリズム演劇

## ――「西会議」総会から――

栗原　省（劇団いこら）

会　場　山口市湯田温泉「かめ福本館」
日　時　一九九六年八月二三日（金）十四時から
　　二四日（土）十五時まで。

総会参加劇団
劇団京芸、人間座、関西芸術座、劇団きづがわ
劇団大阪、劇団コーロ、劇団息吹、劇団四紀会
劇団どろ、劇団かすがい、劇団月曜会、劇団若者座
演劇サークル・トラム、劇団演劇街、劇団あしぶえ
劇団こじか座、福岡現代劇場、劇団生活舞台
（一八劇団・二九人）
個人会員　栗原　省（劇団いこら・西日本劇作家の会）
東会議　こばやし　ひろし（劇団はぐるま・全日本リアリズム演劇会議議長団長）
総会議長　尼崎　安秀（劇団若者座）
　　堀江　博之（劇団大阪）

### ■仲・こばやし両議長の挨拶から

仲議長
今まで日本人は「自分さえしっかりしていれば何とかなる。」と頑張ってきた。だが、今はそれじゃどうにもならないような大きな動きが濃霧のよう　に立ち籠め、未来が見えない状況が生まれている。
未曾有の巨大企業支配や、不可解極まる政党政派の離合集散、文化面でも文化庁を中心とする文化行政の迷走や見当違いな地方文化への関心など、どの一つとっても私達の劇団活動に直接間接関わるような課題がつぎつぎに生じています。
私達はその現実に立って、自分たちの創造の視点を絶えず自己点検したり、自分たちの活動の存在意義（レーゾンデートル）を見つめ直しする作業が必要になっています。（として、「二国問題」や「アートプラン21」「文化振興基金」「シアター・オリンピックス静岡の問題（『演劇会議』91号参照）」等にも触れたあと）
これまでの「文化の時代」の発想はもっぱらハード面止まりでしたが、今日ではソフト面まで中央集権的な発想を地方に押しつけてきているのが特徴です。（中略）創造的力量をどう蓄積するか？　広範な観客と結びつき高い舞台成果を生み出すには今何が必要か？　二十一世紀に向かう大きな時代の転換期にふさわしい全り演運動の在り方は？　等、スケールの大きい論議を期待します。

こばやし議長
東会議も総会がおわりました。全り演も含め時代は確実に曲がり角に来ていると実感しています。
特に、私もそうですが、社会機構、経済機構、政治も文化も「高齢化社会」に入っているというのが今日の特徴です。時代が青年期、壮年期から老年期に移ったのです。
我々の成長期にはなすびのヘタからご飯の一粒まで捨てられなかった。（と、ここで「先進国日本の飽食、ムダや食べ残し、ゴミ廃棄物、電力のムダ使い」と「後進国の食料事情や清貧状況」を比較し）
こういう国、こういう社会には未来はありません。
この飽食老化状況は我々も例外ではありません。
全り演各劇団はレパートリーの再生産力が確実に衰弱しています。
その点、専門劇団は食っていかなければなりませんので流石に必死です。
「青年劇場」にしても「銅鑼」にしても頑張っていますが、非専門劇団からはレパの再生産力は出てこない。
平和憲法50年の大きな出来事は沖縄県が「地方の時代」をはっきりと方向づけた点です。沖縄の米兵による少女暴行事件に端を発した今回の問題は、地方から中央行政に対し「待った」をかけた、日本の歴史で初めての出来事です。「自治」を行政、司法両面で明確に提示したのです。
文化は本来、民衆が生活の中で、生きる営みの中で作られるものです。文化が人々の生活や心を結びつけてきたのです。文化が地方を支えて来たのです。

――――（中　略）――――

我々リアリズム劇を政府や自治体に援助させることは

我々が出した税金を再交付をさせることです。沖縄の太田知事が「待った！」をかけたのは、地方自治の原理であり、われわれも文化の面から中央の恣意的政治的な政策に「待った」をかける「文化の自治能力」を蓄積しなければなりません。21世紀を展望できる全リ演活動を切り開いて行きたいものであります。

## ■若い劇団員は元気。古参団員は老いる。

事務局報告のあと、出席者の自己紹介を兼ねた簡単な劇団報告を行ったが、面白かったのは「若い劇団員は元気」とか「なぜ若い団員が増えている」という報告が多かったことだ（「どろ」「トラム」「きづかわ」「生活舞台」「かすがい」「演劇街」「京芸」「関西芸術座」等）。

「京芸」の場合は制作の小澤文也氏が逝去され一時は途方に暮れたが、全力で危機を切り抜け、制作体制も立てなおし、正常に戻し、一方若い団員も増えて何回目かの再出発を果たした、と藤沢薫氏の報告。

「生活舞台」は三月に『多喜二』（前川史郎作・高尾豊演出・市民会館）をやった後、入団希望者がふえた（十人。内八人が二〇代）。なぜそうなったか未だに分からないが『多喜二』のような作品を見て入団を希望してくるなんて奇妙な現象で、我ながら理解に苦しんでいる、と高尾豊氏の報告。「関西芸術座」も研究生が元気がよい、という報告。

「若い団員が元気」という報告の裏腹が「だんだん辛んどくなってきた。」「高齢化してしまい結集がわるい。」「老躯に鞭打って頑張っている。」等各劇団の中心メンバーの率直な発言だが、当然年々歳々人は老いるのは当然 として、今年の総会の特徴は、単なる世代論や若者論ではなく、今まで自分達がそこに立ち、一歩一歩踏みしめてきた足元に大きく開いた亀裂の底の暗やみを凝視し、その現実と芸術創造のはざまにある深さを計ろうとする真摯なリアリスト視点が光っていた点にある、と思った。

## ■いくつかの特別報告

運営委員会からあらかじめいくつかの劇団に特別報告を依頼した。

職業劇団「コーロ」の場合、「劇団大阪」の問題点、田畑実さん亡き後の「人間座」、八雲村に根を据えた「あしぶえ」の場合、阪神大震災後の「四紀会」の五劇団。それぞれ実に特徴的な報告だった。

### 劇団コーロの場合

——一作一作に外部からの作品提供、演出招待を
やり創造の新鮮さを求め続ける職業劇団——

現在最も精力的な活動をやっている職業劇団。稽古場も



新築し、昨年度『だれが石を投げたのか?』（ふじたあさや脚本演出）は大阪新劇フェステバル作品賞を受賞しました。幼・小学低学年対象、小学高学年対象、中・高校生対象、一般対象と年間八本から十本の作品を作りつづけ、作者・演出家を積極的に外部から招き、オリジナル作品に挑戦し続けているのがこの劇団の魅力。

たとえば昨年度は前出『だれが石を投げたのか?』以外に名木田恵子作・高瀬久男脚本・演出『ときめく時にさそわれて』。さねとうあきら作・熊井宏之演出『れんげまんだら』。斎藤洋作・久野春光脚本・幸晃彦演出『おばけ旅なん者ひなた丸』。かたおかしろう作・茂山千之丞演出『天満のとらやん』。斎藤洋作・つげくわえ脚本・熊井宏之演出『ベンガル虎の少年は……』。太田千恵子作・ふじたあさや脚本・演出『私が私と出会う時』。森田博作『わいどま、ぎゃいうとたたききるど』。かたおかしろう作・演出『原爆に夫を奪われて』。森南海子作・さねとうあきら脚色『千人針へのレクイエム』そして現在、川人博作・藤田傳、沼田幸二脚本・藤田傳演出『刻を踏む』で過労死問題を素材にした問題作を公演中と言った具合。わずか26名の劇団員でよくまあ、これだけの作品をつくり、公演し続けられるものだと驚嘆するばかりである。

創造問題をめぐって退団者も出ているなかで「平和と民主主義をめざす良質な作品を!」を合い言葉に一貫した姿勢を貫きながら、勿論職業劇団であるから「作品の質を高めながら収入を確保」しなければならない。

外部からの作家や演出家を貪欲に求めながら、常に創造的に新鮮な舞台つくりに取り組む「劇団コーロ」の姿勢はもはや全国的に注目されてよい実績を積み重ねてきた。

総会では劇団事務局を担当されている四ッ橋千代子さんのご報告を中心に経営面、組織運営面、創造面など各面にわたってかなりつっこんだ質疑がされた。

ここでも学校公演や親子劇場公演、自主公演等の公演形態に急速な変化が生まれ、特に学校教育にゆとりがなくなって演劇観賞そのものが減少の一途を辿る傾向が今後劇団経営に深刻な影響を及ぼしてくるという問題が浮き彫りされ、関西芸術座や劇団京芸などからも同じ問題がだされた。劇団員が殺人的なスケジュールをこなしても総水上げは減少気味で、平均年収の確保も難しく「個人の犠牲なしに創造は不可能」という現状をどう打開するか？ いつも変わらぬ大きな問題であると痛感。

### 「劇団大阪」の場合

——劇団としてのバランスや力量がますます充実し
円熟の舞台創造を目指すアマチュア劇団——

久しく「若い劇団」として創造面、運営面、劇団員の充実面各面で西会議だけでなくアマチュア演劇界の「希望の

星」と言われてきた「劇団大阪」もはや創立二十三年になった。現在劇団員三十九名の平均年齢が四十七歳ときいて一同「ええっ！」と驚き、次には「そうかぁ」と納得したような嗟嘆の声が漏れた。人生無情である。二十四歳の若者が二十三年たって四十七歳にならなかったら不思議。

新入団者を募集するためのチラシを作って撒いたが一人も来なかった。このチラシビラをめぐって晩の交流会で劇団大阪の杉本氏と京芸の藤沢氏の間で興味深い激論？ が交わされ、外野席の面々も大いに沸いたり、考えさせられたりしたそうだ、私は残念ながらそこに居らず又聞きだが問題のそのチラシは

劇団大阪研究生募集！

「今のままじゃ、あかんなぁ、なんとかせんと。退屈な日常の繰り返しだけやったら、やっぱりあかん。働いて給料もらって、呑みに行ったり、カラオケ行ったり、まぁ、それはそれで楽しいんやけど、なんか物足らん。なんかそれだけと違うような気イするのは自分だけ？ （カーツ）と熱くなるような、（自分のこと好きになれるような）（体ごとぶつかって行けるような、なんか。）気がつくといつもそれを探しているような気がする。」

そんな人は今すぐ「劇団大阪のドア」を叩きなさい。

あなたが探している「なんか」が見つかります。体ごとぶつかってきなさい。やるで！

A4紙縦。真ん中にチンバンジー（？）の写真がありそのまわりに上記のコピーがイラストされていて、なかなか迫力のあるチラシである。何でも「何や、これは？《体ごとぶつかってきなさい！》なんてまるでファッシズムじゃないか？」と藤沢さんが酔言を吐けば、杉本さんが、「なんでや？ 今のアパシー（無気力）状態におかれている若者は本当は体ごとぶつかれる何かを求めている、と思うからこそ、そのものズバリ、コピーにしたのや。」と反酔論し、両論に分かれて一座も侃々諤々とか。

劇団代表の熊本氏は「《劇団大阪》というようなネーミング自体イメージが古く映るらしい。《しにせの年寄劇団？》と言う感じかなあ。それと、仕事がやたらに忙しくなり結集や団費納入もわるくなっている。」と、こばやしさんの冒頭挨拶じゃないが「劇団老化状況」の報告された。

たしかに上記チラシのカッコで括ったセリフなどいかにも「年寄から見た若者像」という感じで、私も「これじゃあ魅力はないなあ」と思った。こういうひとつの価値観を押しつける印象のコピーは当節のヤングの一番敬遠する奴だろう。しかし、春秋の定期公演と研究生公演をきっちりやり、これまでの新作の単発公演から再演、再再演で「こ



れがうちの十八番や」と言える舞台づくりの姿勢を示したこと（近石綏子作・熊本一演出『楽園終着駅』）や、合同公演への出演、他のプロデュース公演の演出などに加え、西会議の事務局を一手に引き受けてくれていることなど、「劇団大阪」の相変わらずのエネルギッシュな活動ぶりには、私など年令では計れない、力の蓄積を感じてしまう。

ただ、注文すれば創造面の荒っぽさがやや目立ち、もっと丁寧な仕事をして欲しいという思いがある。高齢化というより「創造力の年輪が重なり、芸にみがきがかかってきた」と言われる「劇団大阪」であって欲しい、と思った。

## 「人間座」の場合

——創造の中心田畑実氏を失い、その遺志をついで原点から出発し直した「人間座」の報告——

創立者の田畑実氏が死去されて、早いものでこの十二月二十四日が満二年目の命日になる。

今回『田畑実戯曲集（続編）』（出版元は『田畑実戯曲集』と同じく汐文社。三千円）が出版され、田畑さんの業績は戯曲集二冊の中に凝縮された。ちなみに装丁は板坂晋治氏。

田畑さんを失った人間座がその悲しみからどう立ち直ってくれるかが西会議にとっての大きな心配だった。しかし菱井喜美子さん、芦田鉄雄さんなどを中心に今年三月田畑さんの『霰の谷に』を「田畑実追悼公演」として公演し「十三夜会奨励賞」を受賞した。この公演について菱井さんは……

座の創造の支柱であった田畑が何を考え、どのような演劇を理想としてやってきたか、また、これからの座の取るべき道筋を考えるためにも、再演する必要があった。……と書いておられた。

芦田氏の「戦後五〇年たっても、忘れて良いことと忘れてはいけないことがある。市内の中、高校生や先生方との出会いを通して、そのことを痛感する『霰の谷に』は「人間座」の原点を見つめ直す大事な公演だった。お陰で良い舞台になった。課題は多いが、田畑の遺志を継いで活動を続けて行きたい。」という発言には重みがあった。

風俗的で表面的な戯曲が氾濫する中で、田畑さんの歴史をまともに見つめた緻密な作品の意義はますます大きくなってきている。戯曲集のご購読をお願いしたい。

## 「しいの実シアター」と「劇団あしぶえ」

——自治体とタイアップして「しいの実シアター」を建設。八雲村を拠点に活動をスタートした「あしぶえ」の一年は？——

昨年の今頃は、木の香が匂う出来たてほやほやの「しいの実シアター」を見学して溜息をついていた。何とあたた

かい、何とすばらしい演劇空間であることか！　島根県八雲村にしっかりと根をおろした「劇団あしぶえ」のお世話で持たれた「九五年度総会」と「星降る里の演劇フェスティバル」は西会議の歴史に残る感動的な集会であった。

それから一年。「皆さんに《「あしぶえ」は大丈夫だろうか？　とご心配を頂いておりますが、順調です》」と爽やかな園山土筆さんの冒頭の挨拶に一同は笑いと拍手。

この劇団の凄さは一本の作品を何ステージでも繰り返しやり続け、芸術的完成度を追求する貪欲さにある。

『セロ弾きのゴーシュ』（園山土筆脚本・演出）は今年で十二ステージ　通算で七十三ステージ。『おこんの初恋』（北条秀司作・園山土筆演出）が今年八ステージ、通算三十七ステージになるという。

地元八雲村住民との交流も活発だ。、アート・ボランティア制度をつくり現在十四人の人が衣裳製作や食事の世話、受け付け、グッズ販売、草取りや掃除、ワープロうちから小道具作り、キャスト出演まで参加してくれている。

『おこんの初恋』の「しいの実シアター」公演八ステージの場合、初日までにチケットは完売され（一〇五六人、ちなみに「しいの実シアター」は一〇〇人劇場）その内三〇％が県外の観客、六〇％が県内で内半分が村内のお客さんという観客構成であった。

工費三億円の「しいの実シアター」を創造の根拠地として自由に使えるようになり「劇団あしぶえ」の活動は飛躍的に拡大した。「シアター」では自分たちの稽古や公演以外に、小さなコンサート、県内の文化団体の会議、障害者劇団の公演などが催され、さらに、見学者の応接、シアターの管理など多忙を極めるようになり、事務処理の能率化のためパソコン二台を可動させている。

創造面でも音響、照明のレベルが上がり裏がしっかりしてきたし、研究生制度もオーデションで開始し、来年は新年の仕込に入る予定だと言う。

八雲村の対応も最初は相当の反対があったようだが、過疎の一途を辿っていた現地平原地区は一気に活気づき、一年たった今では「演劇の里八雲村」として、劇団が村起こし運動の柱を担っている形になった。

まさに「地域に根ざす劇団活動」という全リ演の願いを地でいく「劇団あしぶえ」の動向は今後ますます注目され、日本のウーマンリブの演劇部門でのアバンギャルドの道をさらに切り開いて下さい。

## 阪神大震災後の「劇団四紀会」の活動

――阪神大震災から一年半。いまだ復興のメドも十分ではないのに風化が目立ってきた。大空襲、大震災と神戸の歴史に重ねて災害の体験から劇団活動を再構築しようと苦闘する「四紀会」――



稽古場が崩れ、家が倒壊し、豊かで平和な生活だった筈の日常が一瞬に失われ、安全で大丈夫と信じて疑わなかった大地が崩壊した。阪神大震災は飽食と豊かさ神話に浸かっていた日本人の足元に底しれない洞穴を開けた。

「四紀会」の梶氏の報告は厳しい。

ビルが崩れて炎えた。必死で救いを求めた。茶髪の青年が危険を忘れて倒壊した梁の下の隣人を救った。地域や自治会の連帯がどれほど大事か身に染みて知った。神戸の市民は人の暖かさと行政の冷たさを体験した。

だが、あれから一年半にして、日本は神戸を捨て、家を待つ人々は今尚仮設住宅に住み、中には孤独死していく人達を忘れ、大震災は物凄いスピードで風化しつつあるというのが梶さんの現状認識だ。

「私は《「四紀会」は職業劇団ではないが、創造の面でも劇団のありかたでも専門劇団にないものを持っている》と自負していました。しかし大地震があり劇団を心配して駆け付けたのは五〇人団員中二人でした。これはショックでした。例えば「青い森」という専門劇団の場合は、中心の乾さんの自宅も消失したのに、皆一〇時には劇団稽古場に駆け付け、一人来ない団員がいるのに気付いて皆で行って倒壊した家の中から救いだしています。アマチュア劇団の甘さを思い知りました。そこからの出発でした。人間と人間の濃密な関係、見知らぬ他人も救けずにはいられないという原点のような関係、そこに目を向けなければ芝居づくりは出来ない、という思いです。これまで「地域」「地域」と言ってきたことが、本当に剥ぎ出しの私たちの課題として見えてきたのです。」と梶報告。

そこから『火の華サイタ』（内田昌夫、桜井敏作・岸本敏郎演出）、『五〇年目の戦場・神戸』（車木蓉子作・合田幸平演出）、『ここにいます』（仲比呂志・桐生薗・梶武史作、梶武史演出）ほか創作劇を軸に年間一〇ステージを四千人を越える観客に見てもらうという火の玉のような活動が再展開されたのだと思う。

貝原兵庫県知事は文化都市づくりを目指し、演劇分野でも「ピッコロ劇団」（団員二〇人、ちなみに月給一八万円）の運営、西宮に新オリエンタル劇場を目指し「現代芸術劇場」を建設計画し、一作に何千万円かの制作費を県費から投資する予定という。これらは知事の友人の山崎正和氏などがブレーンとなり、地元の文化団体とは全く無関係に神戸を中央文化の市場化するプランとしてすすめられている。（県の地元劇団への助成金は七劇団で年間五〇万円）こういった中央集権的政治発想を逆転させ、地域自身が自分の地域を作りかえ、それぞれの劇団が創造活動を通して地域の運命を担うようになっていきたい。……という梶氏の報告で特別報告は終わった。

## ■リアリズム演劇の豊穣な実りをめざし

「特別報告」をめぐってのつっこんだ討議があり、それはそれで中身の濃い内容だったが紙面の関係で割愛し、二日目、昨年度総会に続く「我々のリアリズム演劇」をめぐる討議に言及したい。

「演劇会議」誌もこの問題を継続的に取り上げるようになり、大橋喜一氏の幾つかの文章や、先月号には「大橋氏に宛てて」という形で野村喬氏から論文も頂いた。また西会議運営委員会は、総会に先立ちあらかじめ参考資料として、ドイツ演劇を専攻される市川明氏の「ドイツのリアリズム演劇」と広渡常敏氏の「稽古場の手帖」掲載の「二十一世紀へのパサージュを考える」を各劇団に送った。

総会では、私が「リアリズム演劇論・リアリズム演劇運動・リアリティについてのメモ」という小論を報告した。(本誌に一部掲載)この小論は、昨年の総会で用語の理解の混乱や誤解があり、あるいは第三者には理解できない歴史的用語が説明抜きで出たりして論議が噛み合い難かったことから、リアリズム演劇をめぐる概念を整理し論議の方向についての「私見」をまとめたものであった。

栗原報告が出されたことで発言がし易くなり、それぞれの劇団が自分たちがやっていることを位置付けたり検討したりする上で多少役に立ったろうが、理論が生きた創造活動の血肉になるためには、今後もっともっと作品や舞台に即した緻密な討議が必要だと思う。

とにもかくにもこの総会で、私たちにとっての「現代のリアリズム演劇論」の論議が一応の軌道にのったと言えるだろう。

会議で出された主な発言を拾ってみよう。

◆現実の矛盾を描き、それを克服するための人々の戦いを描く。そこには自分の中にある腐敗から隣の人の中の腐敗まで描きだす視線が必要だ、それが私のリアリズム演劇の姿勢だ。

(こばやしひろし氏)

こばやしさんは情熱をこめて語った。「脚本を書くとき私は今日の現実の歴史性を考える。矛盾が一杯ある。その矛盾はすべて歴史的な矛盾として捉えられる。そして、それがどうしたら克服されるか、という観点を私は重視する。たとえば今日の飽食やムダ使い。原子力発電所で発電してもクーラーと暖房が要らない春と秋は捨てなければならない。貯蔵は出来ない。発電する限りクーラーや暖房につかりきり、体に自然に生きることを忘れるように慣れさせていかなければならない、という矛盾。その逆転した生活が人間をどうむしばんでいるか? あらゆるゴミ、原子力のゴミ、車や電気製品づくめになった生活のゴミ、便利さと引き替えのゴミ……私たちは皆未来に向かって生きたいと願っているのに、現実にはそういったゴミの中で未来への



志向が腐っていく姿が辛い。その腐敗は私自身の中から隣の人の中にまで及んでいる。その自分や隣人の中にある矛盾を描き切らなければリアリズム演劇は生まれない。

明日を夢見るためにこういう一杯ある矛盾を矛盾として歴史性の中で描くのが私のリアリズム演劇の視点だ」

◆「リアリズム演劇」というのが一流派を指したり、ある決まった表現方法をさすものではなく、「現実に対する態度」であるということはわかる。しかし同じ作品を見て自分が感動しても、若い団員は「おもろない」と全く反対の反応で実も蓋もない。その場合果たして共通のメッセージがあるのか、と分からなくなってしまう。生きてきた時代によってリアリズム演劇は違うものか?

(杉本進氏)

自分が感じたまま、面白かったら面白い、でいいじゃない。なにか固定した価値観を基準にして、それに合うかどうか? という視点でみると、それが演劇評価の基準になり「皆をそこに合わせよう」とか「引き上げよう」という変な啓蒙意識が生まれる。「民主的演劇の普及」なんて、それこそ土屋清が言っていた「尊大なリアリズム」になってしまう。リアリズムというのはあくまで創造上の見方であって、野村喬さんは「そんなものはなかったのだ」というが、決して幻影なんかじゃなく存在した。その否定的な影響は我々のなかにも存在した。久保栄や村山知義や久坂栄二郎の作品にみられるテーマ主義、政治主義の正体をもっと明確に批判し克服していく必要がある。(藤沢薫氏)

◆メッセージのない芝居、メッセージを否定する芝居にたいしては何も言えない。ただ「面白い」「面白くない」だけでいいのだろうか?

(武田隆良氏)

「面白さ」だけとか「うけ」だけをねらった芝居はつまらない。「面白い」という感動の内容は、そこからなにか「発見がある」「発見する」ということだと思う。メッセージがどんなに立派でも、舞台の上でリアリティがなければ芝居じゃない。よくメッセージが先にあって、それを絵解きする芝居があるが、それはリアリズム演劇とはいえないのではないか。この芝居は自分の世界観に合っているから面白い、合っていないから面白くない、という見方があるとすれば、それは下らない見方だ。

(合田幸平氏)

◆『思い出してよ』(窪田吉広作・斎藤誠演出)は猛烈社員が過労死してからも幽霊になって働く話だがラストでその奥さんが死んだ夫の代わりに猛烈社員になって働く。しかし「それは夢だった」で終わりお客さんからも「白ける」という批判があった。作家の中にも観客の中にも、どっかで救いが欲しいという思いがあるのは確かだ。その救いを「実は夢だった」と理屈っぽく求めるところに悪い意味の「リアリズム演劇」の残りかすがあったのだろうか?

(堀江博之氏)

ぼく達の世代は戦後民主主義運動の恩恵を受けて成長しそれを引きずっている世代だ。だから常に、元気な第一世代（栗原論文の用語）が全リ演の運動に積極的に取り組んでいる姿を見ながら、自分たちの生き方を模索してきた。

それだけに「リアリズム演劇」の歴史や問題点や現代の課題をもっともっと知りたいという思いが強い。今後も作品論、演技論としてのリアリズムを深めていきたい。そしてリアリティのある舞台づくりの栄養にしていきたい。

（熊本一氏）

× ×

総会後、「西会議リアリズム検討小委員会」を持って、栗原の「メモ」を一応の見取り図として（ただし、その中の「地域に根ざす演劇運動とリアリズム演劇」についての所論は除き）その中から必要な論点をピックアップした。そして、適当な時期に公開のパネル形式でそれらの問題点を論議することにした。その論点の大要は、

1. リアリズムは現実認識の視点を指す用語であり、リアリズム演劇の「手法」は多様であることを重視することが必要。
2. 社会主義リアリズム論の誤りを明確にすること。
3. 狭い政治主義、テーマ主義とリアリズム演劇は本来無縁、有害。しかしその残滓は克服されていない。「素材によりかかった作品の作り方」など。
4. 「自然主義」とリアリズムの違いを討議すること。
5. 各劇団の歴史に即した演出・演技面での「リアリティ追求の方法論（メソッド）」を具体的に出しあって論議すること。演出・演技でのリアリティを抜きにしたリアリズム演劇論は抽象論になるのではないか。
6. 「創造」と「観客」の関係を「芝居の面白さ」「楽しさ」を軸に、作る側、見る側の両面から深めること。
7. 「全リ演加盟のしおり」中の「国民の民主的運動と結びついたリアリズム演劇」「リアリズム演劇の創造・普及をめざす劇団の集まり」という規定は検討を要しないか？

等々である。

多様で豊穣な、見応えのある舞台を生み出すために、今後も多方面の方々と意見を交わしながら、私たちの「創造理念」を深めて行きたい。

それはあくまでも作品の質を高めることが目的であり、曾てそうだったような無益有害な単なる「理論闘争」に走らないよう自戒しながらすすめていきたいと思います。

## ■来年の「全リ演演劇フェスティヴァル」は「震災の街神戸」で開催！

事務局ニュースの重複（中　略）



今日のリアリズムシリーズ④

# リアリズム演劇論・リアリズム演劇運動と「リアリティ」についてのメモ

栗原　省（劇団いこら）

一九九五年度西会議総会（島根）に「現代のリアリズム演劇論を、それぞれの劇団の実践に即して検討し深めよう」という議題が提起されました。しかしその年の総会では十分議論が深められなかったため、熊本、栗原、猿渡、藤沢の四人で「西会議リアリズム演劇検討小委員会」をつくり、問題点を整理するよう総会から付託されました。だが「小委員会」も十分論議を尽せないまま、本年の総会が近づいたため、とりあえず栗原が個人論文をまとめ一九九六年総会に討議資料として出したのが、この小文です（以下「このメモを書くに至った詳細な経過」「私がリアリズム演劇にこだわる理由」（1）（2）省略）

## 私が「リアリズム演劇」にこだわる理由

（3）以前はよく「西リ演」の規約や「よびかけ」について論議し、「西リ演」という組織の理念や存在意義について討議しました。旧「西リ演」規約中〈会の性格〉には「西リ演は、リアリズム演劇の確立と発展をめざし西日本各地で演劇活動を進めている劇団の協議体である」と、ありました。

西と東が合体して「全日本リアリズム演劇会議」という全国的演劇運動組織になったのは十五年前の一九八一年八月、その「全リ演」加盟を呼び掛けるチラシは「地域に根ざし、国民の民主的な運動と結びついたリアリズム演劇の創造、普及を目指す劇団の集まり」となっています。

ですから「全リ演」に加盟した劇団は、「リアリズム演劇の創造、普及」という共通目的、または、共感をもって集まった劇団です。

「西日本リアリズム演劇会議」の創立が一九六二年七月、「東」が翌年八月ですから、私達は三十三、四年間も「リアリズム演劇の創造、普及」を標榜し、その舞台作りに苦

労してきたわけです。

こばやしひろし氏「東日本リアリズム演劇会議の歩み―東リ演二〇年史―」（「演劇会議五四号）に詳述されているように、日本の民主主義運動の高揚と衰退、中国、ソ連など社会主義諸国の変質や崩壊、巨大企業の国家支配に伴う日本の政治、経済、社会構造や生活意識の変化など、歴史の現実の方が、私達の願望やおもわくを遙かにしのぐスピードで変貌し、現実を描こうにも、その「現実」が見えない状況の中で、作家も劇団も必死で「リアリズム演劇」の創造に苦しんできたのです。

そして、今から見れば滑稽なくらい真剣に、色々な呼び方で作品を性格づけ創造理論を構築しようとしてきました。

一九五〇年代までは、社会主義建設をめざすたたかいをえがく「社会主義リアリズム」というスローガンが村山知義氏などから提唱され、安保条約の成立後の屈折した現実をえがく「新しいリアリズム」の模索から、現実の変革をめざす戦いをえがく「変革のリアリズム」普通の市民の平凡な日常生活をえがかなければ本当の現実をえがくことにはならないという「日常性のリアリズム」等々。

どうして、こんなに「全リ演」は「リアリズム演劇に固執して来、固執しているのか？　そこの根っ子のところをもはや考える必要はなくなったのでしょうか？

勿論、理屈ばかりこねていても時間の無駄です。

また「これはリアリズム、これは非リアリズム」と、レッテル張りをやったところで意味はないでしょう。

けれど「全リ演」が「リアリズム演劇」を標榜して活動し続ける意味については、日々新たに検討しなければならないと、私は思います。

岸田国士をやり、井上ひさし、別役実、長谷川伸をやりながら（やって当たり前です。）検討すべきです。

(4)「演劇会議」九一号の野村喬氏「芝居とリアリズムの関係について」で、氏は、

「わたしはリアリズム演劇のスローガンは：イリュージョンでしかないと断言します。」

「はっきり言って、（六〇年安保後の）いわゆる進歩的演劇の内側は、戦前の世界観（イデオロギー）芸術認識から一歩も出ていなかったのです。つまり、主題や題材ばかり、目を向けがちでした。いわゆるテーマ主義というしろものです。」

「問題は、なんでもリアリズムに帰して来た従来の考えかたであり、リアリズムか反リアリズムか、二元対立を説いてきたことにあります。むしろ、積極的に、リアリズム演劇なんてものは、実は存在しない、と認識すべきなのです。だいたい、テーマ主義を覆い隠すための隠れ簑にリアリズムという言葉をスローガンにした点にこそ問題の所在があったのです。」と、所論を述べておられます。



演劇は同じフィクションでも文字や美術と違って、演技演出のリアリティ、その根底にあるドラマに本質があること。「現実」の題材や主題に安易に乗っかって、それが演劇だなどと考えたり、狭い党派的主張を押しつけ、芝居をやっているなどと錯覚するのはいい加減に止めたらどうだ、という 趣旨だと、私は読みました。

そして、私は「リアリズム演劇の創造、普及」を標榜す集団の機関誌「演劇会議」に「リアリズム演劇なんてイリュージョンに過ぎないのだ。むしろ、積極的に、リアリズム演劇なんてもんは、実は存在しないと認識すべきだ。」と、たとえ「大橋氏論文への見解」と断り書きされての文章にせよ、野村氏が寄稿されたことに大変挑発され、また非常に面白く読みました。

私は私なりに、この文章を次のように読みました。大橋喜一氏を劇作家として高く評価し「テアトロ」誌につぎつぎと大橋作品を紹介されて来た野村さんですが、私は、「違うよ、大橋さん」と歯ぎしりする思いでいわゆる「リアリズム演劇」の行く末を凝視して来たのではないか、と思ったりしました。

土屋清氏の『河』を素材に野村氏が大橋氏にあてて書いた『新人劇作家への手紙（再信）』（「テアトロ」一九六五・一〇）で「『河』の反リアリズム」を批判しながら「劇行為」は劇的事件の説明や合理化やこじつけであってはならない、と噛んで含めるように述べ、それに反論した大橋氏の「反リアリズムについて」という文章（「テアトロ」七六・一一）に対しては「ながらく日本の新劇の一つの流れの中にあった『リアリズム』論争の亡霊にそろそろピリオドを打ってしまいたい」（「テアトロ」（七七・一一）と、文末で結んだ野村氏でしたから、今回の論稿はその延長線で書かれたものと思います。いい加減に「リアリズム論争の亡霊」と縁を切ったらどうですか、と言ったにもかわらず、その後も大橋氏が『リアリズム派は（註・大橋、こばやしひろし、芳地隆介三氏を指す。）はなぜ書くのに苦しんでいるのか？』（「演劇会議」八二・一一と八三・八）、『ソ連邦の解体と社会主義リアリズム』（「演劇会議」九三・五）、『戦後五〇年をよろめきながら―敗戦五〇年をむかえて』（「演劇会議」九五・一一）と、「リアリズム探求」の執念ともいえる論究が続くに至って、野村氏はついに「いつまで幻影を追うのか？」と「演劇会議」誌だからの文章を寄せられたのでしょう。

それはそれとしても劇的な主題によっかかって、何か演劇を作っていると錯覚している創造姿勢の甘さ、中途半端さとか、やれ大状況の把握がどうだとか、科学的社会主義理論に合致するとかしないとか、やれ「何何リアリズム」などとばかり言っていないで、徹頭徹尾芸術家の目で舞台のリアリティを追求しなきゃいい芝居なんか出来っこない

じゃないか、という野村氏の「全リ演」への叱咤激励だと受けとめて読みました。

そういう自分なりの野村氏の文章の読取りをし、大変衝撃を受け、また啓発されはしたものの、どうも「何か違う」という感じも拭うことが出来ませんでした。

「演劇評論家」「演劇ジャーナリスト」「演劇研究者」として知られる野村氏の造詣の深さや見識には常に驚嘆し誌面を通じ色々教えられて来ましたが、この「何か違う」という実感は、地域演劇しか知らない私の偏狭さから来るのか？　どこが違うのか？　考えたいと思いました。

## 「リアリズム」というコトバの使い方について

「リアリズム」という芸術創造の考え方や態度を示すコトバも、使う人によって内容がまちまちに解釈されていて、そんなことが「リアリズム」論議を混乱させる一因になることが多かったと思います。

また前記野村氏の文章でも指摘されていましたが「リアリズム演劇」を論じるのに「リアリズム文学」「リアリズム美術」や「リアリズム的認識論」を援用し混乱を生むことも多かったと思います。この辺、『論』に陥る陥穽でしょうか？

また「リアリズム」の論議をしているうちに、いつの間にか「リアリティ」（写実性、実在感、存在感、真実性といった、表現にとって一番重視されなければならない価値観を含むコトバ：という意味で私はつかっていますが：）と場合が非常に多かったようです。

野村氏の練達の文章でも、私は読みながら混乱した箇所がありました。それは

本来演技論だった「リアリズム」が政治やイデオロギーに支配されていった演劇の歴史をスケッチされて「リアリズム演劇のスローガンはイリュージョンでしかない。」という断言された後突然「リアリティ」の問題に言及され、平田オリザ氏の作品のリアリティ、三好、井上、岡部氏作品中「パン」「卵」「ベンツ」の扱いの出鱈目さがリアリティをこわすと言及された箇所です。（「演劇会議」九一号十七頁上段十行目～十八頁下段二行目）

私はこの、前後「リアリズム演劇」への言及の間に唐突に（と私には感じられたのですが）「リアリティ」についての文章を挿入された意味がつかめず、混乱しました。

勿論専門家の野村氏に混乱など考えられませんから、読む当方の問題ですが「あれっ、この二つのコトバの関連は？」などと、一瞬考えてしまいました。

私は、その人が「リアリズム」という場合、どういう意味合いで、どういうジャンル（演劇か？　文学か？　美術か？　ときには音楽か？（最近そういう音楽評論を読みましたので）の芸術に関して、どういう目的で使うのだ…



…というようなことを、あらかじめ聞く人や読者に分からせる必要があるように思いました。

皆分かっているつもりで（時には本人にも分かっておらぬまま）ぽんと言うから、聞く方の理解もまちまちになり、話が噛み合わなくなる、ということが多いのではないでしょうか？

## 私の場合（地域・観客・リアリティ）

ここで私は「劇団いこら」の結成事情や地域の観客観・私が「演劇は地域観客に根ざすものでなければならない。」という牢固たる演劇観を持つに至ったいきさつをくどくど書きましたが紙面の関係で二六〇〇字ほど割愛。

（栗原）

そのことを今問題にしている「リアリズム演劇」と「舞台創造でのリアリティ」に即して考えると、私の創造の源泉としての「地域の人々の暮らし」「彼らの生きてきた人生」「彼らの環境」「彼らの嗜好や暮らしの身振り・演技術」等を抜きにした芝居づくりなど、想像もできません。

観客の一人一人の顔が、目が、何を今苦にしており、何をいま楽しみに生きているのか？　どんな舞台を望んでいるのか？　何時から、誰と誰が何人観にこれるか？　そういう地域の観客の「現実」が、私の演劇行動をかりたてます。そういう意味では、私の芝居作りの姿勢は明らかに「リアリズム演劇」を志向しているのです。

「リアリティ（現実）」と一口にいっても、世界の政治経済の仕組みも、そこで右往左往する人類の暮しも、燃えてしまった家の復興も、海や川や山や町や田舎や自然も、只今現在も今に生きる過去も、今を動かす未来への夢も、私の空想のなかの世界も、私のなかの神も、お盆に出てきて欲しい亡き母の幽霊も、宇宙にいるかも知れない生物も……みんなみんな「現実」なのですから、私の「リアリズム演劇」の土台である「地域」なんて、ずいぶん狭い概念ですが、私の演劇想像にとってはこの上ない豊穣無限な世界であると言えます。

でもこれまで自分で自分が恥ずかしくなるような嫌らしい「リアリズム作品」ばかり作ってきました。野村氏も指摘された「テーマ主義」作品で自己満足していた期間も結構長かったと、思い当たります。「部落解放に役立つ演劇」は皆「リアリズム劇」と随分思い上がったりもしました。

大事なことと思いますので前回の総会で皆さんから出された従来の「リアリズム演劇の否定面」も再度紹介します。

① イデオロギー・価値観の押しつけ（四ツ橋）
② 舞台で結論を押しつけ観客の想像力を軽視（四ツ橋）
③ テーマさえ積極的なら、演技や舞台の仕上がりは荒っぽ

くてもいいという安易さ。（四ツ橋）
④作者の願望で書く。だから現実を描きながら甘いロマンチズム作品になる。（栗原）
⑤「現実（歴史的に実際にあったこと）」通りか、どうかでウソ・ホントを判断する。（栗原）
⑥演技面では「ほんまらしさ」「日常的」などをリアリズムと誤解してるんとちゃうやろうか？（西尾）
⑦自分がほんとうはやりたくないものを「世のため人のため」という名目でやってこなかったか。（西尾）
⑧若い団員がやりたい作品は劇団では（非リアリズムだからと）取り上げられない傾向がある。（樋口）
⑨抽象的な作品は「観念劇」、具像なら「リアリズム」という思い込みははないか？　リアリズムにこそ抽象行為が必要なのに。（猿渡）

これらの指摘には「未来」の西尾氏の発言にあるように「日常性リアリズム」（と、いう表現が適当かどうかわかりませんが）と演技での「リアリティ」とがダブッて使われている向きがあります。

私の観客にとっては、どうやら「ほんとうらしさ」ほどいやらしいものはないようです。私自身も役者に舞台で「それらしい」（つまり人物や事柄の真似事めいた）芝居をされると鳥肌が立ちます。

観客は「これは作りごとなのだ。絵空事なのだ」という前提に立つからこそ、例えば目の前で殺人が行われても安心してみられるし、観客としての対処ができるのです。

「これは芝居なのだ。」ということをあからさまに、劇の進行の都度観客に提示し、その前提条件だからこそ生まれる演技や演出の「リアリティ」に打たれ、感動し、爆笑し、役者と共に、生き生きした生命力や、現実では得られない感動、精神の高みを共有するのです。

幸いそういう「リアリティ」をもった演技、演出術を、私達は「能」と「狂言」から学べるし、本来無表情な人形が、人形使いの操り方一つで忽ち生命を吹き込まれ、生き生きと生きて動き出す事を知っています。私が住んでいた町に毎年やってきた淡路人形（殆どよく知られた外題の繰り返しだが）を見る観客の鑑賞態度をみると、観客はストーリーも振りも分かり切っているのに、ある場面では必ず泣き、ある場面では必ず大笑いし、そのくせその間に寿司を食べたり酒を飲んだり……この観衆にとっての「リアリティ」は、何と自分本位でしかも鋭い、と感嘆したものでした。

また、子供の頃から夢中で見た「ドサ廻り」の大衆演劇の舞台。あの絶妙な観客との一体感（それは、新劇が舞台から強制する管理的それとはまったく異質の一体感）を生み出す演技の質に、私は消す事が出来ないほど大きい影響をうけました。彼らは、歌舞伎、新派歌舞伎や新国劇など



からもエキスを吸収したでしょうが、より観客から得たものの方が大きいのです。野外とか狭く小便臭い芝居小屋での演技、演出には特別の工夫がいります。私の村へ来た役者は殆ど近村の部落の農民でした。後に自分が芝居に関わるようになり、私はドサ廻りの小屋へ通い、プレヒトが難しい用語で縷々主張した「異化効果演劇」の一番わかりやすい演技術がこんな身近なところにあったことを発見し殆ど感動しました。

観客にとって虚構の世界こそが「真実（リアリティ）」なのです。観客は舞台が虚構だからこそ、そこに展開される非日常の演技を通し自分自身の「現実」の内にある「真実」をみつめ、共感し感動するのです。

私が考える演劇は、演出家や役者が演技で伝えるメッセージを、観客も自らの演技、擬態で受けとめる約束されたゲームであり共謀の遊び、共同主催の祭祀だと思います。

ですから、もし「演技のリアリティ」を演じる役者や演出家の側の論理から一方的に作り出そうとする作り方では、半分です。スタ・システムの無理も、私は観客の演技法（生活）に合わぬ無理な「役づくり」だという面を重視します。

結局私は「リアリズム論」と、私が考える「リアリティ」の一局面を、「地域に根ざす演劇」論に我田引水したようです。

野村氏の「テーマ主義演劇をリアリズム演劇だなどと言って有り難がるのはもうやめよう。」という所論にうなづきながら「どこか違う」と感じたのは、この点かもしれません。

野村氏の文章は、大橋氏との長年に亘る交信の経緯もあり又「リアリズム演劇」を主張する人々に（「全リ演」もふくめ）特に革新陣営の方針や運動の盛衰や状況の変化や世界観との関わりで、「作品作り」より「論」で侃々諤々する不毛へのいらだちと、演劇を世界観で作ろうとする発想を無くさない限り生きた人間は舞台化出来ないという氏の演劇観から生まれた所論だと、私は思いました。同感なのですが、「どっか違う」という私の意識は今後も課題に残るようです。

■アントナン・アルトーのように演劇が「現実（リアリティ）のミメーシス（模倣）」であることを否定する主張もあるそうですが、現実に根拠をもたない現象はない、という意味でいえば「リアリズム」でない演劇など、存在しないでしょう。また、東京にばかり目をむけているひとの場合は別としても、「リアリズム志向の劇団」が、全リ演参加七十数劇団も含め、全国各地で、自分たちの観客との熱い交流や共感をもって作ってきた舞台の数々や存在意義を否定することは出来ません。「リアリズム演劇」についての、とらえ方は本当に幅広いと思います。

例えば、「演劇がミメーシスならば、演劇は何を模倣すべきなのか。『人間』『自然』『歴史』を表現すべきか。『表層』を示すべきか。または『深層』を示すべきか。演劇という謀体は何らかの意味で現実を具体的に表現するのか。使われる手段はまったく『真実（リアリティ）ではないのか。これらに対するこたえは、現実（リアリティ）の概念の変化するにつれて変わって来ている」（テリーホジソン『西洋演劇用語辞典』四一九）。

「リアリズム・現実（リアリティ）のミメーシス」

……ミメーシスをめざす芸術は、現実の概念が変わるにつれて変化する。現実は、時間と空間の中で人が認識する具象的世界と考えられる。あるいはまた、意識がとらえた現実（存在はするが重さやおおきさが測れない主観的現実）に重きをおくこともある。一方、プラトンのイデア、キリストの神のように超越的本質が考えられる。歴史の変化についての歴史観、世界観と考えるひともある。「無」を究極的現実と見做す人もある。コトバを現実の中心原理と見なす見解もある。

「現実」をどのようにとらえるかによって、劇作家の受け入れる「リアリズム」が決まってくる。……（同上書・四五一頁）

今私が「リアリズム演劇」について自戒したのは

・自分は本当に演劇をつくる立場で現実を見据えているのか？

・社会科学的（政治的・経済学的）な現実のとらえ方を、即芸術的とらえ方とする、すりかえの迷路に陥っていないか？

・自分が参加している社会運動の理論や問題意識を、そのまま創造的視点と錯覚し、人間をその鋳型にはめ込んで描く都合主義的な作劇になっていないか？

・人間を描く、ではなく状況や出来事を描いていないか？

と言った、ごく平凡なことになりそうです。

いい作品を書け、いい舞台を作れってことです。

## 私にとっての「西リ演」

この項で私は「劇団いこら」が「西リ演」に加盟した事情と、その後のいきさつを多分に個人適感傷をこめて書き、最後は再び観客を「数や経営」の視点からのみ見るのでなく「創造のリアリティ」の問題として見ようと強調していますが、二三〇〇字ほど割愛。（要原）

第五には「全日本リアリズム演劇会議」という組織と私の関係についてです。

東西の合同が八一年八月で、当時、私はまだ病気療養中で殆ど廃人同様の状態でした。合同のことは後に「演劇会議」誌で知った程度です。



発病後演劇に復帰するきっかけを作ってくれたのは、一九八三年十一月「演劇集団和歌山」の『泰山木の木の下で』を手伝わせてくれた演出の別院清氏でした。再び舞台づくりに関われた感動を「演劇会議」五六号に書きました。「書く」という仕事が出来たのは、森本景文の激励のおかげです。

さまざまな形で私は「西リ演」という集団に個人的にもとても激励されてきました。

そろりそろりと、カラダを労わりながら、「作家演出者会議」から独立した、「西日本劇作家の会」（土屋清氏の提案で生まれた）などに参加しだしたころ、「演劇会議」に土屋清氏の『尊大なリアリズムから土深いリアリズムへ』という「私にとっての西リ演史」という題の論文が掲載されました。

それは合同を機会に東と西それぞれが「二十年史」のようなものを記録しようというので、東はこばやしひろし氏が書き（演劇会議五四号）、西は土屋氏が書くということになっていた文章で一年遅れの難産でした。（五七号掲載）

土屋さんはこの「私にとっての西リ演史」を書くのに文字通り鑢骨砕心（るこつさいしん）しました。それは……

「戦後史の評価」「政治と芸術、とくに日本共産党の五十年問題とその後の党員作家の苦悩」「党指導部の責任と民衆の責任、土屋氏自身の自己批判」「原水禁運動の分裂と中ソ大国主義による干渉」「はぐるま座問題と西リ演の立場、とくに諸井条次氏の作品評価、叙事と叙情についての論究」という項目（以上は栗原が拾った項目）を見ただけでも、若い方々にはほとんど何のことか想像もつかないような、しかし、私達戦前・戦中・戦後をくぐりぬけ、この国の民主主義運動にいささかでも関わり、その中で芸術創造、就中リアリズム演劇創造の仕事に生命を賭けてきた者にとっては、避けて通るわけには行かない問題に、真正面から体当たりした壮絶な文章でした。

しかし、この論文が「演劇会議」誌に掲載された一九八四年八月頃はすでに日本の社会総体が変化し、「臨調・行革」路線、企業国家・経済大国化、労働運動の企業への屈服・右傾化、反対性運動の衰退、管理主義教育の深まり・子供のアパシー（無気力）・・・等々、日本全体が方向を見失い、土屋さんが必死に総括された「戦後民主主義」が「豊かな日本」によって全面否定される時代になっていました。既に当時、リアリズム演劇運動にも「書けない」「どんな芝居をやっていいか分からない」「劇団が燃えない」「男性の劇団員が過労で劇団に集中できない」「リアリズム演劇には観客が入らない」というぼやきばかりが目立った時代でした。

その一方では、小劇場運動が消長があるにせよ第二世代、

第三世代と次々に若い才能を世に出し、第一世代の別役、清水などの書き手や鈴木忠志など演出家も夫々元気でした。

新劇も井上ひさし、ジェームス・三木などの異才が出、大劇場に至っては「四季」の『キャッツ』、猿之助歌舞伎に象徴されるようなスペクタキュラーな舞台に若者が蝟集するという状況が生まれていました。

演劇は若者の間でブームになり、流行・風俗になってきていました。色々な理由はあるのでしょうが、一つは「社会主義リアリズムでは人間の真の姿は描けないと思い、不条理劇に魅せられた。」と別役実がいうように、「リアリズム派」が必死に世のため人のためと「滅私奉公」したり、自分自身のことは放っておいて他人に説教ばかりしたり、理屈をこねまわしたりしたがる（と、彼らに映った）のにたいして、彼らは徹頭徹尾「人間を描く」「自分にこだわりつづける」「自分のアイデンテティを探す」演劇を好んだことと。もう一つは、商業主義にのること、観客を笑わすこと、感覚的刺激を目的に演じること、マスコミに売れるようになること、そのためにはとにかく目立ったことをやることなど、リアリズム派が従来否定してきた、または、避けてきた方向にぐんぐんつき進んだことでしょう。

それがまた、企業社会にヒットし、取り込まれるところになったのです。

演劇をめぐる価値観や嗜好の変化は西リ演各劇団にとっても他人ごとではなかったと思います。

それかあらぬか、結局土屋清氏が骨身をけずって書きあげた「自分史的西リ演史」は、「西リ演」内で正当に議論される状況ではありませんでした。わずかに、宇津木秀甫氏が反論を寄せただけで（「演劇会議」五八号）、各劇団が土屋氏にならって夫々の「自分史」を書くこともなかったし、土屋さんが四つに組んだ「西リ演」運動の原点とも言える課題と「西リ演」自体が格闘するということもないまま、土屋さんは三年後に消えました。実際、土屋さんはあいう自分に引き付け引きつけた書き方をやるべきではなかったのです。あれでは、論議しようにもできない文章でした。土屋さん。どうして、こばやしさんがやったような、客観的書き方が書けなかったのですか？

いずれにしても、その問題が不問に付されたまま、その後の十二年が経過した点を私は今も無念に思います。

「リアリズム演劇」をことさらに標榜する以上、その積極的な意味が、集団内の各劇団の中で生き生きと意識され、そのことが自分たちが作っている舞台にどう関わっているのか検討されるのは当然です。自分たちの演劇が「全リ演」とどの点でつながっているのだろうか？　組織的にだけのつながりか？　創造の理念でか？　創造方法でか？　あるいは人間関係とか心情や趣向の面でか？　それとも政治的立場とか、経済的利害関係からか？



土屋さんは『西リ演』は単なる地域劇団の集まりか？　そんなら『地域劇団協議会』とでもしたらええじゃろう！と、怒鳴ったことがあります。

その土屋さんは逝き、黒沢参吉さんも佐間雄二さんも逝き、萩坂桃彦さんも逝ってしまいました。

演劇ジャーナリズム風に言えば、「全リ演」第一世代はそう遠くない時期には、仲武司さんも藤沢薫さんも丸子礼二さんも、こばやしひろしさんも中沢研郎さんも……いなくなります。いつ？　とか、あと何年？　というような事は誰にも分かる筈はありませんが、当然そうなります。無論私もです。

そして城谷護さんや熊本一さんや境野修次さんなど多くの第二世から、楠本幸男さんや平石耕一さんや二〇代・三〇代の第三世代が「全リ演」の組織や創造を担うことになります。そんな先のことは不確定だといえば、それはそうですが、なりゆきで言えば、そうなります。

リアリズム演劇の土台になる「現実」をどのように捉えるかによって、劇作家の受け入れる「リアリズム」が決まってくる、とテリー・ホジソンは書き「こういうリアリズム演劇もある」「こういうのもリアリズム」と説明していますが、それは、演劇創造を通し現実の変革という人間的事業に参加しよう、と集まった「全リ演」という集団の座標軸は、何本もあり得る、という意味では、無論ありません。

従来の「リアリズム演劇」の「反リアリズム」的作劇手法の克服は私達にとって大きな課題です。特に第一世代は、創造の理念と硬直した手法の表裏のはざまでまだまだ重荷を担ってすすむでしょう。人間そう器用にかわれないものです。

自由であるということが芸術創造の原点です。私は、ホジソンの説明は『最終的には劇場でしか、舞台と観客の間でしか、まさにそこに生き生きと行動する人間を通じてしか表現できない虚構の「現実」（リアリティ）を、芸術家の自由な発想、ファンタジーや想像力や理性の力で実現して欲しい。創作の方法は多様・多彩なのだから……』というメッセージと考えています。集団の創造理念が劇団の多様な創造活動を呪縛するのでなく、多彩な創造が「リアリズム演劇」を豊かにする期待を「全リ演」に持ちたい、これは願望です。

今の、目の前の「現実」は人間の歴史が初めて経験する凄まじい変容が地球規模ですすんでいます。その根底には、人間が生み出し人間の力ではどうにもできなくなりつつ巨大企業・国家・核・科学技術の自己増殖があります。

「リアリズム演劇」がこの現実に生きる、人間の証を舞台でどう表現できるか？　「全リ演」の存在意義が問われます。

# 八仙過海　異彩粉呈

## ――96北京話劇（新劇）舞台一瞥――

劉　平（嶋田恭子訳）

表題の「八仙過海　異彩粉呈」は「八人の仙人が海を渡るのに、それぞれが各自の能力を発揮して渡った」という故事から《それぞれが腕を振るって競うこと》を意味することば。

筆者劉平（リヨウ・ピン）さんは一九五三年十月二十日中国河北省生まれ。七八年に河北大学中文系を卒業し、現在中国社会科学院文学研究所の副研究員。専門が「現代戯劇（現代演劇）研究」「中国戯劇比較研究」で三〇〇余りをこす現代演劇に関する評論、一〇〇余編の専門研究論文があり、近く田漢について論述した『日本における田漢と戯劇』が出版予定です。新鋭の中国現代演劇研究評論家です。

訳者の嶋田恭子さんは現在北京在。通訳翻訳のお仕事をされています。演劇評論家嶋田邦雄氏夫人。

（編集部）

### 九〇年代の北京の話劇状況

九〇年代に入り、北京における話劇（新劇）の状況はますます活発に、ますます多様化してきた。

国家劇院（国立劇団）の他に、民間劇団やプロデュース・システムによる公演（自由公演）集団が続々と出現した。

北京だけでも

牟森「戯劇工作車間」（固有名詞・あえて訳せば「演劇の仕事場」）

孟京輝「穿幇劇社」（同上「すっぱぬき劇団」）

林兆華「戯劇工作室」（同上「芝居の仕事部屋」）

鄭錚「火狐狸劇社」（同上「紅ぎつね劇団」）

蘇雷「星期六戯劇工作室」（同上「土曜芝居小屋」）

楊青「亜麻布劇社」（同上「リンネル劇団」）

等々である。

これらの民間劇団が求めたのはまず、古い体制の束縛を打ち破り、非芸術的要素の制約を克服することであった。

それによって、各演劇集団が柔軟で臨機応変にそれぞれの特徴を十分に発揮し、直接に演劇市場に打って出て、公平な競争のチャンスを獲得することであった。

彼らの出現は演劇市場を活発にし、話劇創作活動を刺激し繁栄させるのに大いに役立った。これらの民間劇団の創

劉　平　氏

作と上演の多くが、まだまだ小範囲の実験段階だとしても潭璐璐が独立プロデューサーとして上演した話劇『離婚了就別来找我』（『離婚したんだからもう会いに来ないで』）および北京紅海公告公司（公司は「会社」）が資金提供し中国青年芸術劇院と中央実験話劇院が上演許可証と上演場所を提供して上演された『霊魂出窍』（『霊魂離脱』）『瘋狂過年車』（『瘋狂年越し列車』）等は、話劇の創作と上演を演劇市場に推し上げる貴重な実験であった。

これらの上演はこれまで国家劇院によって独占されていた演劇市場の沈滞を打ち破ることで、話劇状況に活気を与え、内容を豊富にし、創作の意欲をかきたて、発展を促した。

### 一九九六年に入って

この基礎の上にたって、一九九六年の話劇舞台は、さらに豊富多彩な光景をあらわした。

国家劇院や民間劇団、芸術学院がつぎつぎに舞台に出て見えを切り、質の高い芝居が舞台を飾った。

《冰糖葫芦》劇照

国家劇院の上演した話劇は中国青年芸術劇院『幾爾加美休』（『ギルガメッシュ』）、北京人民芸術劇院『好人潤五』（『善人潤五』）、『紅河谷』（※村の名前）と、同じく二つの小品『在茫茫大海上』（『果てしなき海の上で』）、『傍晩発生的小事』（ある夕方の小さい出来事）、中央実験話劇院の『棋人』（『棋士』）、『人民公敵』（民衆の敵）等々。

『幾爾加美休』は翻訳劇で、作者は日本の梅原猛である。これは五千余年にわたって広く伝えられてきた英雄の物語で、シアスメル国の興亡を通して、人々に次のようなメッセージを伝える。

……人はあらゆる生

《人生一台戯》劇照

命を愛護しなければならない。とりわけ自分と喜びや憂いをわかち合う生存環境を愛護しなければならない……

そこには深い哲理が含まれている。

『好人潤五』は、誠心誠意人民に奉仕する李潤五という人物の物語である。

『紅河谷』は経済発展をすすめる中で人々が求める豊かさと環境破壊がもたらす矛盾に困惑する様を描きだした作品。

『在茫々大海上』と『傍晩発生的小事』は、ともに翻訳劇で、作者はポーランドのムロジェクとスイスのデュレンマットである。二つの劇とも荒唐無稽な意味合いを帯びている。

前者は海上で遭難した三人の「文明人」が生きるために誰か一人が食べられなくてはならないことから引き起こされる論争を描いている。

後者は、あるベテラン作家のえがいた身の毛もよだつような数々の謀殺事件が、実は彼自身が行った殺人事件であることが暴かれていく。それを通じてデュレンマットは当時の社会環境の下で「非合法は逆に合法である」という論理を展開している。

『棋人』は五〇年間碁盤から離れたことのない名棋士雲清の人生を通して、彼の奮闘と内面の苦悩をあらわした。

『人民公敵』はノルウェーの劇作家イプセンの力作で、今回の上演は物語の発生した時間と地点を中国の近現代の沿海小都市に改め、その目的は観客に現代中国の特徴を帯びたイプセン劇を見せるためであった。

これらの劇作は上演時にある程度の反響はあったものの、沸き返るほどのものではなかった。

## 民間劇団やプロデュース公演の活況

国家劇院と比べると、民間劇団（プロデュース公演もふくむ）の上演活動は異常とも言えるほど活発で、これが原因となって話劇舞台隆盛化の現象を生み出している。

以前と異なるところは、いくつかの企業が単に投資方として話劇事業を支援するだけでなく、自ら独立プロデューサーとして、文化団体と連合して劇団を組織し上演するようになったことである。

たとえば、

阿丁が独立プロデューサーとなり劇団を組織し、上演した『誰都不頼』（『誰も劣っていない』）

「火狐狸劇社」が上演した『楼頂』（『ビルの屋上』）

「金鷹国際広告公司」と「北京文化芸術音像出版社」が連合して劇団を組織して上演した『冰糖葫芦』（※さんざしを竹の串に刺し砂糖で固めた中国独特の食物のこと）

「北京克莢特文企聯誼発展中心」（※センター）と「北京市京市演出公司」「北京金舞台文化発展公司」の三者が連合して劇団を組織し上演した『別為匯你的相貌発愁』（『汝の容姿ゆえに悩むことなかれ』）

林兆華の「戯劇工作室」上演の『三個女人』

「人民日報」「霊通信息発展公司」「文匯文化芸術発展公司」と「北京亜麻布劇社」「武漢話劇院」が連合して劇団を組織し上演した『人生一台戯』（『人生劇場』）等々。

これらの作品にはみな一つの共通の特徴がある。

大衆意識。

劇作者は庶民の視点から現実社会の平凡な人々の日常を観察し、彼らの奮闘や努力、喜びや苦悩を描きだした。

『楼頂』が表現したのは生きとし生ける民衆の生活状況である。

『誰都不頼』は人々が金銭の誘惑のもとで、期待から茫然に到るまでの社会的心理状態を明らかにした。

『三個女人』で述べているのは普通の女性の生活感情の変化である。

『冰糖葫芦』は同じ高層アパートに住む一群の退職老人たちの複雑な心理状態を示した。

『別為你的相貌発愁』は長年埋もれていた一人の男優の精神的苦悩と芸術追求への執着を描いている。

『人生一台戯』は名優、昆虫学者、個人経営者、医者等の立場の異なる人間像を芸術形象化した作品。彼らの仕事に対する追求、人生に対する施行や内心の苦痛を同じ舞台空間にのせた。

これらの芝居が大衆の関心のある社会の現実や問題をしっかり見つめているからこそ、観客はこれらの舞台を注目したのである。

その中でもっとも評判が高かったのは『人生一台戯』『冰糖葫芦』と『別為你的相貌発愁』だった。

『冰糖葫芦』には北京のいくつかの大劇院をすでに退職したベテラン俳優たちが顔を揃えて出演したためもあり、彼らの巧みで完璧な演技が観客の大好評をえて、北京中を沸かせたものだ。当然ながらこれは非常に喜ばしい現象といえる。企業家が舞台を組み立て、芸術家が芝居を演じるというこのような方式は、芸術家の創作への情熱を駆り立て、話劇芸術の発展を促しただけでなく、話劇市場全体の繁栄のためにも新鮮な生命力を吹き込んだ公演であった。

芸術院校の上演には

中央戯劇学院の

『楡樹下的欲望』（『楡の木陰の欲望』）

『死無葬身之地』（『死んでも葬られる墓がない』）

上海戯劇学院の

『徐虎師傅』（※「師傅」は技術のある職人の尊称）

がある。

『楡樹下的欲望』はアメリカの劇作家ユージン・オニールの作品。アメリカのペンシルバニア州立大学教授ニコラスが演出。演出者は原作中の多くのセリフといくつかの場面を大胆にカットし、それらのテキスト・レジーを通して彼独自の解釈を示した。

『死無葬身之地』はフランスの劇作家サルトルの作品で中央戯劇学院の若い教師田友良が演出担当。彼は舞台の片側に幻灯スクリーンを置きカラースライドを使ってストーリーに対する解釈と暗示を加えた。舞台の上下至る所に鮮血したたる絞首縄がかかっている。観客は進行する舞台と同じ場に身を置くことになり、死神を目の前にした恐怖を体験する。

この二つの劇は舞台構成の実験的側面に特に力をそそいでおり、明らかに学術的な色彩の濃いものになっている。

『徐虎師傅』は水道やガス管の補修工事を担当する模範労働者の徐虎が、名誉のためでも利益のためでもなく、情熱的に住民のために働く滅私奉公的な姿を描いている。劇全体が情緒に富むディテールと真に人を感動させるシーンで構成されており、徐虎という人物形象を巧みにつくりあげた。

このほかさらに

「中国人民解放軍総政小品喜劇芸術団」上演の

『喜劇小品晩会』(『喜劇小品の夕べ』)

「中華人民共和国文化部芸術局」主催の

『全国小品比賽獲賞優秀作品専場晩会』(『全国小品コンクール受賞作品の夕べ』)

があり、多様な作風が多様な意味内容や雰囲気を作り出し、観客から非常に歓迎された。

## 九六年度演劇交流学術研究討論大会

——『ネクタイとハイヒール』成功の意義——

真に話劇上演を高潮に押し上げたのは今年八月下旬に北京で行われた「96中国戯劇交流暨学術研討会」(「一九九六年度中国演劇交流学術研究討論大会」)である。

大会は国内外一三の演劇を招いて交流上演した。この大会の目的は理論と実際を結びつけるというやり方を通し国内外の中国人の演劇状況だけでなく、未来の発展の見通しにまで踏み込んで討論することにあった。ここで上演された演劇は

①香港話劇団『次神的女児』(『二番目の神様の娘』)

アメリカの劇作家マーク・メドフの作品。ひとりの聾唖の少女と言葉を教える若い教師の愛情物語を描いていて、人生についての深い哲理を含んだ作品。

②広東仏山話劇団『新居』

改革開放と経済発展の過程で現れる金銭と道徳との矛盾を通して、人間の複雑な感情を描きだした作品。

③香港演芸学院『少女夢』

歌舞劇で、中国の伝統演劇『牡丹亭』を改編した作品だが、形式はかなり新しい。

④台湾緑光劇団『領帯与高跟鞋』(『ネクタイとハイヒール』)

台湾の某広告会社のサラリーマンの仕事の苦悩や生活の虚しさを描いた作品で、その中に愛情物語を織り込まれている。

⑤北京人民芸術学院『北京大爺』(※北京人に対する一種の呼び方)

革新と守旧、金銭と道徳の矛盾の中で揺れ動く北京人の複雑な心理状態を描き、彼らの改革開放や経済発展の大きな流れの中での人生観や価値観を集中的に示した作品。

⑥広東話劇院実験劇団『火紅木綿花』(『赤いパンヤの花』)

抗日戦争時代の中国侵略日本軍が広州で秘密に細菌兵器を開発して使用し、香港や広東の難民を殺戮した事実をドキュメンタリータッチで描いた作品。

⑦香港沙田話劇団『苦山行』(『山奥の貧しい村を訪ねて』)

⑧山東話劇院『布衣孔子』(『平民孔子』)

通俗的なセリフ回しで、孔子というあの偉大な文化人の不遇で悲惨な生涯を通して、彼の広く深い思想を描いた作品。

⑨大連話劇団『勾魂嗩吶』(『魂を誘い出すチャルメラ』)

⑩中国人民解放軍総政話劇団『女兵連来了個男家属』(『女兵士の中隊に男の家族がやってきた』)

亘古高原に生活する通信中隊のごく普通の女性兵士たちの喜怒哀楽と栄光や夢想を描いている。

⑪前述の『氷糖葫芦』

⑫同じく『別為你的相貌発愁』

⑬同じく『人生一台戯』

⑦『苦山行』と⑨『勾魂唢呐』は表現形式の上でともに実験的な試みに満ちた作品。

前者は、様式、動作、舞踏などの舞台言語で「嘘と実の結合」の手法を用いて舞台を構成している。香港青年が「希望工程」（※寄付をつのって貧しい子供たちに教育を受けさせる活動）に寄付するために徒歩宣伝を行い、彼の苦しみを喜びにする感動的内容を観客に見せた。

後者は「ひとり芝居」で俳優の演技構成に新機軸がみられた。九〇歳をこえたおばあさんが悠揚としてものさびしいチャルメラの音を聞きながら、彼女が生きてきた人生を回想し、それを通して社会の栄枯盛衰を表現した。舞台の写実性と演出の虚構性は人物形象と脚本内容をうまく舞台上に引き出すことに成功し、観客を魅き付けた。

これらの劇は題材も形式もそれぞれ異なり、めざす芸術内容も同じではない。特に観客に受けたのは『北京大爺』『人生一台戯』『領帯与高跟鞋』などだった。その原因は（1）脚本がよい（2）演技が巧みである（3）形式が新しい、の三点にあるだろう。

『氷糖葫芦』も受けたことは受けたが、しかし脚本についてはかなり弱いと考られる。

真にいちばん大受けしたのは『領帯与高跟鞋』であり、内容から言うと、この芝居はたいへん写実的である。しかし、表現の手法は大変新しく、豊富である。歌と舞踊をセリフの中に差し込み、双方が完全に融合し補完し合って効果を一層高めていた。それはすでに伝統的な意味での話劇（新劇）ではなく、現代的な意味でのミュージカル劇（歌舞劇）でもない。このような「随意賦形」（※自分のイメージにしたがって形を作り上げる、の意）で、柔軟で多様な舞台の表現形式は人物を浮き彫りにし、内容を引き出すのに大変効果的である。観客は軽い、愉快な気分の中で芸術の美しさを理解し、楽しむことができる。

この戯曲上演の成功は、話劇芸術が伝統意識の束縛を打ち破り、新しい表現を模索する上で、疑いもなく人々に新しい思考回路を提供したと言えるだろう。



海外演劇レポート⑧

# 韓国観劇ツアーの報告

今年初めての全リ演の国際交流、「韓国観劇ツアー」の状況について

馬山国際演劇祭　10／29～11／5

10ヶ国と韓国7集団の17集団参加の大変に賑やかな演劇祭になりそうです。

全リ演からは「上野市民劇場」が狂言をもって参加。日本からの参加者は、上野市民劇場8、たけぶえ1、すがお1、大阪1、桑名国際文化交流実行委員会から4の計15名です。外に、岡崎演劇集団、青年劇場、あしぶえ、京浜、名芸等の集団からも参加の意向があったのですが、日程等諸般の都合により実現できませんでした。

なお、釜山の釜山芸術短期大学でも上野市民劇場は公演をもち、芸大の学生たちとも交流をする予定で準備中です。

## 96　馬山国際演劇祭（ＭＩＴＦ）公演日程

| | ＭＢＣホール | | | | | オリンピック国民生活館大劇場 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日時 | 国名 | 劇場名 | 作品 | 作者 | 演出 | 国名 | 劇場名 | 作品 | 作者 | 演出 |
| 10/29(火) 3:00 | — | — | — | — | — | アイルランド | ドロムリオンブルオレンス | エンドゲーム | ベケット | リレ・マクラスキー |
| 7:00 | — | — | — | — | — | アイルランド | ドロムリオンブルオレンス | エンドゲーム | ベケット | リレ・マクラスキー |
| 10/30(水) 3:00 | アメリカ | オルランド | ラブレター | ＡＲガニー | D.ヒューズ | アイルランド | ドロムリオンブルオレンス | エンドゲーム | ベケット | リレ・マクラスキー |
| 6:00 | 開会式 | | | | | | | | | |
| 10/31(木) 3:00 | — | — | — | — | — | カザフスタン | 国際民族劇場 | ベンチ | ア・ゲルマン | 季オルレグ |
| 7:00 | ブルガリア | イスカラ | 強い女性たち | ステパン ラザノフ | スパス テプロフ | 韓国(富川) | 劇団ムルメ | 孫子伝 | キム・ヨンラック | コン・ボンク |
| 11/1(金) 3:00 | カナダ | 変化の風 | 家がまだそのままですね | リングウッド | スザンレイン | — | — | — | — | — |
| 7:00 | フランス | コメディフランセス | 混沌 | — | — | 韓国(木浦) | 劇団船窓 | | キム・チャンイル | キム・チャンイル |
| 11/2(土) 3:00 | — | — | — | — | — | 韓国(釜山) | 地頭腹劇団 | 沈清はなぜ2回も印塘水に身を投じたか | オ・テソック | イ・ソギュン |
| 7:00 | — | — | — | — | — | 韓国 | 地頭腹劇団 | 沈清はなぜ2回も印塘水に身を投じたか | オ・テソック | イ・ソギュン |
| 11/3(日) 3:00 | 韓国(横州) | 青年劇場 | ロミオとジュリエット | シェイクスピア | — | 日本 | 上野市民劇場 | 狂言 縄ぎ川 伊曽保風 | 飯沢 匡 | 杉森 正美 |
| 7:00 | 韓国 | 青年劇場 | ロミオとジュリエット | シェイクスピア | — | シンガポール | ミュージカル劇団 | 京劇 | — | — |
| 11/4(月) 7:00 | ロシア | あばらや | 調和を追求するひとたち | — | — | 韓国(光州) | ドラマスタジオ | 心の犯罪 | ペス・ヘンリ | カン・ナムチン |
| 11/5(火) 7:00 | ドイツ | ブルヘイム | 下女たち | チェホフ | — | 韓国(大田) | 金剛 | グリーン・ベンチ | ユ・ミリ | クオン・ヨンク |

## 街頭公演（ソンアン百貨店）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 11/2(土) 4:00 | 韓国 | ドルチェ・マイム | チェ・キュホ パントマイム | チェ・キュホ | — |

＊参加国　日本、アメリカ、ロシア、ブルガリア、フランス、カナダ、ドイツ、シンガポール、アイルランド、カザフスタン

１０ヶ国

海外演劇レポート©

# ロシア演劇のレベルの高さ

## オムスクのフェスティバルに参加して

内田勉（京浜協同劇団）

一九九六年十月一日から七日まで、ロシアのオムスク市で開催された「オムスク日本の文化と芸術のフェスティバル」に参加しました。私たち京浜協同劇団としては、五年前のフランス公演に続いて海外公演は二度目になります。

オムスク市は、モスクワから飛行機で東へ三時間、ウラル山脈を越えた西シベリアの都市で人口は百五十万人。軍需産業都市だったため一九九二年までは外国人は入れなかったそうで、日本人がこんなに大勢（四十五名）来たのは初めてとのこと。夏は四十度、冬はマイナス四十度になるそうですが、私たちが訪れたときはまだ日本の初冬の感じでした。白樺の幹の白さと真っ黄色に色づいた葉のコントラストが美しく印象に残りました。

### 日本からは三つの劇団が

このフェスティバルは、三年前、川村光夫作、松下朗演出の「よて子さるのお嫁さん」をオムスクで上演したのがきっかけで、日本の文化芸術への関心が高まり、今年実現することになったものです。オムスク側の要請を受けた日本側の松下朗氏が組織委員長となり、企画したものです。日本側の企画は次のとおりです。

オムスク・アカデミック・ドラマシアター

・京浜協同劇団　太鼓「権兵衛太鼓」

・池袋小劇場　木下順二作、関きよし演出　「赤い陣羽織」

（いずれも三ステージ）

オムスク第五劇場

・京浜協同劇団　腹話術「オムスクにやったきたゴローちゃん」

・らくりん座　さねとうあきら作、浅野玲子演出　「ゆきと鬼んべ」

（いずれも四ステージ）

リベロフセンター（博物館）

・お茶と生け花　淡交会（京都裏千家）

・いわて版画会　日本現代版画展

私たちの劇団は、舞台で「権兵衛太鼓」を三回上演したほか、オープニング・セレモニーで「小倉祇園太鼓」を、さよならパーティで「うすずみ太鼓」を打ちました。そして、街頭に出て公園や広場で予定外のパフォーマンスを三回やりました。オムスクの人たちは和太鼓を見るのも聞くのも初めてだそうで、まったく驚いたようすでした。どこでも喜ばれたようでホッとしました。

また、城谷護の腹話術は、「どうせやるならロシア語で」と、にわかロシア語でやりましたが、なんとか通じたようで子供たちは大喜び。「ゴロー、ゴロー」コールが沸きました。茶道も大モテで連日大盛況だったそうで、京都から参加の五人の女性は休憩もとれないほどだったそうです。

池袋小劇場は、このフェスティバルのために「赤い陣羽織」を仕込んで乗り込み、これはイヤーホーンによる同時通訳で上演されました。

栃木のらくりん座の「ゆきと鬼んべ」は、イヤーホーンのない劇場だったため同時通訳はできず、ときどき場内スピーカーからロシア語による解説が流れるというやり方で上演されました。初日は、子供たちが騒々しかったため、二回目から急拠変更、一時間四十分の芝居を十分カットしたうえ、現地の俳優が腹話術のゴローちゃんとのかけ合いで芝居の前に解説をするなどの改善をし、これは功を奏したようです。

### 圧倒されたオムスクの芝居

オムスク側はこのフェスティバルで、二つの劇団が、日本の作品三本を含む合計八本を上演しました。

俳優三十数人（スタッフ、劇場従業員をあわせると総計百八十人）を擁するドラマシアターは、安部公房作「砂の女」、「ウィンザーと陽気な女房達」、「三人姉妹」、「ふち」、「小聖堂」の五本を上演した。「砂の女」は二人だけで二時間余の大作だが、東京芸術座の荒木かずほさんがいい演技を見せてくれました。松下朗さんのビニール製の装置にも感心しました。この劇団は、とにかくレベルが高く圧倒されました。同時通訳なしなので、私たちは言葉が全然わかりません。にもかかわらず、ダイナミックで、繊細で、あきさせないのです。ある通訳氏によれば、「モスクワは今バラバラでダメです。このドラマシアターは現在ロシアの最高の地位を占めるのではないか」というほどです。さすがと思わされました。

第五劇場は、矢代静一作「北斎のほほえみ」、川村光夫作「よて子さるのお嫁さん」、「溺愛」の三本を上演。劇団はまだ五年という若さで、それだけに老舗のドラマシアターとは違って実験的な舞台に挑んでいます。「よて子…」は、日本の風習をよく勉強していて実に面白い舞台でした。

日本とはちょっと格が違うなと思うほどのレベルでした。劇場（劇団）の経費の七十五％を国が助成し、劇場つきの「人民俳優」であるだけに、さすがと思わざるをえません。

ともあれ、異なる文化に触れることができてよかったと思います。そして、草の根の国際交流が果たせたのではないかと思います。

参加団体・個人及び任務、レパートリー等は次のとおりです。（敬称略）

松下朗（日本組織委員長＝東京芸術座）・松下芳江（本部事務局）・平林英二（記録・美術助手）・多田忠広（展示デザイナー＝茶道・華道）・石田道彦（照明）・野村巧（音響）・佐藤張二（舞台監督＝京浜）・高田潔（舞台監督）・池袋小劇場（関きよし演出他7名「赤い陣羽織」）・らくりん座（浅野れい子演出他9名「ゆきと鬼んべ」）・京浜協同劇団（藤井康雄演出他5名「権兵衛太鼓」「オムスクにやってきたゴローちゃん・城谷譲」）・いわて版画会（田村晴樹他5名）・裏千家京都淡交会（荒川喜美子他4名「茶道」）・荒木かずほ（「砂の女」東京芸術座）・中本信幸（ロシア文学＝評論家）・川村光夫（「よて子さるのお嫁さん」の作者・岩手ぶどう座）・菅井幸雄（演劇評論家）・新田満（湯田町銀河ホール）計45名

腹話術のゴローちゃんは、子供たちにひっぱりだこ。
後方中央のはちまき姿が筆者

京浜協同劇団が「権兵衛太鼓」を上演した。
オムスク・アカデミック・ドラマシアター前で筆者

# 『評伝・平澤計七』のおすすめ

労働者演劇の先駆者「平澤計七」の生涯の記録とも言える評伝が、恒文社から出版された。藤田富士男と大和田茂の著作である。

一九七六年、演劇集団未踏が平澤計七の作品を上演している筈である。新宿の文化会館でのその舞台を私は見ていない。

平澤計七はわが国としては初の、労働者劇団を創立し、労働金庫や消費生活組合（生協の前進）などの創設に奔走していたが、一九二三年九月の関東大震災下のドサクサに、亀戸署に連行され、習志野騎兵連隊によって惨殺されたのであった。

その震災のことに、今は亡き萩坂桃彦「演劇会議」前編集長も〝築地小劇場七〇周年記念のつどい〟「築地小劇場と地方演劇」の中でふれているが、大杉栄や朝鮮人の虐殺、後に言うところの亀戸事件ー平澤計七もそこで殺されたのである。

その平澤計七が、新潟県の小千谷から父に連れられて埼玉県の大宮、現在のＪＲ大宮工場（当時日鉄、のちの鉄道院）に職工見習で就職し、働いていたことが分かる。その職場こそ、国労の演劇サークル出身で、劇団埼芸で活動し、全リ演の私たちを何にかと大宮で世話してくれていた故塚越の終生の職場でもあったのである。

私もお芝居のオルグで、その大爵宮工場にその塚越さんを訪ねたことがあった。

またこの本には、その昔赤い伯爵といわれた若き日の土方與志が、小山内薫に連れられて、平澤計七の劇団を五の橋館（羅漢亭とも云う現在の亀戸にあった場末の古い寄席）に訪ね、自転車での先生方の来場に下町の人たちが大騒ぎしたエピソードも記されている。

そう云えば、かつて土方與志が、労働者演劇に接してのその時の新鮮な感動を私たちに語っていたのを思い出す。

そもかくこの『評伝・平澤計七』は、地域や職場を基盤に活動している全リ演の私たちは、共感するところ大であると思える。（恒文社　定価　一八〇〇円）

（青年劇場・後藤陽吉）

**『演劇会議』発行所の変更のお知らせ!!**

〒134
東京都江戸川区西葛西三—十五—八—七〇一
電　話　〇三—三八〇四—〇五〇七
境野修次方

★境野修次の職場（ネットワークゆめ工房）
電　話　〇三—三六四四—六七七三
ＦＡＸ　〇三—三六四四—六七六八

ヴォイストレーニングの実際④

# 人に向かって話す

やまもと のりこ

演劇の場合、相手に向かって声・ことばをかけていくのが、特に重要な訓練項目だと思います。

日常の訓練ではは、自分のコンディションの調整として、呼吸から発声まで丁寧に自分の体の感覚を探るべきですが、その後は人や物などの対象を設定して、外部に感覚を開いていかないと実践的ではありません。

声を出す相手がはっきりすると、体のこわばりがとれることもあります。しかし一般的に、舞台経験が少ないと相手に向かってのめってしまったり、せりふを意識し過ぎて緊張したり、不自然になりがちです。

前号にご紹介したRADA（ラダ）が、八月に東京でもセミナーを行いました。そちらで体験したアイコンタクトや『聞く』エクササイズを交えて、《対象をとらえるために利用できそうな方法》をご紹介しましょう。

**①相手に届ける**

＊ボールなど具体的な物を相手に手渡しながら、ことばを言ってみる。…大切に届ける、というつもりで。最初は短い単語で、だんだん長いことばに。（語尾を渡すつもりで）ふたりの間を次第に離していく。距離が感じられれば放る力が作用して、自然に声が大きくなる。…ボールを放る瞬間に声を出すとからだの緊張が解放しやすい。大きな声を出すときにも必要な訓練です。

また、話しているせりふの語尾が届かないと、相手に言ったように聞こえないので、ボールが相手に届くまで意識を続けてください。（長いせりふの場合は一息で言うところまでを決めて、話し始めでボールを放り、語尾で届くように速さをコントロールしてみる。）

バリエーションとして、ボールをいろいろな物に想像したら同じことばがどう変わるか、ボールの放り方（強さや速さを変える）でどう変わるか、などが試せるでしょう。

**②アイコンタクト**

その一・確認

数人で円になり、だれかが一人を指さす。自分が指されたと思った人はハイと返事をする。指した人は返事を聞いたら相手の場所に移動する。返事をした人は相手が来るまでに次の人を指し、返事をさせないと（移動できない）アウト。…陣地取りゲームだと思って下さい。次は『指差し



と返事』なしで目くばせ程度の合図で移動。あとは同じ。

その二・発見

数人で円になり、だれかがいきなり一人に向かって移動。自分に向かってくると思ったら、その時点で移動。先ほどのゲームよりかなりスピードアップするはずですが、猪突猛進にならない（のめらない）ように注意して、ことばを言いながら移動する。…相手に向かうことが大切なので、相手が移動した後でも、その位置に対して最後まで言い続けて下さい。うまくいくと、相手に向かってかなりパワーが出て、力のあることばになるはずです。

**③目を閉じて聞く**

二人で組み、一人が目を閉じて相手の指示で動いていく。方向（まっすぐ、右を向いてなど）と距離（どんどん、三歩など）をはっきり指示する。…何組かが同時に動く場合、他のグループや周囲の物とぶつかったり、目を閉じた相手に危険がないように極力注意して下さい。

次に指示をする人が壁際などから離れずに、相手をリードしていく。より注意深く。ただし、目を閉じた人が怖くて息づまったり、こわばるようなら、二人で呼吸を点検したり緊張が少なくなるよう、工夫することが大事です。

しっかり相手をとらえて、相手の情報を受け取れれば、自分の内面が動くのを実感できるでしょう。

十月に劇団銅鑼と青年劇場付属養成所で、『RADAから影響をうけたこと』をテーマに集中レッスンを行いました。銅鑼では、RADAのサマーセミナーに二人の劇団員が参加していましたので、相談して分担する形を取りましたが、両所で前記のようなエクササイズと、それを実際の脚本のシーンに応用することを試みました。（RADAの演技レッスンはそうゆう形態をとっています。）

私にとってはヴォイストレーニングを実践に結びつける手掛かりになりました。一部をご紹介しましょう。

**☆アイコンタクト結ぶ・切る**

「一対一のシーンで、二人の視線が互いに内面にどう作用するか。」を取り出して見ます。

初めは片方が相手の目を見つめていきます。相手はそれを避けながら（見てすぐそらす）シーンを進行させます。…追いかけっこのようになってしまったら、もう少し互いの様子を見ることに集中して下さい。

次は同じシーンを、役割を逆にしてやってみます。途中で自然に交替するようにしてもいいでしょう。二人の関係がはっきり変わるのが分かるはずです。

その後、互いにどう感じたか（自分の気持ちや相手の見え方など）を検討して下さい。

**☆両者の力関係を変える**

あらかじめ両者の地位が高いか低いかを決めておき、そ

の関係性を保ってシーンを行います。

…地位（ステイタス）というとわかりにくいかも知れませんが、強気で出るか、下手に出るかという感覚です。

本来戯曲に指定されている関係にこだわらず、戯曲のせりふを使って即興のつもりで互いの変化を楽しんで下さい。

次に地位を入れ替えたり、シーソーのように逆転させたりします。逆転させる場合は、アイコンタクトや互いのせりふを聞きながら自然な変化になるようにして下さい。

アイコンタクトもそうですが、互いの関係に集中していくと、シーンの意味がはっきり見えてきます。また、俳優自身も生き生きとして、せりふが自由に変わっていくでしょう。

せりふをどう言うか、感情をどう表わそうか、にこだわるのではなく、どう体を自由に解放して、舞台の上で相手役や周囲を本当に見たり、聞いたりできるかに集中する。

首から背中が柔らかく伸び広がった状態で、内面の感覚や呼吸が自由に動くような体をつくる。そのための訓練が私の仕事だと思います。呼吸や声について紙面で紹介するには限界がありますが、訓練の考え方をご理解いただければ幸いです。ありがとうございました。

# 「全速力で駆け抜けた　飴谷隆治を偲んで」

## 大阪府職員演劇研究会一同

稽古場にヨレヨレのレインコートを着た長髪の若い男が現れ「演劇をやりたいと」話し出しました。黒田革新府政が誕生した年のことでした。「実は東京で芝居を見てきましてねえ…。」稽古帰りの呑み屋でぽそぽそ話し出した彼、ただ恐ろしいほど目がキラキラしていたことを覚えています。彼、飴谷隆治は今年七月二六日早朝、四十四才で逝ってしまいました。（演劇会議には87号・88号と続けて登場していました。）

彼は職場の仲間と「革新とういち・せいじ」という漫才コンビを組み、様々な場で健康な笑いを提供してきましたが、この六月二三日の大阪府民集会にも漫才を演じる予定でした。その日の朝、激しいめまいと急性難聴に襲われ、急遽出演を断念、自宅療養を余儀なくされたのです。府職劇研も二月に「翼」の公演を終え、第二十回大阪春の演劇まつりの参加作品「ドリームエクスプレスＡＴ」の松崎役で稽古に入った時のことでした。その後めまいは治まったものの、右耳が全く聞こえなくなりましたが「この現実をしっかり受け止めてこれからの人生を考えます。八月から職場に復帰します。」と、お見舞いのお礼やあいさつのハガキを認めていたのですが……。「ドリームエクスプレスＡＴ」の松崎役は急遽、劇団大阪の斎藤誠さんに快諾をいただいて公演を終えてほんの一週間、まるで公演の成功を待っていたかのような、悲しい別れでした。

彼は、府職劇研に参加して後、一九七三年「思い出を売る男」で初舞台を踏んで以降、「イルクーツク物語」のセルゲイ、さらば七〇年標本人間」の新木役をはじめ、数多くの作品と格闘してきました。彼の二十年余の演劇活動ではまた、大阪自立演劇連絡会議（現在6劇団が加盟）の合同公演で果たしてきた役割を忘れるわけにはいきません。第3回合同公演「ばんどり騒乱記」から合同公演に初めて参加し、その後、第4回「ああ青春高校野球」、第5回「荒野の落日」、第6回「母ちゃんたちが翔んだ」、第7回「海図なき航路」といういずれも、中心的な役者として全体を引っ張ってきました。役をとことんまで掘り下げ、納得がいくまで追求する。時には我がままに、時には孤独に、色々な顔をもっていましたが、誰にも愛される男でした。これは大阪自演連が驚くほど仲の良い集団どうしであることを差し引いても、彼の人間としての魅力を語る側面でもあります。

彼は、社会保険の職場に働き、様々な困難な中で労働組合の役員を誠実に勤め、美和子さんと共働きの中で桃子、太郎、二郎の三人の子供さんを育てていました。演劇、漫才、そして職場、家庭。丸っぽ抱え込み生きてきた彼こそ、府職劇研が目指してきた「職場を基礎に働くものの文化を作ろう、育てよう」の実践者でもあったのかもしれません。

府職劇研は今、労働強化が強まり、労働組合の活動もますます困難になる中で活動も生き生きしているとはいえませんが、彼の生きてきた道を大切に、新たな発見を目指して演劇創造に取り組みたいと考えています。

最後になりましたが、大阪自演連をはじめ多くの仲間のみなさん、また、いつもご迷惑ばかりおかけしている全リ演、演劇会議の皆さんがこうした紙面を提供していただきましたことに深くお礼を申し上げます。

# 沖縄の九月

謝名元　慶福

## ＜投票日に向かう日々＞

九月に入っても、三〇度を超す暑い日が続く沖縄。白い街角やさとうきび畑に、聞き慣れた沖縄口（ウチナーグチ・沖縄の言葉）が流れる。あの北島角子さんの声だ。「米軍基地の整理縮小」と「日米地位協定の見直し」を求める、沖縄の県民投票への呼びかけである。

那覇・県庁舎横の広場では、象のオリをあしらった「子象のオリ」が作られ若い演劇人達が、パフォーマンスよろしく投票呼びかけのチラシを配り、若者をつかまえては、子象のオリの中でそれぞれの思いを赤や青の布に書いてもらい、オリの金網に張り付けて貰っている。オリは赤や青の無数の若者の思いに揺れている。

ミュージシャンは、若者を集めて、屋内、屋外での演奏会。

市場で、アンマー（おばさん）たちと沖縄そばを食べながらテレビを見ていると、あのリンケンパンドが、いつもの華やかな衣装で「投票に行くか」とさりげなくよびかけている。

沖縄は、自らの運命を自ら決めることに、力み必死な形相で闘っているのではなく、祭りのように、いそいそと楽しんでいるのだ。

投票権のない高校生も、大人たちよりも先に投票して全県の高校生の投票の結果を知事に伝える。未来は自分たちのものでもある。自分たちにも発言の資格があると。

## ＜投票の日＞

いよいよ九月八日の県民投票日。

「晴れですよ晴れ。みんなの力で基地撤去」と明るく語るのは、反戦地主の池原秀明さん、五三歳。米軍のカデナ飛行場の隣、弾薬庫に土地を奪われていたが、そこに豚舎をつくり、一部返還に成功、残りの土地の返還を求めて活動しているが、家族で、牛二〇〇頭を飼育する農家である。

「この人が忙しいから、わたしが大変さあ」と、かみさんが大声で笑う。

投票所で出会った多くの人は、短い言葉でさりげなく語る。

「基地は沖縄に似合わないよ」

「安心して暮らしたいね。」



「アメリカ人とは仲よくするよ、でも基地はきらいだよ」

投票率は六〇％、米軍基地の整理縮小・日米地位協定の見直しに賛成票を投じた人は、九一％、全有権者の過半数を超える五三％である。

東京のマスコミでは、投票率が低いという論調が目立ったが、同じ日に行われた足立区長選挙が四〇％である。全国で初めて、基地問題という意識を問う高度な選挙に、自民党のボイコットの中で、県民の六割が投票したということは、立派なのである。

## ＜投票のあとに＞

県民の「軍事基地ノウ」の声は、日米両政府を大きく揺さぶり、沖縄への経済援助で基地問題を先送りしようと動いている。

県当局も、その流れにのせられている。

沖縄のアンマーやニイセー（青年）たちは、アワモリかオリオンビールを飲みながら、こんなことを話しているような気がする。

「こんなもんさ。政治家のやることわ。でも一幕が降りただけよ。二幕は、アメリカの大統領と日本の総理大臣の心臓が吹っ飛ぶような、派手なしかけを考えるさ。芝居はこれからが面白くなるさ。ゑう、ご期待。」

（じゃなもと・けいふく　沖縄県出身、劇団東演「朝未来」・「風のユンタ」・「アンマー達のロックンロール」、文化座「海の一座」・「花売り」など、戯曲集「アンマー達のカチャーシー」新日本出版社がある）

### ＊お詫びと訂正

野村　喬

編集者へ――前号に書いた『芝居とリアリズムとの関係について』で、発行後に気づいたのですが、文中で間違いがありました。お恥ずかしいことですが、老来、記憶力が減退しています。時間がないために記憶だけにたよって、数時間で書き上げたのが誤述の原因です。お詫びして訂正させていただきます。

12ページ下段7行目中ほどから11行目までを次のように訂正。

「最古のギリシャ劇では、スケーネ（楽屋）の前のプロスケニウム（プロセニアムの語源、今の舞台の意味）上の俳優はたった一人、半円形のオルケストラ（オーケストラの語源）に入った二十人以上のコロス（コーラスの語源、合唱隊、後にしだいに減少し十二人に限定）で演じられ」　以上

# 顔

## 隅広誠二（すみひろせいじ）

俳優・音響効果
京浜協同劇団

# 〝若手のホープ〟から中心軸へ

京浜協同劇団代表　城谷　護

二年前から劇団の事務局長をやっている。〝若手のホープ〟も今や劇団の中心軸の一人なった。

広島で生まれ、広島で育った。神奈川大学工学部を出て大手の物流会社で働いている。大学二年、ちょうど二十歳のときに、第二十三期研究生として劇団の門をくぐった。

劇団はそのころ、金芝河原作、小田健也脚本、演出の「金冠のイエス」、ブレヒト作、小田健也演出の「コーカサスの白墨の輪」をやっていた。一九七六年、劇団が燃えに燃えていたころである。彼はさっそく「金冠のイエス」の合唱隊として舞台に立つことになる。ソウル三文オペラという副題のついたこの「金冠のイエス」は、韓国の詩人金芝河の諷刺劇で、圧倒的な好評を得て、再演、再再演と上演し一万人を超える観客を集めた作品だった。彼はそうした昂揚期に劇団に飛び込んだのだった。

それから二十年。劇団は約一億七千万円をかけて新しい稽古場を建設した。六十代の創立メンバーから五十代へ、四十代から三十代へと、世代間の引き継ぎの必要性は否応なく押し寄せてくる。

彼は、職場でも管理職となり、この数年間劇団活動に専念できなくなっていた。私は、彼を創造のパートナーとしてどうしてもあきらめることができず運営委員にすいせんした。稽古場に集中していなかった彼を推すことに劇団員から不安の声があがったのは当然だった。しかし、彼はわれわれの期待を真に受けて応えてくれ、事務局長としてがんばっている。そして、全リ演でも関東ブロックの中で活動している。

ずっと役者をやり続けてきた。音響効果もやっている。大変なこともさっとやりとげ、重いことがらも明るく解決していく力は、キャラクターというより、かけがえのない彼の能力である。

# 顔

## 河東（かとう）けい

俳優

関西芸術座

# 果敢に歩んだ演劇道

劇団京芸　藤沢　薫

「おけいさん」誰もが親しみと尊敬をこめてこう呼ぶ。おけいさんが大阪の民衆劇場で芝居をはじめた頃、一時期京芸と合同で旅公演をしたことがあった。もう四〇年も昔のことだ。演目は三好十郎の「獅子」で、おけいさんの役は鉄火肌の土建屋のおかみ「お源」だった。僕は生意気にも、日本女子大の英文科卒だというが、世間知らずな神戸の山の手のお嬢さんにこんな下賤な役が勤まるかなと思った。だが、自分とかけ離れたこの役を見事に演じた。その印象が強く一〇年後に再演した時も同じ役で関芸から客演してもらった。

器用に役をこなす方ではない、情念に溺れる熱演型でもない、積み上げ練り上げてゆく役ずくりの確かさは今も一貫している。それがマスコミでも重宝されＮＨＫの朝ドラにも登場したからご記憶の方もあるだろう。

五九年に上演されたイプセン作「野鴨」では女優演技賞を受賞し、七七年に初演して十年間巡演を続けた「奇跡の人」のアニー・サリバンは、活力に満ちた圧倒的演技で従来のサリバンのイメージを一変させた。

また西リ演の結成当時から数々の会合に熱心に参加し我々と演劇論を闘わせる数少ない劇友でもある。実際おけいさんは、どんな時代にも自分の目指した道をまっすぐに果敢に歩き通した演劇人という印象がある。

演出作品も数多い。「トロイヤの女たち」「臨海幻想」「ムッシュー・フューグ」等いずれも深いテーマ性をもつ硬質の作品で、関芸の上演作品の中でもひときわ異彩を放っている。

四年前、彼女は変形性股関節症を患い手術の結果によっては歩行不能になるかも知れないと宣告され、文字通り役者生命をかけ激痛とたたかって舞台に立った一人芝居がある。小林多喜二の「母」でる。むろんそんなことは露ほども感じさせない一時間半の老母の語りは、多喜二の青春を見事に浮かび上がらせて円熟の味で観客を魅了した。

「母」全国公演－問い合わせ先、〇六－三七三－三七〇二・ステージ オフィスティー ハウス 内・田中久美子

# 顔

## 竹橋（たけはし） 団（まどか）

俳優
劇団京芸

# 死ぬまでお元気で！

劇作家　森脇京子

口癖である。確かに元気だ。彼の代表作のひとつは、劇団京芸が全国の高校を巡演し、その公演回数を誇る、トルストイ原作『ある馬の物語り』の主役だ。馬だからピョンピョン撥ねる。舞台狭しと撥ね回る。終始、腰を曲げた馬のマイムは随分きつかっただろう。袖に入った途端、朝方まで飲んでいた酒をもどしたという悪酔も耳にしたが、客にはみじんも感じさせない。子馬の時代から〝老いて骨と皮のようにみすぼらしくなった〟時代までを、象かサイのような体で堂々と演じ切る。客は納得させられるのだ。誰もが認める演技力と、それを支える体力に。

島根県から大阪に出て来て、大阪放送劇団に入団するが、京芸に客演したのが縁で、そのまま居着いてしまった。一説には稽古の後、酒が飲めたからだという。信じられる話だ。そして今、京芸を支える中堅であり、最近は劇団の活動だけでは飽き足らず、京都の若い小劇場の面々とも交流を深め、様々なプロデュース公演にも顔を出している。

にも拘わらず、彼は、このところモンモンとしているようだ。何故か？　彼の持てる力を発揮できる場がないのだと思う。今、京都は若い世代が脚光を浴びている。四十の坂を越えた役者には、既に出来上がったイメージの役を求めがちだ。また劇団の事情、関西の事情、演劇界の事情は後輩の育成をも強いてくるだろう。しかし、彼は、まだまだ自分が試されたいのだ。彼が芝居を始めて二十数年、実に様々な役を演じてきた、何故か動物が多いのは愛嬌だ。熱血漢でシャイで気弱で下品で狡くて騒々しくて愛らしくて……まだまだある！　新たな役を磨けば、必ず光る原石だ。自分より幼い役者ではなく、きちんとした大人に囲まれて、新人のように容赦なくたたいてくれる場が必要だ。たたいても大丈夫なはずだ。彼は、死ぬまで元気なんだから。

〈ロシア演劇レポート 7〉

# ピョートルフォメンコとその「工房」

## ――付、日本とロシア演劇 VI――

桜井 郁子

七月初旬のストレーレル演出『奴隷の島』上演をもって、四か月に及ぶ第二回国際チェーホフ演劇祭は終わった。最初の一か月の上演について前号で報告したが、その後のプログラムも予定通り進行したようだ。多くのチェーホフ作品が含まれ、前号に書いたシュタインやネクロシュスの演出の他にも、思いっ切った前衛劇、オーソドックスな演出などさまざまな取り組みがあり、毎週の新聞でそれを知るのは楽しみだった。

実はプログラムには、ロシア共和国7都市の7劇場のチェーホフ劇が含まれていたが、この期間中モスクワやペテルブルグではそれぞれ目についただけでも16演目、9演目のチェーホフ上演があった。例えばいつも若い俳優たちとの実験劇を続けているポグレブニチコの小劇場の『逢いびきはできたけれど、さて……』は、六人の令嬢と三人の青年が登場して『三人姉妹』他のせりふのある構成劇だった。それにつけてもチェーホフには、シェークスピア同様、どんな扱いにも耐えうる古典作家としてのしたたかさがあると思ったことだった。俳優セルゲイ・デスニーツキイがモスクワ郊外のチェーホフ邸で『ワーニャ叔父さん』を演出し、自ら今度はセレブリャコフ教授役を演じた。既にワーニャ役で定評のある彼が、今回の教授役に何を発見したのか……こんな風にチェーホフ劇についての話題は尽きないが、チェーホフ・ブームは今後も続くと思えるので又の機会にして、話題をかえよう。

実は今年の春の私は「チェーホフ祭」の他にもう一つの目的をもっていた。「P・フォメンコ工房」という劇団を知ることである。この劇団の芝居は既にいくつか見ているし、代表者であるフォメンコやその弟子ジェノヴァチの芝居については本誌でも毎号のように触れている。それでも現代ロシア随一の演出家フォメンコのまわりには謎がたちこめている。それを少しでも明らかにしたい。という訳で「工房」やフォメンコ演出の舞台を見、図書館で資料にあたった。まだ半分も解明し切れないが、少し整理して書いておきたい。



まずピョートル・フォメンコについて。

彼は「遅れて来た人」と言われる。「60年代人」と呼ばれる演出家たち、レニングラード・ボリショイドラマ劇場のG・トフストノーゴフ（15－89年）、タガンカ劇場のY・リュビーモフ（17年生れ）、モスクワ芸術座のO・エフレーモフ（27年生れ）、また彼らに劣らぬ名舞台をのこしながら不遇のうちに倒れたA・エーフロス（25-87年）でさえも、その仕事は世界的に知られている。ほんの少し年下の世代G・ヴォールチェク（ソブレメンニク劇場）やM・ザハーロフ（レンコム劇場）、いずれも33年生まれの彼らの仕事もよく知られている。ところが同じように高い水準の仕事をしながらフォメンコがひろく知られるようになったのは90年代のことである。

「かつて全ての過去を抹殺されたフォメンコにはすばらしい芝居があった。」（A・ベリンスキイ、94年）

多くの人が指摘するのは幻の舞台『チョールキン』である。文芸誌「ノーヴイ・ミール」のソビエト時代の名編集長でありながら、反骨精神の故に地位を追われた詩人トワルドフスキイの代表的叙事詩『あの世のチョールキン』（54－63年）を下地にしたもの。この芝居で彼自身「作者」役を演じたが、幕を開ける間もなく消えさせられた。マヤコフスキイ作『ミステリヤ・ブッフ』はたった一回のゲネプロで消えた。

「彼は60年代の終り『タレールキンの死』で重要なロシア演劇伝統の流れを復活させたが、これはあっという間にレパートリーから外された、ザハーロフの『有利な地位』（サチーラ劇場）、エーフロスの『三人姉妹』（マーラヤ・ブロンナヤ劇場）と共に。」（A・スメリャンスキイ、87年）

フォメンコの過去はざっと次のようだ。

32年生まれ。モスクワ芸術座付属演劇スタジオ中退、国立演劇大学卒。

長い間フォメンコには自分の劇場がなかった、という事は生活の手段がなかったという事だ。厳密に組織固めされていたあの頃の劇場に属さない演劇人の苦しみ、私はそんな例のいくつかを身近かに知っている。俳優ユルスキイも、演出家ギンカスとヤノーフスカヤ夫婦も、演出家・劇作家ロゾーフスキイも皆そうだった。

ともあれ60、70年代の仕事はペテルブルグのコメディー劇場（72－81年）やモスクワのタガンカ劇場での演出が代表的。

中で重要なのは『タレールキンの死』（スホヴォ＝コブイリン作、66年）、『このやさしい古い家』（A・アルブーゾフ作、72年）、『人間嫌い』（モリエール作）『森林』（A・オストロフスキイ作、79年）以上すべてコメディー劇場。

『反世界』（A・ボズネセンスキィ叙事詩による）、構成詩劇『反世界』、以上はタガンカ劇場の仕事である。

78年に漸く功労芸術家の称号と、A・ポポワ賞金メダルを受け取る。

80年モスクワの演劇大学に招かれたのが転機になる。彼は学生たちとの歴史研究に没頭し、何年もかけてプーシキン作『ボリス・ゴドゥノフ』を仕上げた。初めた時にはまだ「工房」という名称はなかったが、『ゴドゥノフ』の成功（84年）で彼と学生たちは単なるクラスでなく、集団としての存在を認められるようになった。

『文明の果実』（L・トルストイ作、マヤコフスキイ劇場、85年）、『訴訟』（スホヴォ＝コブイリン作、ワフタンゴフ劇場）などの仕事もあるが、本質的には彼の仕事は演劇大学での学生たちの教育と芝居つくりである。

A・オフトロフスキイ作『狼と羊』は『ゴドゥノフ』同様、四年間の授業の中で、奇知もユーモアもあり、繊細でボリュームのある芝居に成長して行った。

『狼と羊』の舞台ははじめ大学に、また女優エルモーロワの旧邸博物館（写真）に設定された（今はモスソビエト劇場の五階小ホール）。観客と膝を接する小空間に、室内調度からソファの覆い、クッション、卓上の写真や彫像、しおれた花の花瓶などの小物まで揃えて、どっしりした建物と相まって前世紀の雰囲気をつくりあげる。その中で若い俳優たちが物怖じしないのびやかさ、しなやかさで（若ささえ隠そうとせず）人物たちを演じあげる。かといって、物語は軽くはない。権謀術策、恋の鞘当て、裏切りといった極めて人間くさい人びとの生活が描かれるのだ。念入りな戯曲テキストの隅々を読みこんでいった演出家と俳優がこの演劇世界をつくりあげた。

91年発表のジェノヴァチ演出『ウラジーミル三等勲章』（ゴーゴリの未完成戯曲を構成したもの）と、92年発表の『狼と羊』は「フォメンコ工房」の名を揺るぎないものにした。

フォメンコとその教え子ジェノヴァチや「工房」が格別の注意をひいたのは92／93年シーズンである。ワフタンゴフ劇場のためにフォメンコが演出したA・オストロフスキイ作『罪なき罪人』がシーズン最高傑作として演劇人たちから一致した評価を受けた。

例えばロシアの代表的な演劇誌「テアトル」93年10月号が組んだ特集（シーズンの総括）である。モスクワ演劇界について評論家たち13人が自由に書いた文章（46ページ）

『狼と羊』舞台より（フォメンコ工房）

『罪なき罪人』舞台より（ワフタンゴフ劇場）

中に、シーズンの特徴となる演目として『罪なき罪人』を挙げた人は11人、そのうち9人が「断然」あるいは「勿論」一位と答えている。この作品を挙げなかったあとの2人も「演出家フォメンコ」あるいは「フォメンコ工房」に言及している。つまり全員がフォメンコの仕事を評価した事になる。更に「フォメンコ工房」について「全作品」に注目すると答えた1人、『狼と羊』を挙げた3人がある。ついでにジェノヴァチの『深い淵』を6人が、『粉屋でペてん師の結婚仲介人』を5人が、今後を期待できる演出家として彼の名を挙げた人も多い。(本誌85号〈モスクワ・レポート15〉でも、他の資料で同じ事を裏付けしてある。)

93年は「フォメンコ工房」が陽の目を見た年である。まず2月、演劇大学(ギティス)あるいは「ギティス劇場」で、「フォメンコ工房の全作品」フェスティバルが行われた。

発表作品は五つ、シェクスピア作『十二夜』(E・カメンコーヴィチ演出)、『ウラジーミル三等勲章』(S・ジェノヴァチ演出)、女流詩人ツヴェターエワ原作『出来事』(I・ポポフスキ演出)、W・フォークナー作『怒りと響き』(S・ジェノヴァチ演出)、そして勿論『狼と羊』である。

夏には工房はフランス、ポーランド、イスラエル等に遠征、トールン市で開催の演劇祭〈コンタクト-93〉では『狼と羊』が見事グランプリを獲得した。パリやザルツブルグでもフォメンコの教え子たちは受賞している。言い忘れているがフォメンコの大学でのクラスは「演出科」である。

これまで何の地位も劇場も与えられていなかった「工房」のために著名な演劇人たちが署名した書簡が功を奏したのか、否かは知らないが、この年8月「モスクワ市立P・フォメンコ工房劇場」の発足を見た。ただし劇場の建物は未だない。

フォメンコ自身『罪なき罪人』と『狼と羊』で、この年5月「トゥランドット演出家賞」をもらう。他にスタニスラフスキイ賞、「シーズンの釘(ハイライト)」賞などの他、人民芸術家の称号も授けられ、ありとあらゆる賞や地位と賞賛の声が雨あられのように、彼の上に降りかかった。然しこんな賞賛やまた自分についての批評を嫌うのもフォメンコらしい。批評を「追悼文」と呼んでいるとか。インタビュー記事はみつからず、彼自身の文章も『狼と羊』の後で「工房」について書いたもの(「演劇生活」誌94年2号)ぐらいである。これについては後にして、まず『罪なき罪人』について少し触れておこう。

三階ホワイエで待たされたお客は、まずバルコニーの一隅で演じられる序幕を見る。狭い空間は『狼と羊』と同様

俳優K.ライキン(左)と稽古中のP.フォメンコ(右)

に、念入りにインテリアが配置され、古いレコードのかすれた音も時代を浮かび上らせる。若い俳優たちによって演じられるヒロインの悲劇の始まり、自由で充分優雅でもある俳優たちはワフタンゴフ付属演劇スタジオの卒業生たちで、彼らは幕間でもグランドピアノの周りで歌を聞かせてくれた。白衣の給仕役が白布片手にお客を導いてくれる次の舞台は、劇場のビュッフェ。広間の中央には、じゅうたんが敷かれ、ソファや衝立が置かれ、高い窓や、巨大なシャンデリアには多彩な布が張りめぐらされるが、正面のどっしりとしたスタンドは勿論ほんもののビュッフェ。壁一面の鏡を背にコの字型に配置された椅子の観客70人は、今度はベテラン俳優たちによって演じられる登場人物たちの二十年後の運命を観ることになる。この幕は田舎の劇場の女優の居室でもあり、ビュッフェでもある舞台で、捨てた我が子に再会する女優 =母親を演じるのがユーリア・ボリソワ、演技のルーチンをさっぱり捨てた自由さに往年の匂やかな気品を漂あせていて見事だった。ベテランたちのアンサンブルもよく、もう一人の女優L・マクサコワも目を見張らせる活躍ぶりだった。

E・ワフタンゴフといえばロシア演劇史上スタニスラフスキイともならんでいい仕事を短い演劇人生になし遂げた人、その名を戴く劇場はモスクワで有数な一つだが、ペレストロイカ以後は首席演出家を迎えられず、長くヒットを出せなかった。それがこの芝居の成功で窓口の賑わう劇場の一つになった。

フォメンコは工房の若い俳優たちだけでなく、ベテラン俳優たちにも徹底的な戯曲の読み込みと集中した稽古を実行させ、大劇場を甦らせたのだった。これは94年の『堂々たるコキュ』(サチリコン劇場)にも当てはまる。〈ロシア・レポート3〉に述べたように、トゥランドット賞、「黄金のマスク賞」がその成果に応えたが、実は今春もう

一つの大舞台での仕事があった。ワフタンゴフ劇場のこんどは大ホールで、プーシキン原作の『スペードの女王』。この舞台ではマクサコワが悲劇の老伯爵夫人役となり、その死後も白い裳裾をひるがえす「ファントマ」となって我々を楽しませたが、またもや96年度トウランドット演出家賞がフォメンコに与えられている。

今春は『罪なき罪人』再見と、『スペードの女王』初演観劇の他に「工房」の『馬鹿の学校』（サーシャ・ソコロフ作、E・カメンコーヴィチ演出）と『ターニャ――ターニャ』（オーリャ・ムーヒナ作、共同演出）を観ることができたが詳細は次号にゆずろう。

最新のニュースではこの後者二つはポーランドとドイツの演劇祭に参加したという。また巨匠（フォメンコをこう呼びたくなった）はトルストイの『戦争と平和』を準備中、ジェノヴァチはツルゲーネフ作『村のひと月』を発表したというから、まだまだフォメンコや「工房」への私の追っかけは続く筈である。

紙数はないが、フォメンコの「工房」についての発言を少し抜き書きしてみる。

「工房と言うも、スタジオと言うも、学校というも、単なる言葉。そうではなく真の内容をもって、互いに交流しあっているかが課題である」「劇場における学習と仕事は、分つのが難しい」「今我われは劇場であるようだが、それは絶えざる学習、絶えざる試みを条件としている」

「その時私の目覚めが始まった、教育と実践的な演出との二元一体という。」

「演出家の学校とはナンセンスだ。教えるのではなく存在すること、外面的に存在するのではなく、未来の俳優たち、演出家たちの中に生きている悲しみ、状況、雰囲気を予感し、予測し、取り返しつかない誤りや喪失を未然に防がねばならない。我われは何とかして、もちこたえた。我われはついていた。」

---

敗戦後の日本新劇人の立ち上がりは、国の疲弊状況と比べて早かった。あるいは、獄につながれ、あるいは沈黙を強いられ、各地に散らばっていた人びとが、解放されて集まって合同公演の旗あげ。45年12月、演目は他ならぬチェーホフの『桜の園』。演出青山杉作、出演者の顔ぶれに東山千栄子、村瀬幸子、薄田研二、三島雅夫、千田是也、滝沢修、杉村春子、などの名を見ると、戦前の築地小劇場からの流れが察せられる。

翌46年3月俳優座第一回公演はゴーゴリの『検察官』だったし、各劇団のその後の演目にチェーホフの『三人姉妹』『かもめ』他、ゴーリキイの『どん底』他が繰り返し見られるのは、戦後の新劇界がどんなにロシア演劇と結びついていたかを語っている。



58年、海外来日公演第一号としてモスクワ芸術座がやって来て、見せた舞台はチェーホフの『桜の園』『三人姉妹』、ゴーリキイの『どん底』そして現代劇としてL・ラフマーノフ作『落着かない老年』（56年、モスクワ初演）であった。かって小山内薫が移入した舞台の、本物を眼前にして少なからぬ衝撃を受けたと多くの人が語る。

この前後スタニスラフスキイ・システムの文献紹介や研究が流行したが、前に述べたようにイデオロギー的な社会主義リアリズム論との混交と、資料の片寄りや消化不良のため、アメリカにおける「アクターズ・スタジオ」のような徹底して根付いた（47年創設、多くの著名俳優を輩出した）ものにならなかったのは、残念という他ない。（勿論今日でも、同システムによる演劇研究に専念している所はあるが。）

ロシア現代戯曲の方は、60年劇団民芸によるA・アルブーゾフ作『イルクーツク物語』上演から、大きな流れとなって入り込む。この『イルクーツク物語』のモスクワ初演は59年のワフタンゴフ劇場、演出E・シーモノフと60年のマヤコフスキイ劇場、演出N・オフロプコフであったから、ほとんど同時上演という早さ、新しいロシアの息吹きを伝えるものとして受取られたのは幸せであった。尚この戯曲はソビエト全土はもとより、世界中をも駆け巡った。アルブーゾフについては次号に述べたい。

この時までのソビエト演劇界には山も谷もあった。戦争中は挙国一致のため多少緩んだ弾圧・締付けが戦後一段と強まる。悪名高い「ジダーノフ旋風」（46－48年）で沈黙させられた文化人も多い。風向きが変わったのはスターリンの死（53年）以後、第二回作家大会（55年）、スターリン批判が公式に出された党第20回大会（56年）を経て、「雪どけ」の時代が始まる。

56年というのはソビエト演劇にとっても一つの指標になる年である。モスクワに若い俳優たちのスタジオ、O・エフレーモフを長とする「ソブレメンニク劇場」が誕生、57年V・ローゾフ作『永遠に生きるもの』で旗上げした。以後60年代ここはモスクワ演劇のメッカとなった。56年レニングラードのボリショイ・ドラマ劇場にG・トフストノーゴフが首席演出家として迎えられ、彼が没するまで最高水準の演目を世に送り続けた。Y・リュビーモフが64年タガンカ劇場の首席演出家となり、タガンカ・ブームを起こしたのは周知のこと。彼らに限らないが、60年代に開花した演劇の担い手を「60年代人」と呼ぶ由縁である。

91号の正誤

| | | | |
|---|---|---|---|
| P36 | 下段 | 5行目 | リペック ↓ リペツク |
| P36 | 下段 | 16行目 | ネミローヴィケ ↓ ネムローヴィチ |
| P37 | 上段 | 5行目 | ピストルが出てきたら ↓ 出てきたり |

# 北から南から

## 劇団通信

**劇団さっぽろ**

ごぶさたしております。総会おつかれさまでした。いよいよ総選挙ですね。消費税アップは我々に深刻な影響をもたらします。廃止しか選択肢はないと思うのです。また、沖縄でもその後も米兵の犯罪が続いています。安保条約を破棄しない限り、基地縮小がどうのこうのより、永久に彼らは居座り続けるでしょう。

現在、劇団は二班で元気に道内を巡回しております。十月十日からの第17回北海道演劇祭（釧路）にも「三まいのおふだ」で上演参加する事になっています。

毎月第三土曜日には、必ず稽古場で、劇団の俳優陣による「むかし話の世界」の公演を続けており、今回九月二十一日は、町内会や近隣から五十数名が集まり、「注文の多い料理店」ほか二本の宮沢賢治作品を堪能しました。今年中に百話に達する予定です。

まもなく山田洋次監督の「学校パートⅡ」が公開されますが、劇団員の今野史尚と吉田朋子が出演しております。北海道ロケで撮影されたクリーニング工場と寮のシーンです。是非ご覧ください。

（林中直樹）

**関西芸術座**

関芸スタジオ公演「ロンリー・ハート」、ベン・ヘンリ作、安達柴帆訳・内田裕演出で八月二十一日～二十五日、五日六ステージが修了した。スタジオの観客収容は椅子席で役一五〇名だが、公演日によっては超満員となり臨時客席で詰め込みという状況でした。観客総数は約九〇〇名。

秋から年末にかけては移動公演三班の最盛期になり、慌しい日々が続く。

現在、中学高校及びおやこ劇場高学年には「童ｉｈｇ」が三年連続。同じく「奇跡の人」が一年目。おやこ劇場低学年の「夕やけ色のトンネル」が二年目。他に演鑑連へは「姥ざかり」続演中である。

劇団は来年九七年、創設四〇周年を迎える。来春、記念パーティー。三月、スタジオ。八月、田辺聖子作「お母さん疲れたよ」大阪労演。九月、西岡誠一作「遙かなる甲子園」試演公演。十一月末、（未定）近鉄小劇場。など、各々記念公演が目白押しに予定されている。

**劇団大阪**

全リ演の皆さんお元気ですか。朝晩は少し過ごし易くなりました。沖縄の県民投票は約九〇％が基地縮小に賛成、県民の過半数が賛成したことになります。日米両政府は沖縄県民の意思に従うべきです。

さて、九六年度西会議総会は久々に充実したものとなりました。演劇講座は参加者が目標におよびませんでしたが、高山図南雄氏（演技の基礎）、法月紀江氏（衣裳）とも参加者には大変好評で、西会議事務局劇団としてホッとしています。劇団は六月七～九日、十三から十五日「思い出してよ」（作・窪田吉宏／演出・斉藤　誠　八ステ）を谷町劇場で上演。クモ膜下出血で過労死した男が、幽霊になっても仕事でかけまわる。家族の顔も忘れて。といった、過労死をブラックユーモア的に描いた作品です。新しい視点で過労使を描いているという評価と共に、結末がいただけないといった意見もあり、まずまずというところですか。

現在、「楽園終着駅」（作・近石綏子　演出・熊本一）の稽古に入っています。「楽園……」は昨年十一月十三年振りに再演したもので、今回大阪狭山市サヤカホールの買い取りによる再々演となります（十月六日　一ステ）。そして、来年二月は劇団プロデュース「がめつい奴」（作・菊田一夫　演出・熊本一）の予定です。

**劇団銅鑼**

銅鑼としては初めて試み、フリースペースを利用しての四面アリーナでの上演となった『カウナスの夏』ー新センポ・スギハラー（作・演出　平石耕一）。

通常のプロセミアムでの公演ではなく、三六〇度グルリそれもすぐ目の前に迫る観客の視線の中で、いかにそれぞれの役としての存在感がもてるか…大きな会場でやりがちな、必要以上に声を届かせる、表現をしてみせる、といった垢を洗い落としたうえで、役としてまるごとそんざいできるか――大きな課題に挑戦した公演でした。

『センポ・スギハラ』　（作・平石耕一　演出・山田昭一　平石耕一）は、一〇月上旬三九八ステージをもってひとまずお休み。

一〇月下旬より『俺たちの甲子園』（作・石原哲也　演出・大峰順二）が全国に向けて出発しました。これは「演劇会議」にも掲載された作品です。出演者ほとんどが二〇代という若い旅班。笑いと涙の清々しい感動をよぶドラマに仕上がっている…はずです。

**劇団やませ**

十和田・八甲田の紅葉の季節になりました。でも、ここ何年か見たこともありません。今年は……？　もちろんダメなようです。

さて、六月のアトリエ公演＝柾谷伸夫構成／加藤健次郎演出『～劇的試みの朗読空間～賢治の世界』が二日間共満員の盛況で無事終了しました。生誕百年ということで、岩手県を中心にすごいブームになってますが、私達の公演は、じっくり賢治を見つめ直したという点で評価できるのではと思っております。できれば、毎年挑戦しようかという声も出ています。

現在、私達は、十一月十五日（金）～十六日（土）公演の柾谷伸夫作／加藤健太郎演出『もと子』の稽古に入っています。

例によって、柾谷の脱稿が遅れ、稽古日程が詰まっています。

ところで、『もと子』は、明治六年に八戸で生まれ、十六歳のとき勉学のために上京しています。いろいろな紆余曲折がありますが、日本で最初の女性新聞記者であり、婦人の自立を旗印に「婦人の友」創刊、「自由学園」創立など、教育界に新しい波を起こした人です。

いつもとちがって、女優陣が中心の配役ですので、稽古風景は若干はなやかなのですが、演出の機関銃のようなダメ出しが彼女等の上に降りそそぎ、泣き出しそうな顔も見えています。でも、副題が「女が自立をしたとき、女の人生が動き出した。」ですから、演出の要求がキツイだなんて弱音を吐いていられません。かんばらなくっちゃ！

（高森）

**劇団海鳴り**

故萩坂氏をおむかえして紋別市でガリンコ演劇祭を開催したのが早や四年前。今年の北海道演劇祭は釧路市で開催されます。

昭和四十一年創立した海鳴りは今年で丸三十年を迎えました。翌年の九月の旗上げ公演は小学校のござ敷きの講堂が四百人前後の観客で埋まり、涙、涙のカーテンコールだったのを記憶しています。さて、三十周年の演目は札幌市の澁谷健一氏に依頼し、紋別を舞台にしたオリジナル「流氷（こおり）のくる街」に決定。十月十三日の演劇祭公演に向けて最後の追い込みに入っています。本番半月前ともなると土・日は無し、毎晩稽古に打ち合

わせにと、帰宅はいつも十一時過ぎですが、紋別の心意気を伝えたいと努力しています。仲間の皆さん、釧路でお会いできるのを楽しみにしています。

（五十嵐陽子）

**劇団名芸**

八月末の中部ブロックゼミでは、成谷氏の製作の話しに色々刺激を受けました。また受入劇団の岡崎演集にもお世話になり、ありがとうございました。運営委員を名芸（大八木克樹）が担当しますが、事務等遅滞なく進めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

さて名芸は夏恒例の子ども劇場『ピノキオの冒険』（脚本／栗木、演出／佐野秀明）を、天白・南両方で二千人近い親子に観てもらって打上げ、反核舞台人の集い『夏が来れば』（栗木他作、久保田明・木崎裕次演出）も無事終えて、現在は秋の公演に向けてケイコに励んでいます。

◎第四十四回公演・名古屋市民芸術祭参加「夢家族」――汽笛はいつも切なくて――

作／栗木、演出／片野耕治

十一月二十二日（金）～二十四日（日）名芸平針小劇場。平行して、6人の新人劇団員への教育を行いつつあり、来春新人公演予定です。久しぶりのことであり、この経過と記録を次号にでも寄稿させていただきたいと思います。

それから、名劇協合同公演等の演出で世話になっている木崎氏の市芸術特賞受賞記念の合同公演「桜の園」（九七年二月、市芸創センター）にも何人かがスタッフ・キャストで参加予定で、相変わらず多忙な秋から春になりそうです。来年は創立三十五周年です。

（文責／栗木方）

**京浜協同劇団**

第九十一号の野村喬氏の論文、趣味深く読みました。私は、私たちへの警鐘と受けとめました。リアリズム演劇論が、実践をふまえた論争として交じあわされることを期待します。

さて、私たちの劇団は、十月一日から七日までロシアの真ん中、オムスク市でひらかれる「日本の文化・芸術フェスティバル」に、「権兵衛太鼓」と腹話術のゴローちゃんを待って参加します。一緒に日本から、池袋小劇場が「赤い陣羽織」を栃木のらくりん座が「ゆきと鬼んべ」を持っていきます。

その一か月後の十一月九日から、「旅・自分を探しに」公演が始まります。この作品は、地元にあるフリースクールの若者たちをモデルに、山本忠利、中沢研郎が中心となり、三年がかりで創作したものです。劇団の若者たちと劇団以外からも約十名が出演。稽古場は若者たちの元気な声でムンムンです。公演二か月前に、もう三、四回の新聞報道がされるなど、話題作となりそうです。雌産に雌産を重ねたこの創作劇、演出の藤井康雄を軸に、ミズノタクジら若者も演出班に加わって、今までの劇団の芝居とはちょっと変わった舞台になりそうです。ぜひ、みていただきたいと思います。

**青年劇場**

消費税の税率アップなどとんでもない、劇団の死活問題なのだから劇団ぐるみで反対しようと昨年から演劇人の反対運動に参加してきましたが、今度の九月公演会場でも早速署名コーナーを設置しました。公約違反の、民意に背く閣議決定はルール違反であって覆す事ができるのですから、演劇人は団結して運動を広げようではありませんか。

さて、九月の定例公演「私よりましな私」（ジャン・ノエル・ファンイック／作・高橋啓／訳・松波喬介／演出）、何とか無事幕を降ろすことができました。劇団にとっては手強い



作品も、そのユーモアにあふれた戯曲と翻訳の強み、そしてお客さんに支えられ、苦労の甲斐あって劇団の新しい面を切り開きました。千秋楽には台風十七号、にみまわれましたが、暴風雨の中二〇〇名のお客様が集まってくださいました。「感謝」のひとことです。ただ、普及上は観客数六〇〇〇名を切り、残念ながら課題（と赤字）を残すことになりました。

夏の関東ブロックゼミナールは六名の参加で、若い人にも好評でした。劇団総会を終えたばかりですが、係りでは今後の活気のある全り演活動へ、たくさんの人に参加して貰えるよう要求していくことと同時に、日本でも希な、リアリズム演劇運動体としての全り演の歴史と役割についてもちゃんと勉強していくことも大事なのではと話しあっているところです。

今、地方でも中央でも文化の役割が見直されるなど演劇環境が大きく変容しつつありますが、職業専門劇団が劇団制を守りその力を発揮するには厳しい状況に変わりありません。今年「アーツプラン21」では、長年の芸術団体の要望の一部が「重点的支援事業」という形で実り、各分野いくつかの芸術文化団体への事業助成に踏み切りました。しかし、来年度の予算要求額ではこの予算は微増に止まっており、助成対象の枠を年々増やして行くというプランは早くも減速しています。

青年劇場では一〇年の長期計画を立て、二十一世紀を臨む劇団造りに取り組み、五年が経過しました。今回の総会で中間総括を行いましたが、計画の柱である世代の交代について一定の前進はみたものの、今後五か年の課題については相手の力量アップしなければならないという事が論議されました。また、あたらしい世代の養成についても大きな課題で、この面も現状では劇団の自力でやるしかない訳で、来年の募集に向けてしっかり研究していくことも確認しました。

秋以降、三班に分かれての公演で、十一月には「キッスだけでいいわ」の東京再演があります。来年の二月には劇団の三〇周年記念創作戯曲募集で入選となった島田九輔さんの「唱歌元年」を紀の国屋ホールで、五月は、北野茨さんとの初仕事、「こんにちはかぐや姫」を、上演します。ご期待下さい。（葛西和雄）

**劇団だいこん座**

捨てられた自転車の山、定年退職した吉行は誰にたのまれたわけでなく壊れた自転車を修理して行く。近所の人はいぶかしがり不信そうにながめてるが、車椅子の少女、弥生は壊れた自転車に自分の姿を重ねて吉行自身にはげまされてもう一度自転車に乗ろうとする……という内容のちょっと不思議な「じてんしゃ」作・森治美、演出・高橋寛で九月二十一日に鶴岡市中央公民館ホールにて上演しました。

「じてんしゃ」が主役、吉行が主役、弥生が主役と三人もの主役がいると思われる脚本でなかなかに苦戦しました。観劇後の感想もさまざまで吉行が主役だと思った人は不満そうで、弥生が主役だと思った人は良かったといい「じてんしゃ」が主役だと思った人は「うーん」という感じでした。我々としては新しい分野の挑戦でした。

**劇団 きづがわ**

春の公演「ブンナよ、木からおりてこい」（水上 勉・作）は、7月6日・7日の2ステージ、計五八〇名の観客で、一応の成功を収めました。劇団員、特に若手が足りなかったのでキャストを一般公募したところ、数名の新人、若手が参加してくれ、ベテラン共々、歌や踊りに汗を流しました。

この秋にも「ブンナ」の再演を計画しましたが、会場が取れずやむなく中止となり、現

在は、新人・若手を中心とした「けいこ場公演」にむけて、準備を進めているところです。来年2月には、劇団大阪企画の新劇団協議会合同公演が予定されており、これから又、忙しくなりそうです。

**黒石演劇研究会**

朝晩の冷え込みが厳しい季節になりました。この時期の日中との寒暖の差が『りんご』の出来を左右するといいます。そして『稲刈り』も最盛期を迎え、まさに『津軽平野』は秋たけなわといったところです。

さて黒石劇研は、10月13日、創立50周年記念企画「第二弾」として、きしだみつみ・作、中辻鉄雄・演出『北のうた――鳴海要吉・その愛と苦悩』を、第53回公演として上演します。地元黒石が生んだ口語短歌の先駆者、鳴海要吉。秋田雨雀と同じ年（明治16年）に同じ黒石に生まれながら、雨雀に比べると陽の当らない生活を送った要吉にスポットを当て、彼の短歌（詩）の素晴らしさ、貧困と挫折の、不遇だった半生を市民に広く知ってもらう意味でも、成功させなくては！と最後の追い込みをかけています。（担当、杉山）

**劇団「久喜座」**

埼玉県の劇団「久喜座」、団員八名、久喜市中央一―三―十三に代表を置く。小さな灯だ。本公演は久喜市の久喜総合文化会館。

90／7／25　劇団「久喜座」結成
91／1／20　第一回公演「二十二夜待ち」
10／13　埼玉西秩父公演
「二十二夜待ち」
92／1／11、12　第二回公演「赤い陣羽織」
8／9　埼玉朗読劇「この子たちの夏」
11／1　埼玉「花」（埼玉会館）
29　埼玉「花」（久喜総合文化会館）
93／2／5～7　埼玉「花」（俳優座劇場）
5／5　第三回公演「おかあさん堂々」
8／20　埼玉「花」
（国民文化祭　三重県）
10／3　青葉ふれあいまつり
「結婚の申込」
94／10　青葉ふれあいまつり
「人を喰った話」
95／2／25　第四回公演
「しんしゃく源氏物語」
8／5　久喜市人間尊重……
「この子たちの夏」
96／7／6、7　第五回公演
「マンザナ　わが町」
9／29　埼玉芸術文化祭「見沼の波留」

資料が見当らず省いたものもあるが活動のあらましである。週一回、公民館で練習をするがその確保と定時に始められないのが悩みである。職業を持ち、家庭を持ち、育児をしながら演劇を続けるのは心身共にかなりの重労働だ。大学進学、転職など環境の変化に伴い団員は流動的であり、結成当時から続けているのは三人である。

台本に書かれた文字が立ち上がり、動き出し、練習の中で少しずつ深まり生活を始める感動。そして、この感動は一人では完成されず、拘わった人たち全ての力が相互作用し完成されていくことに、とても深い意義を感じている。幕が上がる前の緊張、そして、客席と舞台の空気が一つに溶け合って時間が流れ、無事に幕が下りた後の虚脱。「人は感動するために生きている」と、かつて読んだ。次の未知なる感動を求めて、私たちは新しい台本に向かってしまう。

一人でも多くの人と感動を分かち合いたい。「久喜座」の灯を消してはならないと思う。（小林登茂子）

**劇団はぐるま**

今、稽古場では、『新島の飛騨んじい』の稽古が続けられています。



これは、飛騨美濃合併百二十年を記念し、又、文化庁芸術祭岐阜公演として、岐阜県が企画し、はぐるまに上演依頼されたもので、こばやしひろしが脚本と演出を担当し、一般公募により参加した数名とともに、岐阜と高山で上演されます。　新島村の全面協力により、方言指導はもちろん、新島に伝わる大踊りの指導もうけることができました。二百年近くたっても、この物語の主人公、上木屋甚兵衛の墓を毎日掃除し、花を供える新島の人達のためにも、甚兵衛の出身地、高山の人達のためにも、この公演は成功させなければならないと思います。

尚、公演日程は次の通りです。

◇岐阜　十一月三日
長良川国際会議場メインホール
◇高山　十二月七、八日
高山市民文化会館大ホール

『アリババと四十人の盗賊』は十一月二四日の輪之内町移動を残して、無事終了しました。移動を含め、八千人以上の観客動員はありますが、毎年子供の数は減っており、現状維持のためにも、益々の努力はしなければなりません。　内田　薫

**三浦半島劇団「海」**

来年（97年）三月の新作の公演に向けて代表である神田時枝が作品の創作にとりかかりつつ、新たな才能ある劇団員を求めてポスターなどによる宣伝を行っています。実は現在のところ新作の内容について詳しく把握している人間がいない状態でして、神田が先に細かく内容を語ることで当初の構想が歪んでくることを嫌うためか、それとも単に遅れているだけなのか、新入りの私には知りえないところなのですが、必ずや素晴らしい作品に仕上がることは間違いないでしょう。ここでは結果オーライで物ごとが進んでいくのです。もちろん良い意味で。

「海」では団員こそ少ないものの各人の発するキャラクターは独特なものがあり、一緒に歩いていると、どういう集団なのかと思ってしまうくらいです。そのかわり一人が欠けても次の公演が危うくなるというギリギリの状況でやっているわけです。それで結果オーライでやっていけるのは、お互いの間に流れている絶妙の距離感が働いているからでしょう。そこが私がこの劇団が居地良いと思う理由の一つなのですが、これがある限り次もその次も安心。たぶん…絶対。（朝倉智之）

**演劇集団あり**

自転車操業のように、公演だけは何とか続けています。六月二日、米子市文化ホールでの自主公演み群杏子作「恋ごころのアドレス」を金田正喜演出で観客は七百のホールに三百五十名ほどで目標まで行っていません。

十月二十七日、鳥取県民文化祭参加の鳥取県演技連盟公演、鳥取市文化ホールに於いて、私共ありは、別役実作「いかけしごむ」を添谷泰一演出。鳥取演劇集団は今門　洋子作「苺ジゴロと一日花」を岩本信一演出で、二劇団での公演です。

十一月二十二日米子市文化祭参加のあり自主公演、砂本　量作「レンタルファミリー」を鳥越永美子演出で上演します。

今年に入って、結婚休団、出産休団、体調不良の休団等多く、仲間も減少し、新しい仲間へ基礎もじっくりやらないで、公演だけを追うことになっています。

ありを支えてくれていた、高校演劇の連中も我が家に立ち寄っても、演劇の話しより自分たちの悩みごとの相談が多くなり、一時演劇部部屋のようであった我が家も、保険室的存在となったのも、世の流れでしょうか。（宮倉）

**劇団息吹**

全リ演、劇団の皆さん、お元気でご活躍の事と思います。この原稿を書いている今は総選挙のまっ最中。この選挙では、私達の演劇活動の自由を脅かしかねない『消費税率アップ』はなんとしてもくい止めなければなりません。この誌が発行される頃には結果はどうでているでしょうか？　日本の将来をもかけた大切な選挙です。『吉』と出るように微力ながら「頑張らなければ」、の思いです。ところで秋公演（武重邦夫、藤田傅・作、木田昌秀・演出「へのへのもへ」）の稽古も今は忙しく、歌に踊りに四苦八苦しながら猛練習を重ねているところです。出演者数も多く、今までと違った作風の作品に団員総力をあげて取り組んでいます。制作的にも6ステージ千八百名の動員は果たして可能か?!　今までにない大がかりな芝居づくりにあと一カ月半、とにかくやるしかない…というところです。「へのへのもへ」公演日程

十一月二十一日（木）・二十二（金）クレオ大阪西、

十一月三十日（土）八尾プリズム小ホール、十二月十四日（土）・十五日（日）府中中央図書館ライティーホール　（十月八日　記）

**「夜明け」**

夏の親と子の劇場（車のいろは空のいろ）は制作的には苦しい結果に終りましたが、舞台評価は特に恵那公演が大変高く、多くの大人だけでなく子供からの反応が多くありました。そのためだけではないと思いますが、恵那公演後三人（男二・女一）の入団希望者から稽古場に連絡があり、現在研究生として劇団活動に加わっています。車で40～50分かけて通わなければならない所にすんでいる三人ですが、がんばって続けて欲しいと思っています。

八月下旬より劇団の総力をあげて、青年劇場の「翼をください」の公演に取り組み、十月九日、七四四名の観客で見事に成功させました。過去八回の青年劇場公演、そしてこの五年の間に二回の中津川市内小5～中3の団体鑑賞公演の積み重ねと、「翼……」への想いが短期間の取り組みにもかかわらず、多くの人の動員につながったとおもっています。

舞台の評判も最高で、チケットを頼んだ人、買ってくれた人から、本当によかった、感動したと喜んでもらえました。

忘れられない「翼をください」の公演になりました。青年劇場に感謝の気持ちとともに、「翼……」の心をこれからも深め、多くの人と語りあい、未来へ結びつけていきたい、そして私達夜明けの舞台創りに生かしていきたいと想っています。

（鈴木弘文）

**劇団阿修羅**

劇団創立五周年公演ゴーリキー昨「どん底」（松木園演出）を九月四～八日の6ステージを東京六行会ホール、十四、十五日を名古屋港文化小劇場で2ステージ、以上を終了することができました。この公演を終えてみて、あらためて思い知らされたのは芝居は総合力の結集だということです。

今回の舞台では登場する役の数は十八、そのうち劇団員の担当は六役、他の十二役は協力をしてくれた劇団、個人の人達が受け持ち、それに群集参加者を含めれば出演者の総数は三十余人にのぼります。

また出演協力だけでなく、小・持ち・置き道具、衣装、履物等の借用そして大道具を中心とした積み込み、その輸送、舞台の仕込み裏方の作業等まったく見事の一語でした。

稽古が後半に入ってからメーク指導を丸山詠二氏にお願いし役々の顔作りをしましたがおおいに参考になりました。

公演の企画から稽古、本番までを振り返ってみるとやり通せたという感慨と次の公演では今回の舞台の一応の成果をもとに新しい創造に繋がって行くと思う。

なお、本公演に協力していただいた京浜協同劇団・劇団埼芸・劇団東演・吉田旅人（歌唱）南部合唱団の皆様には心よりお礼申し上げます。

**劇団支木**

「千年の丘」（北野茨・作、堅倉憲・演出）無時終えることができました。青森市の三内丸山縄文遺跡跡に材を得て、家族のきずなをさぐった作品です。記すべきは、初めて演劇鑑賞協会の例会としてとりあげられ「地元に支木あり」を浸透させる好機だったということです。結果、アンケートのほとんどが今後も地元劇団をとりあげて欲しい、という好意的な意見で占められました。また、これまでの単独公演とは一味違う、他組織との共同公演の難しさも、千仞の谷に落とされたような感じで勉強になりました。

京浜協同劇団の佐藤張二さんにはまたまた舞台美術でお世話になりました。万一、演技面で失敗があっても美術でフォローできるというジョークが出るほどすばらしい装置でした。ありがとうございました。

さて、現在進めている芝居はワイルダーの「我等が町」を素材にした地元取材の「あぁ、浦町駅」（田辺典忠・作、伊藤一郎・演出）です。十二月公演です。団員の結集が良くないのはどこも同じようですが、それぞれの職場・家庭事情を最優先し、頑固に、確実に、互いをフォローする体制を組んでいます。うれしいことに、役者復帰組が出てくるなど理想的な状況が生まれつつあります。義務感は職場だけでよろしい。

（伊藤）

**演劇集団和歌山**

九月に宮本研作・楠本幸男演出「花いちもんめ」を稽古場公演、五ステージ、三百人近くのお客さんに見てもらいました。まだやり残した事がたくさんありますが、高校公演、来年三月のアマチュア演劇祭での参加も決まり、これからさらに練り上げていきたいと思っています。

公演予定は他に来年二月七日に鐘下辰男作・水口広平演出「ワンス・アポン・タイムイン京都」を、来年秋に、「イーハートボの劇列車」を上演することが決まっています。

今年七月、早坂暁作、宇部市民劇団若者座「失われし時を求めて」（NHK、TV）を、天羽新平が（「私を返して下さい――ヒロシマの心」と、移動用にとの思わくもあって、舞台装置なしの舞台で、観客を引きつけ、感動的な仕事が出来たと思います。）脚色、演出し、2ステージ上演。早速、市内の高校から資料が欲しいと問い合わせもきています。十月十九・二〇日、市芸術祭参加、第三十一回公演、森田有作、劇団の中堅、大庭寿々美演出で「ぢらい」を上演します。公演を十日後にひかえて、連日稽古場は熱気に包まれています。

**劇団名古屋**

◎8／30・31、全リ演中部ブロックゼミナール。京浜協同劇団城谷さんの講演「元気のでる制作」。題名のごとく元気がモリモリ湧いてくる話しであった。高飛車になったり、皆に不信感を覚えたりの「制作」のおちいりやすい孤独な部分を一掃して、いかに「創造」と共に歩き、皆の良いところを引き出してゆけるか……「制作」の在るべき姿を、改めてとらえ直すことができた。「早春スケッチブック」を観られたこばやしひろしさんの言葉「あんなにお客さんが感動して喜んで帰ってゆく舞台を創りながら、お客さんがあんなに少いんじゃ、もったいなさすぎるよ！」ズシンと胸に響いた。劇団へ帰って、アレもやろう、コレもやろう！

ワクワクするような夏の終りの一日であった。

◎29期研究所生7名、一人も欠けることなく卒業公演を打上げ、9／18に卒業式。四名（男2女2）の若き仲間が入団！

◎劇団名芸の栗木英章さんから「良い本がある」と、北野茨さん作「千年の丘」が手渡された。劇団支木が青森演劇鑑賞会40周年記念に、本年7月公演した作品である。地元劇団の全国巡演は困難だ。が、脚本は全国を飛翔することができる。北野さん、支木共に快く承諾してもらい、青森で誕生した作品を名古屋でも上演できることになった。三内丸山で発見された巨大な縄文遺跡、折からのねぶたの火祭、父親の七回忌で久方ぶりに再会する或る家族……北野さん自身がモデルとも言われる意欲作である。青森の土や風のにおいから遠く離れた私たち、いかに普遍性ある舞台を創ることができるか……楽しみでもある。名芸の女優、栗木慶子さんにも客演してもらい、支木の皆さん、本当にありがとう！

◎私事ながら、自転車とモロに衝突し右足を骨折。足を高くしながら寝床でこれを書いている。どんなに多忙でシンドクとも動き回れる幸せをつくづく想い起こしながら―。

（ことうてるよ）

（記）

北野　茨　作・久保田明　演出

「千年の丘」

（時）10月25日（金）・26日（土）

（所）愛知県芸術劇場小ホール

**劇団演集（名古屋演劇集団）**

先ず、九一号では報告できなかった12月の公演レパを左記に伝えておきたい。

「日本の面影」

山田　太一　作

北原　雅子　演出

公演日

12月6日（金）、7日（土）、8日（日）

3日間　愛知芸術文化センター小ホール

演集の本公演としては2月の「悪女と眼と壁」以来、約10ヶ月ぶりという近年に無かった、ゆっくりペースで、久しぶりの公演となります。別に「疲れた！」という訳でなく、「ひとつの作品をじっくり創りたい！」という、とても前向きな姿勢で一同ハリキッテおります。

中部ブロックではこの所「合評会」なるものを開いて、名古屋の各劇団の作品を批評し合う様なことをしています。お互いが大変良い刺激になり、又交流の場が増えたので、とてもうれしく思っています。

演集としても今が転機というか、「もう一度初心に返って……」という意見もあり、なかなか良き傾向にあります。

申し遅れましたが私、磯谷が北原に変わってこう言った報告をする事がありますので、今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私はどうやら普通の人と考え方が違うらしく（早く云えば変わっている）、発想も時には頓珍漢な場合が有り、まあ、何卒暖かい眼でみてやってください、今後の報告に乞う御期待！

（磯谷　誠）

**演劇サークル　麦の会**

全リ演の皆様、連日の御奮闘御苦労さまです。今年も住専・エイズ・オリンピック・沖縄・衆院選とあわただしい年だった様に思います。しかし、忙しいだけでひとつも庶民の暮らしはよくなりませんネ。

さて、私達も10月4・5日に麻布演劇市、東京働くものの演劇祭参加と銘打って六本木の麻布区民センターにて「恋歌がきこえる」（小池倫代昨）の公演を無事終えました。

久振りの喜劇とあって、二日間、場内は爆笑とホロ苦い涙で好評でした。とくに今年は主役に新人を抜擢し、フレッシュな舞台ができあがり、いままでにない一味違った舞台だと観客からの声を頂戴しました。若さあふれるエネルギーはよいものだと、あらためて痛感しました。一休みして、更にまた来年に向けて新しい舞台創りにと会員一同、思いを新たにしているところです。

（吉岡利根雄）

**劇団あしぶえ**

劇団創立30周年記念公演、「おこんの初恋」春の部は、5月下旬から7月中旬にかけてのロングラン公演だったが、とにかく暑かった。冷蔵庫の冷えた麦茶につい手が伸びてしまうほど。それでも舞台設定は冬だから寒くなくてはならない。お客様に少しでも冬を感じてもらおうと、劇場のクーラーをガンガン効かせたのだが、四季を体が知りつくしている日本では、なかなかむずかしい。それでも、大好評のうちに幕を閉じ、それと同時に、秋にアンコール公演を行うことが決定した。

さて、十月に入って「しいの実シアター」を取り囲む山々は、おこんの住む雪降山の様子に次第に移り変わって行く。私達役者も、お客様も、自然と民話劇の世界に引き込まれていくはずだ。春の部以上に、秋の部は、おこんの心情を表現したいと思っている。

新たに新人四名を加え、10／27からスタートする秋の公演は、着々と準備が進んでいる。チケットの売れ行きも順調で、10／27（日）の11時、11／10（日）11／24（日）のそれぞれ11時と14時の合計5ステージ。

秋の公演が終わると休む暇もなく韓国の劇団「馬山」のプロデュース公演の制作がはじまる。劇団「馬山」は、本年七月、韓国大統領賞を獲得した劇団。総勢11名で、それぞれ八雲村の各家庭に、ホームスティし、交流を深める予定だ。公演日は、12／7（土）。皆さんのお越しをお待ちしています。（中島洋子）

**劇団弘演**

9月6日～9日、「アップルハウス劇場」と称して、「おこんじょうるり」（ふじたあさや作　みやざきひでよ演出）を上演しました。この作品は14年前初演し好評を得、移動公演など今回で3度目の上演です。「アップルハウス」とは、4年前から稽古場としてお借りしている場所で、照明も音響も客席も手作り、段差をつけて、タタミをひいて、音の響きを少なくする為暗幕をはり、今までの上演ポスターを飾り、苦労しましたが思った以上に雰囲気の良い劇場が出来上がりました。これもまた14年ぶりという、秋本・作間の親子共演が話題となり地元新聞にも載り、70席用意した観客席も全ステージ満席で、土曜日の夜などタタミとイスを前部出し、一五〇人も入ってしまったほど、うれしい悲鳴でした。いつもは送り迎えだけのお父さんも、千円の入場料ということも手伝って今回は家族全員で、観てくれたのもうれしかったです。今後も「アップルハウス劇場」続けていきたいと思います。（大ホールでも演じますよ。）

**劇団京芸**

しばらく跡絶えていた劇団の小公演ＤＤシアターが復活した。

「国語元年」（井上ひさし作、平岡秀幸演出）九月十八日～二十三日、八ステージ。

このＤＤシアター公演を文字どおり地域に根づかせようと、劇団員が手わけして地元の観光協会や老人会、女性の会などに働きかけ沢山の地元のお客が観てくれ、連日満員の盛況で好評裡に終えることができた。

○「白いライオン」（岡部耕大作、藤沢薫演出）おやこ劇場、近畿小・中学校巡演中。

○「蝿の王」（ウイリアム、ゴールディング原作、ドージン脚本、藤沢薫演出）全国高校、おやこ劇場巡演中。

○「そうべえごくらくへゆく」（田島征彦原作、駒来慎脚本、つげくわえ演出）おやこ劇場、近畿小中学校巡演中。

四月に開講予定だった俳優教室を十月から再会した。

**劇団からっかぜ**

浜松周辺では、演劇花ざかりです。静岡ライブシアター96～これが私たちの舞台だ～では6集団の芝居が3会場でおこなわれます。

静岡県西部高等学校「演劇連盟発表会」では、22高校の演劇部が5会場で11月におこなわれます。

山静ブロックゼミナールが7月20・21日にありました。ゼミナール観劇交流作品として当劇団が「ベッカンコおに」を上演しました。稽古場のある篠原地域の人達を集めて、心静ブロック集団と全員で観劇していただきました。

今、仕込んでいる作品は、「ジプシー・千の輪の切り株の上の物語」です。作・横内謙一、演出・布施佑一郎と決まりました。10月5日現在、夜10時半を過ぎても熱い稽古が続いています。公演日は、11月23日福祉文化会館ホール、2月15日アトリエ公演と決定しています。

11月30日は移動公演で篠原中学校でおこないます。

（西井　学）

**劇団すがお**

秋たけなわ。芝居の仕上げに余念がありません。キャラメルから外れて、今度は葬儀の在り方を問うチョット社会派的なお芝居で、苦労しています。

**次回公演**

11月30日（土）7時／12月1日（日）2時
桑名市コミュニティプラザ
『ONとOFFのセレナーデ』
古城十忍／作　加藤武夫／演出
桑名市文化スポーツ振興公社／共催事業
＊この芝居、葬儀社の新築した「セレモニーホール」のオープニンイベントで公演します。

11月23日（土）2時　北勢会館。

**劇団はにわ**

十月の声を聞いて途端に焦り気味になって来ました。公演迄の稽古の回数が一ケタになってきたからだ。91号で本読みを始めたとのお知らせして半年、週一～二回の練習を続けて参りました。間、八月末日、全り演、中部ブロック会議の際「淡墨色の桜たち」を名古屋弁バージョンでモデル上演させて頂きました。この作品は、春にも上演し、その際は作者の小島真木さんも、お急がしい中、遠方より、おいで下さり、あたゝかいお言葉を頂き感激致しました。そしていよいよ十一月十四日、たらちねの「瞼の母」になりたかった女たちの幕が上がる、ご存知、長谷川伸の「瞼の母」を引用して、母子の情愛、家族関係等々、今一度、考え直してみたいと思うのです。そしてそれが大須演芸場の昔懐かしい、あの雰囲気とマッチさせたいと気ばかりはやるが……ところで只今、はにわの人員は七名、で、登場人物は、その約三倍、演出には、はにわだけでやってみたいと無理なお願いをしたので当然、一人三役の早変わりと相成りました。舞台裏は、そりゃあもう一ご想像下さい。92号が発行される頃は、幕も降りて、悲喜交交の想いで、おしゃべりの花が咲いている事でしょう。

（下高原多美子）

**演劇サークル・トラム**

8月24、25日『演劇講座IN山口』では暑い中御苦労様でした。

去る9月30日山口市教育委員会主催の青少年劇場で柴田多美子・作『犬の瞳』の公演をしました。

講堂での上演の為2間6間の張り出し舞台を組み、多感な時期の中学生に目の前で生の



演劇を観せることができたこと事態に感激しています。

それから10月26日（土）夜7時～約2時間、徳佐青年団主催で『宮沢賢二とオカリナのタベ』に参加し「よたかの星」の朗読劇その他を上演。最後に毎週火・木・夜7時～10時頃迄集まっていますので山口市にお立ち寄りの際は是非トラムへおいでませ！　では次回通信まで。

（中島より）

**劇団四紀会**

秋の深まる中、皆さん頑張っていらっしゃいますか。早速、この間の動きをまとめて。

6月に、昨年の阪神・淡路大震災で開校以来初めて1年間休校となっていた演劇教室の新年度がスタートしました。危ぶまれていた申込みも、面接日を過ぎてからも3人4人と続き、例年並の人数で現在に到っています。

前号で作・演出・演目ともに検討中だった百三回公演は、木下順二作・岸本敏朗演出・「木竜うるし」「機の音」「おもん藤太」の小品（と言うと、往生したスタッフ勢に怒られそうですが）3本を上演しました。今回の公演、創造・普及の両面で多くの課題を残す結果となり、これからのステップにしていかねばと肝に命じておるところです（9月13～15日神戸シーガルホール）。

休む間もなく半月後の10月5日、市内小学校で「大工と鬼」「仙女の錦」の移動公演。続く12～13日は、神戸をほんまの文化都市にする会主催「五十年目の戦場・神戸」東京公演に6名が参加。更に、16・19の両日、「泣き虫なまいき石川啄木」を春日町と神戸市内で上演と、正に殺　人的なスケジュールには、いずれも再演・再々演とは言え、団内でもさすがに嘆きの声が上がっています。

（今に始まったことではないのですが）いくらでも長くなってしまいますので、今後の予定については、最小限に止めます。

◇荒木昭夫／作　岸本敏朗／演出
「大工と鬼」
十一月三十日（土）
若宮小学校（市内）
一回公演
十二月七日（土）洲本市立広田小学校

◇森卓也（団員）／作　津村葵／演出
「ロング・コール・フォー・ヘルプ」
十二月十四日（土）～十五日（土）
神戸アートビレッジ・センター
三回公演

◇みんな集まれ！　こどもの世界
ファミリーコンサート
十二月二十二（日）
コープこうべ生活文化センター

以上が年内の私たちの公演予定です。こうして今年も、慌ただしく暮れていくのであった…

（里中）

**東京芸術座**

九月東京公演では、劇団としては初めての試みとして、アリーナステージ形式の舞台を作りました。アリーナステージと言っても、通常の小屋に設営するので、変形アリーナステージと言ったところです。舞台の上に客席を設営し、そこでも観てもらうということでお客さんの興味も引いたようです。

作品は、平石耕一の脚色・演出『家族』（原作／吉田とし）です。

九月十一日～二〇日に一〇回公演を都内五カ所の劇場で行いました。十二月アトリエ公演は「マグノリアたちの朝」（ロバート・ハーリング／作　青井陽治／訳）を高橋左近／演出で。十二月五日～十五日で十二回公演。

旅公演は「十二人の怒れる男たち」（レジナルド・ローズ／作、稲垣純／演出）と「あわて幕やぶけ芝居－東京空襲三・一〇」（大橋喜一／作、杉本孝司／演出）で年末まで。

**劇団　蒼生樹**

九六年の総会で加盟承認をされました、劇団蒼生樹です。横浜を拠点に、十二年活動を続けています。以前より横浜で活動していた歴史ある三劇団を統合して、劇団蒼生樹としました。その中には以前全り演に加盟していた「よこはま青年座」も加わっています。全り演加盟について一年間検討討議を重ね、劇団総会で「全日本アマチュア演劇連盟」を脱退して、全員一致で全り演への加盟を決定しました。

通信には始めての報告ですので、少し遡って報告をさせていただきます。

■一九九五年七月七日～九日
テアトルフォンテ
ノエル・カワード／作　濱田重行／演出
「陽気な幽霊」
常打ち小屋にしている座席五百席ほどの教育文化センターから離れて、演劇専門の座席三百ほどのテアトルフォンテに移しての公演です。舞台機構も揃っているので、その小屋にあわせて演目決定をしたこともあって、舞台装置も二階建て、仕掛けもふんだんに入れたために舞台効果はよく、やり過ぎという声もあったほどです。ただ、いつもの会場に比べて遠いということもあって、客の入りは八百名。四十万の赤字を出してしまいました。

■一九九五年十二月十五日～十七日
横浜教育文化センター
横山さとみ／作　濱田重行／演出
「忠臣蔵でござーる」
毎年十二月は「吉例歳忘れ興行」と銘打って舞物を公演しています。これが劇団のカラーにもなって、客が毎年楽しみに見に来てくれています。
この回は座員の書き下ろし、それに処女作でもあり、劇団員総出の公演となりました。観客動員も討ち入りの日に忠臣蔵物（といってもずっと後の忠臣蔵騒動ですが）ということもあって千三百名。
人口の多い割には少ないと感じるでしょうが、専門劇団でも千名の観客を動員するのは難しい土地なので、奮闘したといえます。七月公演の赤字補填予算に入れ支出も抑え取り組んだ結果、赤字分も補填するという大入りになりました。

■一九九六年七月十九～二十一日
教育文化センター
藤原美鈴／作　濱田重行／演出
「逞しき女々（ひとびと）」
神奈川県脚本コンクール入選作の委嘱公演。当初藤原美鈴さんの文化庁脚本募集の入選作「エジアンパラダイス」を予定していたのですが、上演許可が下りず同作者のものに決定しました。
演出との話し合いで中身を大幅に変更し、題名通り女性座員を中心に軽妙なやりとりの芝居になりましたが、居酒屋が舞台のせいか観客には「現代人情劇」に映ったようです。

■一九九六年九月二十五～二十九日
テアトルフォンテ
大橋泰彦／作　濱田重行／演出
「ゴジラ」
これは横浜のアマチュア演劇連盟主催の、加盟五劇団の合同公演です。三年前に「横浜演劇祭」の名で各劇団が作品を持ち寄って公演、昨年は二劇団づつのジョイント公演、今年は五劇団の合同公演になりました。各劇団とも本公演を前後に控え全員が参加ということにはなりませんが、芝居の作り方や稽古方法も違うために、劇団の若い人たちにはいい刺激になったようです。今から来年やるときには、自劇団の公演には出



なくても出たいと表明している人もいます。

■一九九六年十二月二十～二十二日
教育文化センター
吉永仁郎／作　濱田重行／演出
「遅すぎた長屋の花見」
そして今年の吉例歳忘れ興行です。数年前に候補作品としてあがったのですが、俳優座が公演するという理由で上演許可が下りず、今回の公演となりました。
九月の合同公演が終えたばかりなので、すぐ稽古にかからなければならなくて息吐く暇もないと行った感じですが、九月の公演の勢いで十二月公演も大入りにしようと、各方面の方々のお手伝いもいただきながら稽古に入っています。

**劇団やまなみ**

秋の公演は、山梨県芸術祭実行委員会（県及び山梨演劇協会）主催の合同公演（山演協加盟劇団のうち三劇団外）になります。劇団やまなみは、在籍三十一名のうちキャスト八名、スタッフ七名、計十五名の参加です。
そこで、残り十六名は如何なことになっているのか。うち五名は、はっきりした休団、長欠者。うち五名は条件付き参加劇団員。残りの六名は、戦力になって欲しい者たちで、このままだと危ない。実は、九月十五日に、県の南の富沢町での移動公演を、決定後、劇団の態勢が整えられずキャンセルしてしまっているのです。
公演スケジュール
◎十二月一日（日）・二日（月）
於　県民文化ホール・小ホール
山梨芸術実行委員会主催
『エンドレス・ライフ』
河野通方／作（劇団やまなみ）
◎三月九日（日）
於　都留文化ホール
県教育委員会主催
移動芸術劇場『お世話料』
河野通方／作

**劇団かすがい**

ついこの間まで「暑い！」が合言葉だったのに、もう秋――。
皆様いかが、お過ごしでしょうか。
7月に約2年分（！）の総会を終え、稽古場の内装にとりかかりました。コンクリート剥き出しだった壁はキレーな石膏ボードで覆われ、衣装・小道具・書類の棚を作り、ミニ舞台を作り、客席を作り、てんやわんやの大騒ぎ！
夏場の、クーラーのない部屋での作業は、まさに地獄絵（サウナ）と言ったところ！
予定は未定、とはよく言ったもので、8月いっぱいで終らせるはずだったのに、その暑さと人手不足のために結局9月半ばまでずれてしまい、そのまま9月15・16日の稽古場お披露目会に突入するハメに…。
でも、今後この稽古場を芝居だけじゃなく色んな事に使おうという意味で、当日は知り合いに頼んで落語・映画などを催し、盛況のうちになんとか終らせることができました。
今は、10月16～20日の稽古場柿落とし公演に向けて猛練習の真っ最中です。そして、それが終れば息つくヒマもなく次の芝居の準備。今年いっぱい、そして来年も、当分のんびりできそうにありません。『貧乏ヒマなし』とは、このことです（でも、うれしい悲鳴です）
※10月16～20日劇団かすがい稽古場にて
『息子』
『淡墨色の桜たち』2本立て

**劇団　たけぶえ**

十月十一日に『春冬～武生の式部～』を上演しました。
今年は紫式部が父藤原為時に従って武生に来てから千年になります。それを記念して市

では春から色んなイベントが繰り広げられていました。その一環として私達も武生時代の式部を舞台にしたのです。台本は大阪在住の大橋むつお氏で五年程前から委嘱していたものですが、これも千年祭を契機に書き上げて戴きました。

十二単、狩衣などといった平安衣裳を始め同じ日本の芝居でありながら、小道具一つにわたるまで図鑑と首っ引きで、さすが千年という歳月は遠いものと実感致しました。でも「日本民族衣裳源流会」の方々や地元の多くの人たちに支えられて、公演は好評の内に終える事が出来、ほっと一息入れているところです。

この公演準備のさなか、私達にとって思いもかけぬ嬉しい事が持ち込まれてきました。それは、この五月に参加した『リヴァプール国際演劇祭』から劇団たけぶえに「最優秀特別作品賞」が与えられる事に成ったという報せでした。そして大会長であり芸術監督のエバ・ムーア女史がその賞を持参して武生を訪れるというのです。

私達は『リヴァプール国際演劇祭』では、「最優秀舞台技術賞」と「最優秀主演女優賞」を戴き、「作品賞」「演出賞」「主演男優賞」にノミネートされたのですが、エバ先生の言われる事では作品賞に付いては、たけぶえとスエーデンに贈ったのだがその後実行委員会とスポンサーの討議の中で初めてのケースとしてたけぶえに特別作品賞（SPecil award = runner - up to best production）を贈る事になった、との事でした。そして私達は十月七日エバ先生を武生に迎え、素晴らしい賞を戴きました。

そしてこれらの賞は十一日の公演のロビーに飾られました。

**演劇集団　石るつ**

10月18・19日に第43回公演『夢幻乱歩館』二幕の怪奇幻想劇（一、目羅博士の不思議な犯罪、二、芋虫）（作・葛山耿介　演出・境野修次）を終え、一月の東京地域劇団演劇祭に向けて、稽古に入っています。

『鍋屋の紐はなぜ朱い』原作・小松重男（原題『年季奉公』）／台本・笠置リエ／演出・境野修次、いとうエリコ。

一月十七日（金）七時、十八日（土）二時と六時の3ステージです。東京の池袋にある東京芸術劇場小ホールに於いて。

一九九七年度。公演企画。

第44回『鍋屋の紐はなぜ朱い』（一月公演）第45回公演は六月十三日、十四日（3ステージ）深川江戸資料館小劇場に於いて。

藤沢用平作品から脚色、上演いたします。

十月は、再び葛山耿介作品の乱歩物を予定しております。

尚、劇団の連絡先が左記に変更になりましたのでよろしくお願いします。

〒134　東京都江戸川区西葛西三－十五－八－七〇一、電話〇三－三八〇四－〇五〇六、境野修次方になります。

作家と劇団の緊張関係

# 西日本劇作家の会第13回総会の報告

楠本　幸男

西日本劇作家の会総会、今年は九州、太宰府市の天満宮近くにある、有智山荘で開かれた。ここは福岡現代劇場の猿渡氏の紹介によるもので、地元の建築家が博労宿や、古い民家の柱を利用し、宿舎として再建設したもの。黒光りする柱、磨きぬかれた階段の手すりなど、生活の重みと独特の雰囲気をもつ山荘は、照明器具の一つ一つ、庭の隅々にまで建築家の志が感じられる。福岡現代劇場ではこの夏、ここで約百人の観客を集めて「精霊流し」を上演したという。舞台照明などいっさい使わず、裸の舞台で演じられたという「精霊流し」のイメージが私の中で広がった。

さて、出席したのは栗原省（劇団いこら）、猿渡公一（福岡現代劇場）、東川宗彦、久語孝雄（四紀会）、広島友好（演劇街）、楠本幸男（演劇集団和歌山）、堀江ひろゆき（劇団大阪）、法月紀江（舞台衣装家）、それに新会員の森安二三子の各氏。二日目からは高尾豊氏（生活舞台）がかけつけた。また福岡現代劇場から小牧、高尾両氏が参加してくれ、いろいろとお世話をいただいた。会場を九州に設定して地元の作家の参加を当て込んでいたのだが、参加が少なく目算

がはずれた形になった。事務局長として責任を感じていたが、「劇作家が群れるのは難しいよねえ。」との栗原氏の言葉に、少し気が楽になった。

研究台本となったのは、作家として今、最高潮にある広島友好氏のテアトロ新人賞受賞第一作「サラエヴォのゴドー」、平成五年度文化庁の創作奨励特別賞を受賞した西岡誠一氏の「幸せさがそ」、本年度の文化庁創作奨励賞佳作を受賞した窪田吉弘氏の「思い出してよ」、そして東川氏のオペラ本台本「大和川賛歌」（第三部）。「サラエヴォのゴドー」もはこの十一月から十二月にかけて作者自らの演出で演劇街によって上演予定。「思い出してよ」はこの六月に劇団大阪によって上演。「幸せさがそ」はこの九月に大阪自演連の合同公演として上演された。「大和川賛歌」は井上満寿夫氏による第二部とともに来年の四月に上演される予定である。窪田、西岡の両氏は仕事の都合で参加できなかったため、討議は広島氏の「サラエヴォのゴドー」が中心となった。

「サラエヴォのゴドー」は、戦乱のサラエヴォで「ゴドーを待ちながら」が上演され観客に深い感銘を与えたというニュースが作者の創作の動機となったという。

サラエヴォで「ゴドー」を上演する準備をしている役者、ゴゴーとディディー。そこに敵の手に陥り殺されたと思っていたゴドーの妻、マリマがやってくる。強姦され、子供を身ごもった体で。ゴゴーとマリマの緊張したやりとりの中に、「ゴドーを待ちながら」と「ハムレット」墓堀りの場の劇中劇が織り込まれ、ラストではこれを上演準備する日本人のスタッフが現れ幕となる。

討議では広島氏の計算された、無駄のない台詞、劇中劇の巧みな折り込み方を高く評価する一方、山口弁のスタッフが登場するラストには「ここまで三重構造にして複雑にする必要なはい」「通俗的に走ってしまった」（猿渡）など、否定的な意見が多かった。問題提起をした久語氏は作品の質に感心しながら、「ゴドーを待ちながら」をよく知らない客に対してどのように訴えかけていくのか疑問を呈した。また、「これを読んでサラエヴォで何がおこっているのかわからない」（栗原）、「戦争をしているという緊迫感がない」（森安）などの意見に対し、広島氏は「今回は政治情勢を捨てて台詞を書いていった。自分としては五年後、十年後でも力のある作品を書きたかった。」との発言があった。

最後に栗原氏は「ある状況の中で男と女がどう生きるかという風になっているのが作品を弱くしているのではないか。それと芸術に対する思い入れの問題、なぜサラエヴォでゴドーをやるのかという問題が、ゴドーのヨーロッパと日本の受け入れの違いとからんで、自分の中で吹っ切れない」との発言があった。



東川宗彦氏の「大和川賛歌」（第三部）はオペラの台本でいくつかの歌詞を集めたもので、戯曲として討議するのは難しかった。かたおかしろう氏による第一部はすでに上演されており、今回も合唱と民謡連盟による上演で台詞やアナウンスもほとんどないという。参加者からは、民謡と合唱がどう融合するかの興味の方が大きかったようだ。東川氏によると、演出との話し合いで削りに削られてこういう形になったそうだ。結果としては事件を後ろに下げて大和川の流れを見せていくというやり方は成功しているようだ。ただ、上演がどのように成功するかはまだ未知数なところが多い。

「幸せさがそ」は、視力障害者の母を中心に、祖父の代、子供の代と、三世代の移り変わりと、母の死までを描いている。討議では、大阪弁の使い方のうまさと、ユーモアが評価された反面、風俗や情緒に流れているところが指摘された。また、「障害者を描くとどうしても甘くなってしまうのでは」（堀江）との発言もあった。私などは、この作品の巧みな展開に、感心してしまったものだが、栗原氏の「風俗的であっても良いし、もっと饒舌であってもいいと思うが、なぜ障害者なのかということが通奏低音のように作品の底に流れていなければならない、そこまで風俗になってしまってはいけない。」という発言が印象に残った。

「思い出してよ」は、過労死がテーマ。話しは通夜の晩から始まる。親族が集まる中、過労死で死んだ主人公、山田太郎が棺桶の中から起き出す。そして幽霊となっても、出勤し、仕事をし続ける、という話。

「発想の面白さ、主人公の次に奥さんが仕事人間になっていく逆転の面白さ」（広島）をうまく発展させられなかった点が指摘された。特に幽霊に関して、イメージとして迫ってこない。存在感がないとの意見が多かった。また、「せっかく幽霊を出したのに最後に妻の夢にしてしまったのでこじんまりしてしまった。日本人論みたいなものを書いた方が面白くなっていたのでは」、との堀江氏の発言もあった。栗原氏は、東川氏がオペラ台本を八回も書き換えたことを例にひきながら、改稿の過程で作者と劇団との間にどのように緊張した議論があったのかと、劇団大阪の堀江氏に対して質問があったが、必ずしも発展的な議論にならなかったらしい。

創造する魂同士が火花を散らしてぶつかり合い、新しい創造が産み出されていく、という構図は、言葉ではやさしいが、今日のこの多様化の、やさしい時代では、実践は、至難のことなのかも知れない、そして創造のぶつかりあいのない芝居づくりは、観客ともどこかでなれ合った芝居をしていることかも知れない、と自分の身に引き寄せて考えた。

会では栗原氏より、西日本劇作家の会のこれまでの活動

をまとたプリントが配られた。劇作家と劇団の互いの自立をめざして、故土屋清氏の提案で、西り演より独立して十三年。記録を見ると実にさまざまな作品が討議されてきたものだなと思う。そして、この会のいいところは、作品を一方からだけの価値で判断するのでなく、さまざまな角度から光を当てて、発展の可能性を考えて見るところだと思う。私もずいぶんこの会の恩恵を受けた者の一人だ。

会の終わりに、『ドラマの森』は、第五集くらいまでいこうや」と話し合った。二年おきに発行し続けていくと第五集は二千一年の発行になる。二十一世紀、時代はどれだけ変わるのか、変わらないのか。

# 草の根的演劇まつりに誇りをもって

大阪春の演劇まつり実行委員会事務局
ユースサービス大阪文化課
新保憲一

■20周年を迎えた演劇まつり

大阪春の演劇まつりとは、在阪のアマチュア劇団が自主的に参加し、草の根的に繰り広げられてきた、全国的にも珍しく息の長い演劇祭である。もっとも大阪には新劇団協議会が主催する専門劇団を中心とした新劇フェスティバルという催しがあり、こちらは秋に行われてきたから、春の演劇まつりは後発の弟分といった感もある。

一九七七年に始まったこのまつりは当時アマチュアや若手新劇団が公演する劇場がほとんどなかった大阪で、都心に近い森の宮の府立青少年会館の小ホールを何とか演劇の拠点にしようという趣旨で出発した。なにしろ会館は貸館であり、当該団体は店子でしかなかった。文化的な自主事業を展開していくにも財源がない。そのため、参加分担金を各劇団から徴収してまつりの運営費に当てるという形態がとられ今なお続いている。会場押さえも一部を除いて一般の団体と同様に抽選会に臨んで確保させている。抽選だから週末が必ず確保される訳でもない。何故このような説明をするかといえば、実はこの不自由さ、財政的な恩恵の乏しさの中でやりくりをしていく草の根的な精神こそが、このまつりを続けさせている重要なファクターであると思われるからである。

もちろん演劇祭だから前夜祭・後夜祭・合同評価会・観劇交流などの実施、ささやかながら顕彰も行っている。だが、それらは概ね会費制の自主参加で支えられている。要するに演劇まつりは参加劇団で構成する実行委員会の熱意



と意欲によって継続されてきたといえるのである。

■繰り返された創造と交流

まつりが始まった初年は8劇団で、大阪自立演劇連絡会議加盟の劇団（全リ演西会議に加盟の劇団未来・きづがわ・大阪・息吹・わだち・大阪府職劇研）が中心であったが、5年目からアマチュア演劇連盟近畿支部が主催に加わり10年目には12劇団、20年目に今年は最多の20劇団が名を連ねる盛況振りとなった。

この間数多くの創作劇が上演され、自演連の合同公演も5年に一度行われるなど創造的な試みが成されてきた。また、10周年では戯曲を公募し、不登校と家族の崩壊を描いた入選作品「ピアノの上に」（作・重光透）を記念公演として上演した。

因みに今年上演された18演目中創作初演は9作品、翻案・脚色を含めると12作品がオリジナルで、まつりを特徴づける意欲的な挑戦が目立っていた。中でも自然派の音楽と演劇や人形劇をコラボレートしたファニータイムレーベルの「夢のしらせ」、マスコミ系のサラリーマン劇団BELLサッサの「セテップオンバナナ」が若者の等身大の友情を描いた作品としてそれぞれ賞を得た。

そして、2ヶ月後、まつりの酉を飾る合同公演「幸せさがそ」が実現したのである。

■20周年記念号同公演「幸せさがそ」

この戯曲は、まつりの参加劇団りゃんめんにゅーろん代表・西岡誠一氏の作品である。氏の母上をモデルに「弱視というハンディを背負って生を受け、動乱の昭和を妻として母として力強く生き抜いた女性とその家族愛を描くことで幸せとは何かを問いかける」もので、平成5年度の文化庁舞台芸術創作奨励特別賞を受賞している。

キャストは30名を超え3幕11場もある大作だが、受賞理由に大阪弁が躍動しているとある。ここは何としてもまつり20周年の記念碑的作品として地元大阪で上演しよう。こういった機運の中で1年前から準備が進められることになった。

演出をはじめキャスト・スタッフも可能な限り参加劇団から人選することを第一義に、まつりの実施時期（5～7月）を挟んで大変な作業となったが、結果的に合同公演に相応しい形態をとることができたのは幸いである。

親子ほども年齢の離れたベテランと、若手、所属も違えば創る芝居の傾向も様々である。戸惑いや曲折もみられたが、まつりの各劇団の威信をかけての真剣な取組を通してこれまでにない交流と刺激がもたらされたと思う。公演は9月に4ステージを行い一三〇〇名の観劇を得た。再演の話しも上がっている。この経験が演劇まつりの今後にどの様な形となって現れるのか、今から楽しみである。

# 今どき現代史講座

## ――ブロークン・ファミリー――

佐藤逸平

とき　一九九五年

ところ　首都圏内のよくある一軒の家庭。

ひと
夫　45　サラリーマン。
妻　43　その妻。
娘　19　女子大生。
息子　15　中学三年。
祖父　75　夫の父親
老婆　72　南の国の日系二世、軍属と名乗る女。
女教師　26　良雄の担任。
女　42　人妻。
男　48　弁護士。
息子のGF　15
兵士
異国の女

### プロローグ

異国の夜。太平洋戦争の最中。
影絵のように背景を大勢の兵、重・軽砲など人馬が間断なく通過する。兵士と異国の娘。

**異国の娘**　ナゼ戦争ヲシナケレバナラナイノデスカ?
**兵士**　平和を築くためさ。
**異国の娘**　誰ノタメノ平和?
**兵士**　我々のために決まっているじゃないか。
**異国の娘**　我々トイウノハ日本人ノコト?
**兵士**　東洋の平和、世界全体の平和のために戦わなければならないんだ。
**異国の娘**　戦ウトイウコトハ人ヲ殺スコトダワ。ソレガ平和トイウコト?
**兵士**　殺さなければ殺される、平和を獲得するためには大きな犠牲も払わなければならないんだ。
**異国の娘**　私タチノ国ヲ戦場ニシテ?
**兵士**　だから、君の国も我々の国も永遠の平和を得るために。
**異国の娘**　アナタノ心ガ分カラナイ。
**兵士**　……。
**異国の娘**　遠クナッテイク、アナタガカスンデイク。



**兵士**　……。
**異国の娘**　ワタシノ国ニハ、コンナ話ガアルノ。「アル所ニ、タイヘンニ貧乏ナ年寄リ夫婦ガ住ンデイテ、二人ノ持チ物トイエバ、タッタ一羽ノニワトリダケダッタ。アル日ノコト、ニワトリガ卵ヲ六ツカエシタ。ソシテ、トテモカワイイヒヨコガ六羽飛ビ出シテキテ、母鳥ハトテモ喜ンデ、ヒヨコヲ大切ニ育テタ。ソシテ、イツモ禿鷹ヤ大鷲ガ子供タチヲ盗ンデイカナイヨウニ気ヲ配ッテイタ。アルトキ、村ニオ祭ガアッテ二人モオ祭リニ行コウト思ッタ。ケレドモ貧乏ナ二人ニハ、オ供物ヲ買ウオ金ガナカッタ。明日ハオ祭リトイウ晩ニ、二人ハコンナ会話ヲ交ワシテ嘆イタ。『ババアサンヤ、イヨイヨ明日ハオ祭リダガ、イッタイ神様サマニ何カオ供エデキル物ハアルダロウカ。ソウシナイト、オ祭リニ加エテ貰エナイシ、隣ノ人達ニ恥ズカシイシ』ト、オジイサンガ言ウト、オバアサンハ『トイッテ、何カヲ買ウオ金ハナイシ、オ祭ニ加ワラナケレバ、近所ノ人達カラハ、ケチンボトイワレルダロウシ』……二人ハ、トウトウ母鳥ノ肉ヲ神様ニオ供エシテ六羽ノヒヨコハ二人デ育テルコトニシタ。二人ノ会話ハ、夜ノ静ケサノ中デ、床下ニイル母鳥ニモヨク聞コエタ。殺サレルコトヲ知ッタ母鳥ハ六羽ノヒヨコタチヲ集メテ『私ハ明日死ナケレバナラナイ。ソコデミンナニオ願イガアル、ケンカヤ争イハヤメナサイ。食べ物ヲ捜シニ行クトキハ、イツモミンナカタマッテ、離レバナレニナラナイヨウニ。ソウデナイト、犬ヤ禿鷹ヤ大鷲タチガ襲ッテキテオ前達ハ食ワレテシマウ』突然ノ話ニコドモタチハ驚キ悲シンダ。翌日ニナッテ母鳥ハ捕マエラレテ殺サレタ。ソレカラ、毛ヲムシルタメニ、命ヲ失ッタ母鳥ハ煮エ立ツオ湯ノ中ニ投げ込マレタ。ソノ一部始終ヲ見テイタ子供達ハ、一緒ニ飛び上ガッテ、煮エタギルオ湯ノ中ニイチドキニ飛ビ込ンダ」
**兵士**　辛い話だ。
**異国の女**　スルト、母鳥ト六羽ノヒヨコタチノ強い愛ノ力ガ働イテ、ミンナ星ニ生レ変ワッテ、今モ、七ツノ星ニナッテキラキラ夜空ヲ渡ッテイクンダッテ。
**兵士**　北斗七星の話だね。
**異国の女**　ヒヨコノ七ッ星。
**兵士**　美しい話だ。
**異国の女**　私ハオ話ノ世界ノコトトハ思ワナイ。
**兵士**　……。
**異国の女**　アナタガコノ村ニヤッテキタノガ、アノ大キナ戦争ガ始マッタ一九四一年十二月。ソシテ始メテオ会イシタノガ……、
**兵士**　三月。ゴールデン・シャワーの花がきみの庭に月の光を受けて咲きほこっていた。
**異国の娘**　ソウデシタ。アノ時、アナタハトテモトテモ優シカッタ、ハジメテ、私ノ家ニ来タ時、父サン病気デ長イコト寝テイマシタ。母サントト私ガ働イテ、弟、妹、オ祖父サン、オ祖母サン。家ノミンナノ生活ヲミテイル時、母サンガ地雷ニフレテ大怪我ヲシテ、私タチ絶望シテイタ。ソノ時ダッタ、アナタガ家ニ来タノハ。ソシテ、傷ノ手当ヲシテクレテ。
**兵士**　誰だってするさ、人間ならば当然のことだった。
**異国の娘**　イイエ、他ノ日本ノ兵隊違ウ。何カノ調達ニ来テモ、ミンナ私達ヲ虫ケラノヨウニシカ扱ワナイ。アナタハ違ッテイマシタ、ソレカラトイウモノ何度モ薬ヲ持ッテキテクレテ、毎日毎日見舞ッテクレテ。オ陰デ母サンノ命ガ助カッタ。母サンモ父サンモダカラアナタヲ心カラ尊敬シテイマス。私ダッテ……
**兵士**　もう言うな、それ以上言わないでくれ。
**異国の娘**　初メテ会ッタ頃ニ戻ッテクダサイ。
**兵士**　……。
**異国の娘**　戦争トイッテモ、コノ村ハ昔ト同ジデ平和ダッタ、トコロガソレモイツノ間ニカ、ドウシテナノカ変ワッテイッタ。
**兵士**　どうすることもできないんだ。
**異国の娘**　ドウシテ。

兵士　分かってくれ。
異国の娘　同ジョウニ変ッテシマッタ、アナタノ心モ。
兵士　……。
異国の娘　ドウシテナノ、ナゼナノ？
兵士　俺だって……。
異国の娘　苦シンデイルトイウノ。
兵士　無理を言わないでくれ、俺は……。

間。

異国の娘　ツイテ行ク、私モ。
兵士　出来るわけがないだろう。無理な事を言うんじゃない。
異国の娘　ツイテイッテルデハナイカ、日本ノ兵隊ノ後ニハ女ノ人モ。
兵士　あれは別だ。
異国の娘　別ノコトナイ、私モ女ヨ。
兵士　戦場へ行くんだ、無理を言うんじゃない。戦争が終ったらきっと迎えにくる。それまで待っているんだ。
異国の娘　ウソ！。
兵士　嘘なものか。
異国の娘　ソウダ、一緒ニ逃ゲヨウ私ト。
兵士　弟や妹をどうするんだ。それは出来ない。
異国の娘　分ッテクレル、父サンモ母サンモ。命ノ恩人ダモノ心配ナイ。アナタ　一人ヲ置ウコトナンカ簡単ニ出来マス。
兵士　脱走……。
異国の娘　出来ル。本当ニ好キナラ、ナンダッテ出来ルハズダ。
兵士　……。
異国の娘　怖イノ？
兵士　無理を言うんじゃない、きっと迎えに来ると言ったろう。
異国の娘　信ジナイ。
兵士　平和はきっと来る、そうしたらきみと一緒になろう、その日を期待して待っていてくれ。未来を信じてくれ、きっと素晴らしい未来が訪れる、そのため の戦いなんだ。

間。

異国の娘　アナタハ、ヒヨコニナレル？
兵士　……。
異国の娘　アナタハ、ワタシノヒヨコ？　ソレトモ、アナタハ、アナタノ国ノ天皇陛下ノヒヨコ？
兵士　君は、今、何と言った？
異国の娘　アナタハ……ワタシノヒヨコ？　ソレトモ、アナタハ、天皇陛下ノヒヨコ？
兵士　（苦渋の無言）……。

背景の影絵は、墓場へと進む亡霊たちのようでもある。

（一）

今風の二階家。一階左側がお勝手兼居間。右が夫婦の寝室。中央奥が玄関、洗面所、風呂場、二階への階段、に通じる出入り口。二階左右が息子良雄と娘良子それぞれの部屋。屋外の片隅に植木等がある感じだが、必ずしも写実的な造りである必要はない。必要な箇所が光の中に描き出せればよい。
朝。それぞれの部屋で眠っている夫。息子。娘。朝食の準備をする妻。

妻　（夫の部屋へ）お父さん！……時間は休んでくれませんよ。（二階の方を見上げて）良子、良雄。時間よ！お母さん出掛けますよ。（反応なし）全くしょうがない。毎朝なんだから。



妻、食器類を並べ終えたところで二階へ。息子、ドアに目をやり起き上がってドアロックを手で確かめ、また寝床に転がる。夫、起き上がり居間を経て中央出入り口から消える。用をたし洗面をする積もり。

妻　（息子の部屋の前）起きて、起きて頂戴、部屋も暫く掃除してないし。いい加減に冬眠から冷めてくれないと、もう春が終わって緑濃い初夏だわよ。良雄。
息子　……。
妻　良雄ちゃん。
息子　……。
妻　今日も学校行かないの？　ねえ良雄ちゃん。
息子　……。
妻　せめて、みんなと一緒に食事だけでもしてくれなきゃあ。もうずーっと顔も見てないんだわ母さん。（返事無し）お願いだから、ここを開けて頂戴。
息子　五月蠅（ウッセ）、ばばあ！
妻　ばばあとはなんですか、それが親に向かっていう言葉ですか！
息子　出掛けりゃあいいだろ、さっさと。
娘　静かにしてよ、夕べ遅かったんだから……放っときゃあいいのそんな奴。中学三年にもなって学校へ行かないのは人間じゃないんだから。
妻　人間です、良雄は。

妻の二階での息子とのやり取りの間、階下では夫が居間に戻り、食卓の椅子に座る。パンを掴みながらリモコン操作でテレビを点ける。テレビからの音声は、例えば、従軍慰安婦に対する戦後保障などの内容が望ましい。電話のベル。夫はテレビを切って、受話器を取る。話の内容は分からないが、あまり明るいとはいえない会社の部下とのやりとりのようだ。
諦めて降りてくる妻。母親の去る足音を聞いて起き上がりファミコンを始める息子。

妻　（居間に現れ、受話器を置いた夫を見て）青い、顔が……会社で何かあったんですか。
夫　いや……光線の具合だろう。
妻　それならいいけど。とにかく気をつけて頂戴よお父さん。
夫　なにを？
妻　何をって、お体を気遣ってるんじゃありませんか。
夫　良雄は相変わらず暁をおぼえずか？
妻　どうでしょうね。
夫　どうでしょう、だ？　今も怒鳴っていただろうが。
妻　（お茶を入れながら）たまには覗いて見たら。ご自分で確かめてみてもいいと思うわ。
夫　うむ。
妻　あなたの子ですよ！
夫　相談所に行ったんだろう。
妻　ええ、参りました。
夫　それでどうだと言うのだ。
妻　話したでしょう、このまえ。
夫　うむ。
妻　どうせ覚えてはいないんだから。
夫　いや……、出掛けるぞ。今日は遅くなる、夕飯は要らない。
妻　あなた！
夫　なんだ……。
妻　お座り下さい。
夫　後でいいだろう。

妻　一つでも真剣に考えてくれない。どういうつもりなんですか。
夫　考えてるよ。
妻　どう考えてるんですか。
夫　だから……。
妻　相談所でも他人（ひと）頼みでは駄目だそうです。お父さんの出番ですって。
夫　うむ。
妻　このままでは私がまいってしまいます。あなたは何かと言うと仕事仕事と……良雄のことなど全く考えていない。
夫　そんなことはない。考えているさ……？
妻　だから、どのように考えているのか……？
夫　それが言えれば解決している。
妻　言葉じゃないんです。
夫　じゃあ……、どうしろというんだ。
妻　良夫と触れ合う努力だけでも、してほしいの。
夫　わかった、今日帰ったらやって見よう。
妻　いつもそうだわ、今夜こそ今夜こそって。夜になると明日にしてくれ、二十年間ずうっとそうだったわ。良雄がああなってしまったのもあなたが逃げてばかりいたからです。

夫、それに応えるがオフ。
二階。娘、自室から出て、息子の部屋の戸を叩いて、

娘　良雄。脳天腐っちゃうよ。部屋の外まで臭ってるわ、起きなさいよ。
息子　ウッセエ！　あっちへ行ってろ、ばばあ。
娘　超むかつく！　やだ、やだ……家の中、みんな腐ってる。

娘、階段を降りる。階下。オン。

妻　（夫へ）腐ってるのはあなたです。

無言の二人。娘、居間に顔を出して、

娘　（場の空気を察知して）険悪。何処も彼処も（部屋を出て行きながら）アパートでも借りて引っ越そうかしら　（と消える）
妻　（我に省って）良子、良ちゃん。（と、娘の後を追って消え、突然の号泣）

夫、呆然とする。が、いつもの習慣で解決策はそれしか無いというように寝室に入り外出着に着替え始める。玄関のチャイムがなる。

夫　（いつもの習慣で）おい、お客さんだよ。……誰か（再びチャイム）……仕様がない。（と、居間にあるインターホーンの受話器をとる。）はい、そうです。良雄の受持ちの先生？……それはわざわざ。ちょっとお待ち下さい、今開けます。

夫、玄関の方へ消える。挨拶のやり取りの声があって夫と女教師が入ってくる。

女教師　お父さんがいらして良かった。今日はゆっくりと良雄君のことについて話し会いたいと思いますので。会えますか良雄君に。
夫　さあどうでしょう。
女教師　（むっとして）お父さん。失礼ですが、あなたは良雄君の保護者でしょう。何もお判りになっていないんですか。
夫　いえ、そういう訳では……とにかく聞いてみましょう。一寸。



妻と娘、入ってくる。入れ代わって夫、席を外そうとする。

夫　先生が良雄を心配して、わざわざお見えになった。
妻　ほらごらんなさい。他人様だってそれほどに心配してくださっているじゃありませんか。（逃げると見て）あなた！
夫　良雄の様子を見て来ましょう、先生。
妻　（夫に）あなたは座って。ねえ先生、お聞き下さい！
夫　そんなに大きな声を出さくても、おまえ。
妻　いいえ、あなたにも聞いていただきます。
夫　（遮って）まあまあ、先生もお忙しいところをわざわざお越し下さったんだ。
女教師　とにかく良かった、みなさんがお揃いで。で、何でしょう、お母さん。
夫　そのようなことを先生にお話しても先生がお困りになるだけだ。
妻　私、今……
夫　失礼じゃないか、家庭のこたこたまで話すことはない。そうでしょう先生。
女教師　いえ、そのようなことはありません。この問題にはあらゆることが判る必要があります。何でもおっしゃって下さい。
妻　はい、実は……。
夫　正直、親としてどのように対応したらよいものか。
女教師　それを解くために、伺っているんです。
夫　何から話してよいものか。
女教師　そうです、お話いただければ、きっと見付かる筈です。登校拒否の原因です、良雄君の。過去のこと現在のこと家族お一人お一人の日常生活、生活信条何でもいいんです。おっしゃって下さい。夫婦仲が悪いのも多いに原因していることがあるんです。
夫　いや、それは……。
妻　決定的です。
夫　馬鹿な。
女教師　……こんなことあるでしょう。下水管……
夫　下水管……？
女教師　そうです、下水管です。だんだんだんだん排水量が細くなっていく。どうしたのかなと思っているうちに排水がストップしてしまう。つまり、ごみ、ヘドロ、石ころが通路を寒いでしまったのです。
夫　それが、良雄の登校拒否とどういう？
女教師　……ええ、関係があるんです。良雄君が籠って学校に来なくなった状況は同じです。つまり！。
娘　比喩、という奴だ。
女教師　そう。だから、邪魔をしているごみや石ころやヘドロを救えてほしいんです。
夫　私の家が腐りきっているとも？
女教師　いえ、そういう意味で……。
娘　そういう意味だわ。
妻　……はい、そのヘドロが、宅なんです。
女教師　えっ？
娘　家長失格というわけ。
夫　馬鹿な！（声を大にして）とにかく、良雄を呼んできなさい！
娘　あたしが？
夫　だれでもいい。
妻　呼んで、すぐ来るようなら、学校にだって行ってます。
娘　急に大きな声出したりして、空元気は無駄よ父さん。
夫　無駄かどうか……。
娘　父さんが呼んでみたら。
夫　だから、さっきからいってみてこようとしたら母さんが。
妻　おや、そうでしたか。それではご遠慮なくどうぞ。

女教師大きく溜め息をつく。

夫　え？

妻　終わりだわ。呪いの家だわ、この家は……。

夫　大袈裟な。

妻　この家に越して来るまでは無かった事だ。

夫　おまえがどうしても欲しいと言ったから無理をして買ったんだ。今更何をいうんだ。

妻　何でもおまえおまえです、あなたは。良雄がああなったのもおまえの所為（せい）。みんな、他人（ひと）のせいにして。

夫　家の所為にするなと言ってるのだ。やっとのことで建てた家だ。

妻　そうとしか思えないわよ。良雄はこの家に来るまでは学校を休むことは一度だってなかった。二間だけの狭いアパートだったあの頃の方が、どれだけ幸せだったか。前の家では家族四人で肩寄せ合ってとにかく一軒の家を持とう。それまで頑張ろう。家中に笑いが弾けていた、生き生きとしていた、みんな健気に生きていたわ。

夫　その前の前の前は四畳半一間で、半畳の流し場が付いているだけだった。

娘　そう。それは記憶ないなあ。

妻　新婚当時の事だもの。おまえがお腹に宿ったから出たの。子連れはお断りだった、そのアパートは。次に住んだ前の前の家で良子が生まれた。六畳にお勝手トイレ付きで未だ銭湯に通ってた。（歌「神田川」の一節を口ずさんで）……流行っててね。まるで私達のことを歌っているみたいだった。

夫　そして良雄が生まれて前の家に引っ越したのだ。二間にお勝手とトイレ。小さいけど風呂場もある家に越したのだ。

妻　そうでした。銭湯に行かないで内風呂に入れる、こんな幸せは無いと思いましたよ。

夫　只一つだけ残念だったのは緑の庭が無いこと。私は緑の山あり、せせらぎの音のする川ありの田舎で生まれ育ったからねえ。

妻　何時も言っていたわ、呼吸（いき）が詰まりそうだって。窓を開けると五十センチほど先の、手の届くところに隣の家の窓があった。窓を開けると決まってうるさいって怒鳴っていた。

女教師　（やっと口を挟むチャンスだ）その頃の良雄君はどんな子でした。

妻　いい子だった、素直で可愛くてヴァイオリンを習っていた。夕食の前には決まって良子と仲よく演奏をしていました。

娘　ルミちゃんも来て一緒に合唱をしてた。

妻　そうだった、ルミちゃんもよく来ていたわねえ。

女教師　ルミちゃん？

娘　良雄のガールフレンド。橋川ルミ。

妻　良雄の幼馴染みです。幼稚園からの。

女教師　それだったら、その子が力になれるかも。

妻　それが……来て会おうともしないんです。

女教師　そうですか……で、何をやってるのかしら？

妻　本を読むこととファミコンばかり。

女教師　読書？　素晴らしい。

妻　それがどういうんですか、戦争ものばかりなんです。ファミコンも暴力的で　攻撃的なものばかり。

女教師　暴力的で攻撃的？

夫　やっぱりテレビの影響でしょうか。

女教師　戦争ものと攻撃的ゲーム……被害者意識かなあ？

いつの間に降りて来たのか、良雄。

良雄　飯！　何だ……みんな居るじゃねえか。俺にだけひもじい思いをさせて（と、中へ入って来て、女教師に気づく）お！



女教師　（こっちは救われた感じで）し、ば、ら、く！　良雄君。

良雄　（間が悪い）暫く、です。

女教師　元気してる？

良雄　はい（と、言いつつ去る）。

妻　（良雄の素直な返事に、ついホロリとして）よかった。あんな、素直な良雄の返事を聞くなんて、先生のお陰で昔にかえったみたい。はいはい、ご飯の用意はいつもできてるわよ。

いそいそと良雄の食事の準備をする妻。

夫　先生、出来ることなら頭の中をかち割ってでも見てみたいんです。どうして良雄がああなったのか、何を考えているのか、知りたい。

妻　（準備をしながら）めったにないことなんですよ、みんながいる時に階下（した）まで降りてくるなんて先生。変化の兆しなのかしら。

女教師　きっと変化を求めているんですわ。

妻　けれど……入ってきたときのあの子の言葉をお聞きになったでしょう。あのように攻撃的なんです。

娘　甘やかしよ、甘ったれなの。そいでいて朝から晩まで勉強勉強と何もさせないでいて勉強にばかり追い込んでしまったの。そう育ててしまったの。

夫　直るもんでしょうか。

妻　さあ、出来ました。

妻が食事を持って行こうとする。

女教師　私が持っていきましょう。

妻　そうですか。暫く良雄の部屋に入ってないから汚れ放題なんですよ。

女教師　構いません。何かが掴めるかも知れませんから（去る）。

妻　お願いします。元どおり立ち直らせてやって下さい。（と、後を追おうとする）

夫　母さんは控えたほうがいい。

妻　そうですか。

夫　出掛けるよ。（と、去りかける）

妻　あなた。先生をほっといて出掛ける訳に行かないでしょう。私だって我慢してるんです。

妻、勤め先へ遅刻する事の電話を掛けている。

娘　お父さん。立ち入った言い方だけど、けじめとか、つけといた方がいいと思うんですけど。

夫　なんのことだ。

娘　さっきの空気では、先が見えてるみたいだから。

夫　見えてるとは何の事だ。

娘　いずれそうなるんじゃないかと。

夫　今、そんな事を議論している時間があるか。遅刻するぞおまえ。

娘　午後からなの講義。……父さんと母さんの険悪な状態が最悪の結果をまねくのは私の権限外の話だけど、いずれにしろ、それ相応の責任の取り方を、言っとくけど親として見せてくれなきゃ。今まで、そういうところが欠けてたと思　うのよ、だから……。

夫　だから、なんだ。

娘　曖昧というのは困るのよね、あたしもお母さんも。慰謝料とかこの家の相続権とか、いずれは父さんが相続するだろう田舎のお祖父ちゃんの家や土地とかよね。後々のことだけはキチッとしてほしいの。

夫　みんなおれの責任みたいにいうな。

妻　そうです。午前中も一番慌ただしいこの時間に決められることで

はありません。

夫　母さんの言う通りだ。

娘　あらあ。さっきの剣幕とかは何処へいったの、母さん。

妻　？　それはそれ、これはこれですよ。

夫　その通りだ。

娘　何がそれはそれでこれはこれなのよ。だから、何がなんだか判らなくなるんじゃない。……父さんと母さんが結婚して私や良雄が生まれた。それは私の関知しなかったことだけど事実だわ。事実については、存在したときから責任と義務が生じて、親はそれを負わなければならないの。

夫　何が、負わなければならないの、だ？

妻　そうですよ、誰のお陰で大学まで行けたと思っているんです。自分一人で大きくなった積もりで生意気ばかり言って。

娘　一時休戦ですか？……とにかく、後始末だけはキチンとしておいて頂戴。そうすれば案外良雄だって自立できるかも知れない、立ち直れるかもしれないのよ。

二階から笑い声。一同二階の方を見る。
インターホーンのチャイム。
顔を見合わせる夫、妻、娘。
妻がインターホーンの受話器をとる。

妻　はい榊原ですが。え？　こちらにはおりません。はい、確かに一太郎は祖父ですが田舎の方におります。ええ伺っておりません。上京したという言うんですか。いっこうに存じません、何かの違いでは……はい、ではとにかく（受話器を置く）。

夫　どうした？

妻　変な人よ訛が強くて、お婆ちゃんらしいけど。

夫　親父がどうしたって？

妻　こっちへ向かってるらしいわ。

夫　田舎から？　来るのか連絡もしないで

妻　いえ、それが……とにかく事情が判らないから上がってもらうわよ。

妻、玄関へ去る。

娘　お祖父ちゃんが来るの。

夫　つまらん事を言うんじゃないぞ。

夫、電話を掛ける。会社へ欠勤の連絡をしている模様。
その間に老婆を案内して妻が居間に戻る。

妻　あのう……（夫に助けを求めて）あなた。

老婆　（電話をかけ終わった夫を見て）オオ、一太郎サンノ息子サンネエ。ワタシ日系ノ南国人ネ。

夫　どのようなご用件でしょう。

老婆　ハイ。アタシの母、日本人。遠イ遠イの昔、日本カラ南ノ国ヘヤッテ来たね。ソシテ、ワタシノ父ト結婚シテ、ワタシ生マレタ。名前ニツアルネ。南ノ国ノ名前、ランテイ・シャシャイ、日本ノ名前、笹井蘭。ヨロシク。

夫　それで？

老婆　ハイ。……アナタノオ父サンニ会イキマシタ。

夫　父に？

老婆　ハイ。

夫　父は私の郷里の方に。

老婆　ソウ。ワタシ一太郎サンノ家、行きマシタ。留守デシタ。一週間前ニ家オ出テ、息子サンノ家ヘ出かケタト、隣ノ家ノ与三郎サン親切ニ教エテ呉レマシタ。ダカラ、コチラニ訪ネテ来ました。



妻、お茶を入れて出す。

老婆　一太郎サンニ早ク会ワセテ下サイ。

夫　会わせろと言っても、父はいないんですよ。

老婆　オカシイデスネ、与三郎サン、嘘ツク人デハアリマセン。大変ニイイ人デス。

妻　本当なんですよ、お祖父ちゃんは来ていないんです。

老婆　ドウシテデスカ。家族ノ事ガ分ラナイノデスカ。田舎ハ田園ヤ畑ガ、沢山沢山アッテ、ワタシノ国ト同ジデス。ワタシ、コノヨウニ日本語、上手デス。記憶力モ大変良イデス。ワタシノオ母サン、日本語ヨク使ッテイマシタ。ダカラ少シ知ッテイマシタ。日本軍来テカラ、モットモット日本語一生懸命習イマシタ。ワタシノ村ニモ日本ノ兵隊ガ来た時、ワタシ通訳にナッタノデス十九ノ時デシタ。日本ノ軍属デシタ。コレガ、ソノ証明書デス（靴の中から、ボロボロの紙片を取り出して見せる）。

夫　南方方面派遣第七五二大隊暁小隊中川分隊……軍属……。

老婆　ワタシノ村ニ来タ兵隊タチノ名前デス。

娘　とすると、あなたはその当時の兵隊たちを捜し歩いているというわけ？

老婆　ソオ。

娘　何で

夫　何が目的ですか。

妻　あなたの村に行った兵隊の中に、お祖父ちゃんがいたとでも。

老婆　ハイオリマシタ。

夫　馬鹿な。どうして解るんです、そんなことが。しかも外国人のあなたに。

老婆　日本ノ役所ニ名簿アリマシタ。日本人ダケ、恩給載クタメノ名簿沢山沢山アリマス。日本兵隊ダケノ名簿。ソレオ見テ住所、苦労して苦労して訪ネテ歩キマシタ。

妻　その、名簿の中にお祖父ちゃんの名前があったんですね。

老婆　ハイアリマシタ。

娘　その執念、凄いじゃない。

老婆　アタリマエノコトデス。

娘　へえ、尊敬しちゃうなあ。戦争と言っても満洲戦争じゃないんだし、太平洋戦争だったら、もう五十年もの昔々じゃない、父さんが生まれる前よ。

老婆　ワタシニハ、昨日の事デス。

妻　昨日のこと?!

夫　その部隊とあなた何があったんですか。

老婆　アリマシタ。沢山沢山ノ事アリマシタ。

妻　お祖父ちゃんと何があったと言うんですか？

老婆　一太郎サンモ同ジ日本ノ兵隊デシタ。ワタシノ村ニ来タ日本ノ兵隊ハ全部デ、三十人イマシタ。ワタシノ村ハ国境ノ村デシタ。三十人ノ日本ノ兵隊ハ直接ニ戦争ハシマセン。治安ト前線ヘノ補給ノ仕事ノヨウデシタ。食べ物、材木、運搬用ノ牛、次々ト色ンナ物集メマシタ。ダカラ通訳、必要デシタ。ワタシガ必要デシタ。一生懸命、日本軍隊ニ協力シマシタ。

夫　ずっと昔のフランス映　画に、〝舞踏会の手帳〟というのがあったと思うけど、それかな。

娘　知っている知っている。お母さん見たじゃない。ほら、ビデオ屋さんから借りて。

妻　そうだったかしらね。

娘　そうよ、中年の綺麗な小母さんが昔の恋人を訪ねて歩く話し見たような気もするわね。

妻　見たわよ。

娘　（老婆へ）そんな感じですか。

夫　五十年も昔の兵隊さんを訪ねて。ロマンチック！

老婆　ワタシ、半分日本人ノ血、流レテマス。日本人ロマンチック、アリマセン。ロマンチックな人、情熱的デ心ヤサシイ人のコトオ言イイマス。ソウイウ心日本人にアッタラ日本ヤッテキマセン。大事ニ大事ニ日本人ノオ母サン、心ニ抱イテイマシタ。故郷デ思ッテイマシタ。オ母サンノ国、夢見テイマシタ。

夫　それなのになぜ、三十人の兵隊の故郷を訪ね歩いたりするんですか。……いったい……

老婆　愛デス。

夫　愛?!

老婆　ソウデス

妻　愛……?

娘　おばあちゃんさ、訪ねていった先で、皆が皆生きているという訳ではないでしょうに。田舎のお祖父ちゃんだってもう、八十よ。

老婆　本人ガ死ンデモ、子供イマス。孫生キテマス。

娘　その孫に愛を求めるというわけだ。

老婆　ソウデス

夫　どうも分かりませんね、おばあちゃんは若いもの趣味ですか。

老婆　マジメニ聞イテクダサイ。

夫　もちろん真面目です。

娘　おばあちゃんさ、もっとはっきり言ったら。回りくどい事なしにさ。

老婆　ハイ。私、兵隊タチノ行ナッタ愛ノナイ行為ハ許セマセン。

階下オフ。
息子の部屋オン

女教師　期待だけじゃない、責任があるのよ。

息子　この儘で、いい。

女教師　良雄君は、そうすると、大人にはなりたくないんだ。

息子　うん。先生、理科の先生だろう。薬を作ってよ、大人にならない。

女教師　良雄君はさあ。大人になればなるほど、嫌でも他人と付き合わなければならない。付き合えば迷惑を掛けることが多くなっていく。だから、大人にならなければ迷惑だって掛けることが少ない、そう思っているのね。

息子　大人ってしつこいから嫌いさ、先生だってそうだ。

女教師　そうかしら。けど、子供ほど他人に迷惑を掛ける事が多いの何故かというと、無知だから、何も知らないから平気で他人を傷つけているのよね。そう思ったことない?

息子　ないよ。

女教師　そうかなあ。

息子　そうだよ。

女教師　すべてを無視するってわけだ。

息子　そうだよ。

女教師　けどよ、無視したり無関心だったりすることが他人に迷惑を掛けないということにはならないわ。

息子　……。

女教師　例えばよ、クラスの中で苛めががあったとするわね。そこにたまたま出くわした。その時君は黙ってみてる?　それとも止める?

息子　見てる。

女教師　本当の気持ちなの、それ?

息子　……そうだよ。

女教師　嘘でしょう。

息子　〝死んだ人々は、還ってこない以上、
生き残った人々は、何が判ればいい?
死んだ人々には慨く術もない以上、
生きき残った人々は、誰れのことと、何を、慨（なげ）いたら



いい。
死んだ人々は、もはや黙ってはいられぬ以上、
生き残った人々は沈黙を守るべきなのか?
（註—フランスの詩人ジャン・タルジューの短詩＝渡部一夫『きけわだつみのこえ』の巻頭詩・引用）

女教師　（ギョッとして）なによ、それ?

息子　『きけわだつみのこえ』の巻頭詩。

女教師　きけ……わだしのこえ?

息子　先生知らない?　知るわけ無いよな。先生になる勉強忙しかっただもの。

女教師　（一瞬怯む）そんなことより現実を直視しなきゃあ。

息子　現実って何だよ、学校へ行く事だけか。

女教師　そうよ。今を真剣に考えなければいけないわ……君は中学三年でしょう。義務教育期間よね。だから学校へ行くのが義務なの。当然行かなければならないはずなのに行かない、お父さんもお母さんどれだけ心配しているか、迷惑を掛けているか。そういうみんなの心配も無視していること?

息子　何も判っちゃいないんだ、先生は!

女教師　何が言いたいの、そんななげやりでなくてい言ってごらん。

息子　さっき言ったよ、くどいな。

女教師　詩の事?

息子　ああ。

女教師　だから言っただしょう、現実を見つめなさいって。

息子　……

女教師　どう思う?

息子　五月蝉（うるせ）んだよ!

女教師　……うるせって、良雄君。

息子　そういう大人の時期だの責任だの、勉強勉強だの押し付けがましいのが辛いんだよ!　俺……。

階上オフ。階下オン

娘　一寸、押し付けがましいいんじゃない。愛とか何とか言ってあなた、強請（ゆすり）とかじゃない。マニュアル通りの筋書きが決まっているみたいね。

老婆　アナタノ国ノ兵隊達ニレイプサレマシタ。強制的ニ施設ニ監禁サレテ売春ヲ強要サレマシタ。償イスル事アタリマエデス。

妻　レイプだの売春だのって恥ずかしい。

夫　まさか……父が……?

老婆　……若イ人の方、話シ分リマス。

娘　補償するとは言ってないわ。

老婆　分ッテイタダクマデ、ココニイマスワタシ。

夫　それは困る。第一、補償といっても父に聞いてみなければ、事実かどうか。……いいえ、確かにそのような事実は、過去にあったかもしれない。新聞やテレビで報道しています。だからといって、あなたがその当事者だという証拠はどこにもない。

妻　そうですとも。証拠を見せて下さい。

老婆　ハイ、オ見セシマショウ。コレガ、確認書です。（書類の束を見せて）コレマデ、回ッテ来タ人達ガ書キマシタ。アナタ方ノヨウナ、解ラズ屋イマセン。ミンナ罪認メマシタ。

夫　これが全部ご本人だと言うんですか。

老婆　トハ言イマセン。息子、孫モイマス。ソレダケ、戦争トイウモノハ、罪ガ深イノデス。何代モ背負ッテ、イカナケレバナリマセン。

夫　（躍起になって抗弁する）馬鹿な。神宮皇后が百済征伐をし豊臣秀吉が朝鮮征伐をした償いを今やれというのと同じだ。

娘　お父さん、それは韓国、北朝鮮・朝鮮人民民主主義共和国だ。

夫　（自らの矛盾に気づかず）韓国も南の国も同じことだ。

老婆　ソウデス、同ジデス。

夫　（矛盾に気付いたが一生懸命抗弁して）うむ、だから……だから百歩譲って、例え事実としても戦争中のことなら、当然に国どうしの問題だ。それはすでに解決済みのはずだ。それにも関わらず個人へのすり替えはおかしい。

老婆　イイエ、レイプモ売春ノ強要モ国ハデキマセン。

夫　しかし、慰安所は軍隊が作ったものだ……。

老婆　兵隊ハ拒否スルコト出来マシタ。ダカラ、日本ノ兵隊一人一人ノ欲望行為デス。性欲ノコントロールハ国家権力デ行ウモノデワアリマセン。

夫　……それも日本の軍隊はやったと……。

老婆　ダカラトイッテ、実行行為ガ許サレルワケデワアリマセン。

夫、妻、溜め息。

電話のベル。ギョっとする夫婦。

ワイヤレスホーンの受話器を手にする夫。

夫　榊原です……待って下さい。（老婆へ）一寸、失礼。

受話器を持って出入口から消え、二階の娘の部屋へ。

階下、オフ。二階娘の部屋、オン。

夫　どうしたんですか、お父さん。今、どこです……ええ、ええ……夕べは上野の傍らのホテルに泊まった？　近くまできていて……何か気に入らないことでもあるんですか。確かにうちは狭いかも知れませんが……水臭いじゃないですか。それで今もホテル？　大宮駅から？　じゃあタクシー拾って……すぐだから……そう、そう……大変なんですよ、こっちは。訳の判ん無い婆さんが上がり込んで、補償がどうの、償いをどうのと、動かないんですよ……やっぱりじゃないんですよ……そんな、呑気なことをっている場合ではないでしょう。どうしたらいいんですか……埃でも動かん剣幕ですよ。一体、お父さん、何があったんですか……ええ、ええ……よかありませんよ……勤めまで休んで対応しているんですから（声、オフ）

一階の部屋オン

老婆　当然ノ報イデス。

娘　私が生まれるずっと前のことだわ

妻　私だって生まれていませんでした。

老婆　分カッテイタタクマデ、イサセテモライマショウ。

娘　日本では、それって不法侵入というんだけどなあ。さ、出掛けよう。

妻　良子ちゃん。

娘　図書館へ行くのを思い出したの。

妻　（良子へ）お願いだから……

娘　長期戦でしょう。（夫が入って来るのをみて）お父さんがいるじゃない。

一階オフ。二階の良雄の部屋オン。

息子　先生、死のう。先生となら死んでもいい。

女教師　（茫然、が軽うじて）何言うの、馬鹿を言わないで。

息子　先生が好きなんだよ。

女教師　からかうんじゃないわ、子供のくせして！（頬をひっぱたく）

息子　痛ってえなあ……先生が生徒殴ってさ、いいの？

女教師　……つい、手が出ちゃった。

息子　俺、親にだって殴られた事なんか一度もないんだ……そんなに簡単なこと　じゃないんじゃないの。

女教師　脅迫するんですか。



息子　学校へ連れて行こうと考えて、うちへ来たんだろう。それがさ。

女教師　ごめん、ごめんなさい。

二階、良雄の部屋オフ。一階オン。

妻　もうみんな仕事に行かなければならない時間なんですよ、おばあちゃん。

夫　何度も言うように私達は当事者ではないんです。

老婆　アナタタチ日本ノ人、歴史オシッカリト見ツメナケレバイケナイノデス。

娘　歴史を食べて生きているわけではないんだけどなあ。

老婆　イイエ、歴史ハ民族ノ骨ヤ肉ナノデス。

娘　まいったな、こりゃ。

階段を激しい勢いで下りてきた助教師がリビングルームの入り口に紅潮した顔を出す。

女教師　あの、私、授業がありますのでこれで。

夫　それはそれは。

妻　（女教師の顔色に気付いて）先生、……何かお気障ったことでも……。

女教師　いいえ。私これで（去る）。

妻　（立ち上がって追い掛けて）そうですか、何もお構いもしませんで（女教師の後を追って去る）。

夫　駄目かやっぱり。

娘　無理無理、期待したって。

老婆　ドウシタンデスカ……二階ニ誰カイマスネ。

娘　おじいちゃんだったら？

老婆　チガイマス、サッキノ女ノ方先生イイマシタ。先生ダトスルト二階ノ人、生徒デスネ。

娘　ピン・ポーン……おばあちゃん、いい勘してるじゃない。

夫　（妻が入ってきたのに）どうだって先生。

妻　怒って帰ったわ。

娘　良雄が怒らしたのよ。

老婆　コノウチ、狂ッテマスネ。

夫　失礼な！

娘　そう見える？

老婆　ハイ、見エマス。

娘　なぜだと思う、鋭い勘で当ててみる？

妻　どうしてなんでしょう。

老婆　ソノ良雄サントイウ子ハ学校ヘ行カナイノデスネ。

娘　あなたならどうする？

夫　あなたには関係ない。

老婆　関係ハトモカク気ニナリマスネエ、私チョット見テマイリマショウ。二階デス

夫　うちの中までずけずけと立ち入ってほしくないんだ。

老婆　ソウデショウカ、身勝手デスネエ。

夫　身勝手？　身勝手というのはですね、いきなり他人のうちに土足で入り込んだああなたのことをいうんですよ、日本語では。

老婆　ソウデス。五十年前、日本ノ兵隊タチ、土足で私ノ国ニヅカヅカ入りコンデキマシタ。ミンナ兄弟、大東亜共栄圏、トイッテ。ソノ教エ今デモ生キテイマス。トントントンカラリノ隣り組ガミナ兄弟デス。何カアルトミンナン心配シマスダカラ親子兄弟ノコトオ心配シナイ身勝手ハ敵デス。

娘　私達とおばあちゃん、兄弟って・わ・け・だ。

老婆　ソノ通リデス。日本ノ兵隊タチ、五十年前モ日本国ト私達ノ国ハ兄弟ノ国ダトイイマシタ。兄弟ハ助ケ合ワナケレバイケマセン（さっと二階へ向かう）。

夫　（止めようとして）馬鹿は止めたまえ。
妻　（これも同じく）本当です！

三人、手に負えないといった体らく。

妻　（ため息をつく）
夫　……
妻　（二階を伺って）大丈夫かしら。
夫　何が
妻　暴力なんか振るったら余計厄介なことに。
夫　良雄にそれほどの度胸はない。
妻　いいえ、先生と何かあったみたいなんです。
夫　授業があるからといっていたじゃないか。
妻　それもあるけど、かなり怒っていたみたいだったから。
夫　そっとしておいた方がいいんじゃないか。
妻　また人頼みですか、お父さん。
夫　しかし、いや……少し様子を見よう。
妻　同じですよ……いいんですか、本当に。
娘　（二階を伺って）静かじゃない、以外とウマがあってんじゃないの。

インターホーンのチャイム。
妻がインターホーンの受話器を取ろうする

夫　（妻を止めて）いい……親父だ。（と、玄関口の方へ去る）
妻　あら（と、これも続いて去る）。

間。

娘　いよいよ歴史との対決だ。

夫、妻、祖父、入ってくる。

妻　早くご連絡をいたたいておれば、いろいろと準備もできましたのに。朝からのごたごたで起きたまんまなんですよ。
祖父　いやいや、突然ですまんこってす……（夫へ）で、例のは。
妻　おじいちゃん御飯にしますか、それともお風呂にします？　お疲れでしょう　から。
祖父　いんや、ホテルですませてきたから、心配はいらんね。
娘　お待ちかねよ、おじいちゃん。
祖父　よお、しばらくだな。今、良子ちゃんはなにやってんだや。
娘　去年お祝い贈ってくれたじゃない、大学生。
祖父　そだったか、まだ遊び人か。
娘　よくいうよ。
夫　冗談を言ってる場合じゃないでしょう、お父さん。
娘　ああ、我が青春の南海のローマンスか、あやかりたいわ。
祖父　いうね。
夫　困りましたよ、出て行かないですから。
祖父　どこさいるんだ。
夫　二階、良雄の部屋に。
娘　手ぐすね引いて待ってるわよ。
祖父　企みおって、アンッ畜生。
夫　知らせましょうか？
祖父　なに……う？　すかす、あまりな……（会いたくはない）
夫　やっぱり後ろめたいことがあったんでしょう。
娘　会わないってわけには行かないわよ。
祖父　それあ、そうだがな。
妻　様子みてみましょうか。



祖父　いんや、ええ。
夫　会いたくもないのに、それも当人がいるところへなぜのこのこ出てきたんですか？
祖父　来て悪がったか。
夫　何も鉢合わせしなくても、いきさつを一言、言っていたたければ……。
祖父　何とかしてくれだが……。
夫　それは……。
祖父　策を練るために戦友会の家、回り歩えてたんだ。
夫　策は見つかったんですか。
祖父　うむ……いんや……。
夫　とにかく帰ってもらうようにしていたたきますよ。
祖父　わがってる、お前たちさ迷惑はかけん。
夫　お願いしますよ。
祖父　念を抑さなくたってええ。
娘　（聞き耳を立てて）下りてきたみたい。

祖父、去就逡巡する。老婆現れる。

老婆　ワタシ、出掛ケテキマス、ナント良雄クンモ一諸デス。
妻　まさか良雄が外へ……？（去る）
老婆　（祖父に気付き）オヤ、アナタハ？

一瞬、空白の間。

夫　ああ……あの（祖父の顔を伺う）。
祖父　あ、やあ……どなたさんかは存知じ上げねえが……はずめまして、隣の親父です。
娘　そう、お隣のおじいちゃん。おばあちゃんがしばらくここにいるんじゃ退屈するでしょう。だから、話し相手と思ってお呼びしたのよ。
老婆　（疑わず）ソウ、出掛ケテキマス。良雄クンハヨイ子デス。（去る）
妻　（入ってきて）本当に出掛けたみたいです。
娘　奇跡ってあるんだ。
夫　本当に何者です？
祖父　どこから名簿を手されいれよったのか、戦友会の仲間の俺が行くところ行くところみんな回り歩いている。
夫　一体、何のためです。
祖父　時流の話題を ネタにしたペテン師で食わせものの大詐欺師だ。カタリだ。
夫　警察に電話しますか。
娘　恩人を訴えることはないよ。
夫　恩人だ？
娘　驚き、ももの木ジャン、籠りっきりの良雄を外に連れ出したんだから。
妻　ああ、何がなんだか……頭が痛くなってしまった。
娘　疲れたのよ、二階で休んだら。
祖父　それがいい、そうすなさい。
妻（素直に頷いて）はい。（グラリとよろめきよろよろと去る）
夫　大丈夫か。
娘　さて私も……カリスマ性があるのかなあ、あのおばあちゃん（と、言いつつ去る）

夫、グラスとウイスキーのビン、ツマミなどをテーブルに用意する。

祖父　朝がらか。

夫　いいじゃないですか。私も会社を休むことにしたんだから。お父さんとゆっくり話しをするのも悪くない。
祖父　それもそうだ。
夫　で、本当に何もなかったんですか。
祖父　あった方がえがったか。
夫　よかないけど、見知らぬ外国人が突然現れるなんて、何もなきゃ来るわけないでしょう。
祖父　うむ。
夫　おかしいですよ、変ですよ、大いに変ですよ。
祖父　どうおかすいんだ。
夫　不自然じゃああありませんか。ほかの親友たちはどう対応したんですか。
祖父　うむ。
夫　文句をいっているんじゃありせん、尋ねてるんです。……もう少し割りますか。
夫　（ウイスキーのグラスに水を注ぐ）本人が死んだうちでは子供や孫が金を払ったって言っていましたよ。
祖父　あのばばあがが。
夫　ええ……。
祖父　（独り言）どこまで祟れば、気が済むと言うんだ。
夫　え？
祖父　なんでもねえ。それより仕事の方はどうなんだ。
夫　会社ですか。
祖父　不景気で大変だと言うんでねえか。もうは八年になっかなあ、この都会では土地も高えし採算が会わないというんで、ほら、お前が子供の頃よくきのこ採りさ行った西根沢に工場団地が出来た。
夫　西根沢に？　あそこは、俺がこっちへでてくる頃は農地開発だといって高い所に水を引いて田園を作る工事が進んでいたなぁ。もう二十年以上も前だ。
祖父　画期的な構想ではあったがもう遅かった。田園や畑は出来たが跡を継ぐ百姓のなり手がえなかったは。
夫　そこで工場誘致を図った？
祖父　まあな。ンだがそれも遅かった。

妻が現れる。

夫　寝なかったのか。
妻　良雄が……。
夫　良雄がどうした。
妻　誘拐されたのでは……？。
夫　まさか……。
祖父　あの図体じゃなあ。
夫　脅かさないで下さい。
妻　ほんとうです！
祖父　大丈夫だって、今に戻ってくるよ。
夫　冗談を言ってる場合ではないでしょうが。
祖父　そりゃあそんだ。
妻　私、お金が目当てだとどのような手段でもとるんじゃないかと横になっも気が気じゃなくって。
夫　やっぱり、警察へ。
祖父　出てって十分も経ってねえんだ、慌てるな。
夫　誘拐はともかく、迷惑ですよ、このままでは。
祖父　俺が始末すると言ったろうが。
妻　（切り口上に）わかりました。
祖父　すまん。あんだには迷惑をかけん。

妻、夫と祖父を追い立てるように邪険に掃除を始める。



夫　やっぱり警察沙汰では不都合なことが起きるんでしょう。
祖父　あわてて恥を掻くぞと言ってるんだ
夫　やって見なければ分からないじゃないですか。
妻　本当に大丈夫でしょうか。
夫　さっき、何と言って出た？
妻　良雄の姿は見えなかったわ。
夫　二階には本当にいないんだな。
妻　いないわ。
夫　あのばあさんは。
祖父　「出掛ケマス。良雄クンモ一緒デス良雄クンハイイ子デス」とか、言ってだな。
妻　「一緒ニ」どこへ行ったのかしら……？
祖父　駆け落つでもあるめえ。
夫　冗談じゃない。
祖父　年が違い過ぎる。
妻　そんなことじゃないんです。
祖父　なにが？
妻　あの子は戦争だった頃ののことが気になってしょうがないんです。
祖父　戦争ねえ……
夫　二人は、それで意気投合したと言うんだな。
妻　おじいちゃん何があったんです。
祖父　何がって、あの女がさっき言った通りだ。

インターホンのチャイム。

祖父　戻ってきた。（逃げ腰で）が、俺は……。
夫　（インターホンの受話器を取って）はい。え……。ちょっとお待ち下さい。（受話器をおいて、妻へ）良子に、お客さんだって（と声を掛けて消える。）
妻　（二階へ）良子ちゃん、お客さんよ。
祖父　遭ったが。

夫、名刺を手に男女の来客に押し戻されるように現れる。

夫　（妻へ）弁護士さんだ、良子に用だって。（来客へ椅子を勧めて）どうぞ。
妻　わたしは……（と言い捨てて去る。）
夫　いや、どうも（男と女に）取り込んでおりまして。
男　ところで…
祖父　弁護士さんというど……？

娘が現れる。

娘　だれ、私に用って？
祖父　こつらの方だ。
女　（娘を睨む）。
娘　（気圧されて）何……よ。
男　小清水先生……あなたがお通いの大学の小清水助教授、ご存じですね、お嬢さん。
娘　えエ？……うっそォ。
男　奥さんです。小清水先生の。
夫　（娘に）どういうことなんだ。
女　あなたね、あなたが（絶句し、良子を睨む）。
祖父　（娘に）何か、この……今ちょっと、取り込み中と言ったんだが……。
男　突然伺ったのは、お嬢さんとこちら（女を指して）の御主人のことについてですが。
夫　うちの娘が何か？。

**娘**　たいした問題じゃないわ。
**男**　それが、たいした問題でして、つまり男女関係でして。それで突然に伺ったわけです。実は……。
**祖父**　男と女の関係ね？　永遠のテーマですなあ。
**男**　永遠のテーマは、改めて議論していただく事にして、実は、小清水助授の奥さん同道でお邪魔しましたのは、結論から申しますと、慰謝料をお払いいただきたいと言うんです。
**夫**　慰謝料？　何ですそれは、慰謝料はお父さんだけで沢山だ。
**祖父**　何で俺が、ここで引き合いに出されなければならねんだ。えぇ？　この家はどうかしているぞ、良一。良雄は学校へ行かねえ、良子はこの混乱の最中に慰謝料請求の当事者だという。一体おまえは、田舎を捨てて、都会に出てきて仕上げたものっつうのはこういう結果だったのか。
**娘**　そう……慰謝料を払ってもらいたいのは、私の方だわ。
**女**　なんですって。まるで子供のような顔をして、恐ろしい女。あなたのために我が家はメチャクチャになってしまったわ。
**娘**　それは、あなたのせいじゃない？　一家を平穏無事に守っていくのは奥さんの務めだと思うんだけど。
**男**　この際、奥さんの務めは関係ありません。あなたが彼を誘惑し関係を持たれたことが問題なんです。
**娘**　冗談でしょう。誘惑したのは彼なんだから。
**女**　不良！
**祖父**　不良ねえ、懐かしい言葉だ。
**男**　感慨に耽る場合ではありません。
**女**　そんなことをする人ではない。
**娘**　あんたサ、異常なほどに嫉妬深い人なんだってねえ。彼、よく嘆いていたんだから。「学問は精神の自由がなければならない。なのに女房は心の安らぎを与えてくれない」て、あたしの胸に顔を埋めて泣いていたわ。それが先生の手なの、それにコロッといかれちゃった。女子学生ってそういうのに弱いんだ。
**女**　あの人が誘惑だなんて……けだもの！　恥知らず！　鬼！　泥棒猫！　売女！（ハンドバックからナイフを取り出し娘に飛び掛かる）。

妻が掃除機を運転させて現れる。以下の大立ち回りは掃除機の音にかき消される。悲鳴をあげて逃げる娘。おい掛ける女。女をとめようとする男。夫は娘を取り押さえようとする。妻は、突然、掃除機を止め、怒鳴る。一回、動きを止めて凝視する。

**男**　（女をはがいじめにし、ナイフを取り上げて）約束が違います。あくまでも話し合いでといっておいたはずです、奥さん。刃物を振り回しての暴力沙汰では、慰謝料も何もあったものじゃない。とりあえず今日はこれまでにして、日を改めて参りましょう。
**娘**　殺人未遂で訴えてやる。だれよ、こんな奴を家に入れたのは。
**女**　夫の心が戻るまで何度でも来ます。
**娘**　逃げないようにしっかり家の柱に縛り付けといたらいいんだから。かわいそうな彼。あなたのような奥さんでは先生がかわいそう。
**女**　鬼！　売女！

わめき、なおも娘に挑もうとする女。

**男**　帰りましょう。（女を促して連れ去る。）
**娘**　塩撒いて、塩！　汚らわしい。
**夫**　だれに言ってるんだおまえ。
**妻**　（飛んできて、娘の頬を張り）汚らわしいのはおまえじゃないか！
**娘**　何すんのよ！　痛いじゃない！



泣き叫び、妻の手から逃げるように去る娘。追って妻も。

**夫**　……なんということだ。
**祖父**　……全くとんだ修羅場の連続だ。女と男、何千万、何億年と一緒に生ながらまったく決着が付かん事だ。女、女、女か。
**夫**　女から言わせれば、男、男、男でしょう。
**祖父**　いや、女は判らん。だから好きも嫌いも女偏ではないか。うむ、女も初のうちは、「良い女」とかいて「娘」なんどと収まっているが、女も、三人集まると「姦しい」とはよく言ったもんだ。（次第に調子に乗ってくる）いんや、それだけじゃねえなあ。「嫉妬」という字だってほれ、お前、上下とも女偏だ。（空になぞり書きをしながら）やがて、女も古くなりゃあ「姑」になって嫌われ、あげくの果ての「婆」なんぞというのは、よる年波の皺くちゃな波の下に女がどでんと居座っている格好の字だぞ、うん。
**夫**　だからどうだと言うんですか！
**祖父**　いや、なに、どうということはないがな。

間。

**祖父**　うむ、良子だけは、初なヒヨッコだとばかり思ってたが。今どきの子っつうのはああいうのかねえ。
**夫**　思ってもみないことでした。

間。

**祖父**　うむ……良雄のことといい良子のことといい、いったい、この糸のほつれという奴、どっから始まったのか、何時始まったのか。
**夫**　……。
**祖父**　原因という奴はきっとあったはずだ。うむ、良一……どなんだ。
**夫**　判っていれば、事前に手はうてました、判らないからこそ……
**祖父**　おまえは親だろうが、二人の……判らんでどうする。
**夫**　確かに会話はなかった。私は仕事に夢中で。
**祖父**　子育ては良枝さんさまかせっきり。その報いだというわけか。
**夫**　とまでは言いません、結構いい父親の役を演じてきた積もりでした。何かがどこから狂っちまって。とにかく、色々な事がどっと起きて、何がなんだか。
**祖父**　うむ、確かに起こり過ぎだ……
**夫**　あの婆さんが切っ掛けですよ、父さんは戦争中、何かとんでもないことをしたんじゃないですか。
**祖父**　馬鹿者！　前にもいったろうが。ありゃペテンだ、タカリだ、大詐欺師だ。金儲けのための大芝居はぶってるんだ。
**夫**　本当にそう言い切っていいんですか。訳の判んない婆さんが突然現れて、愛がどうの、補償がどうの、償いをどうのと……。
**祖父**　それは何度も聞いた、聞いた。
**夫**　いったいお父さん、五十年前に何があったんですか。本当の事をいってください。何かごまかしてきたんじゃありませんか。
**夫**　お前は、これまで嘘やごまかしもなく、正々堂々と王道を歩いてきたとでもいうのか、え?!

睨み合う祖父と夫。階下の明りオフ
良子の部屋オン。
スーツケースに衣類を入れる娘。見詰める妻。

**娘**　さっきは行き掛かり上、ああは言ったけど、本当は愛してるの、好きなの。
**妻**　……（溜め息）。
**娘**　彼、奥さんと別れても一緒になるって言ってくれてる。

妻　二回りも違うんだろう？
娘　年齢なんか関係ないもの。
妻　あちらには、子供さんだっているんだろう。
娘　なんとかなる。
妻　土壇場になると社会的な地位とかメンツとか捨て切れないものよ、男は。
娘　（スーツケースを閉じて）当座これだけにするわ。後は住まいが決まったら　取りに来る。
妻　話では有名な先生だと言うじゃないか。マスコミなんか知られたらそれこそ　大変だよ。
娘　知られるかもしれない、でもいいの。
妻　よかないよ、あなた一人が晒者になるんなら自業自得でそれは仕方ないさ、けど、最近のテレビといったら親子兄弟まで追い掛け回すんだから、先生だって大学を辞めなければならないかもしれないだろう。それでもいいの。
娘　今更引いたからって元へは戻らないわ。
妻　恐ろしい。私には判らない。良雄も、おまえも何を考えてるのか、何を考え　ていたのか……。
娘　母さん、良子は悪い子だと思ってんでしょ……
妻　……

良子の部屋の明りオフ。暗転オン。

夫　……拘るようだけど……。
祖父　なんだ……五十年前ってやつか？　うむ……何があったって言っても、戦争　中のこった。天皇陛下の為、祖国存亡の危機さ当だってとるべき道は、はあ一　つだった。そんの時……いや、人間には誰しもが絶対に触れてはいけねえ過去　っつうものがあるもんだ。生きるってことは、それを軽々しく口に出さずに生　涯背負い続けていくもんだ。
夫　……。
祖父　それよりおまえ、一度は言おう言おうと思っていたんだが……。
夫　なんです。
祖父　どうだ。この際、田舎さ帰ったら……？
夫　それは……父さんも年だから側にいて、面倒を見なければいけないのは判っています。
祖父　俺のことじゃねえ。おまえたちのこと考えていってるんだ。良子も女子だ、いずれ嫁入なければならんだろう。どうだ、もう一度これからの生き方について考え直す、いい一つの切っ掛けではねえか。田舎は、都会と違って、あくせくしなくて済むぞ。良雄のためにもええんじゃねえのか。
夫　しかし、会社でもそれなりに信頼を得て人を使う立場で責任もあるし、そう簡単に止すというわけには行かないんですよ。それに帰ったからといってすぐ仕事があるわけじゃないし。
祖父　それは覚悟さえできてれば何だってできる。
夫　いまさら百姓をやれと言うんですか。
祖父　会社だって、たかが次長だろうが先々重役にでもなれるあてでもあんのが。
夫　そんな言い方ないでしょうが。
祖父　本当の事をいったまでだ。
夫　二十五年も都会暮らしで、うちの奴だって東京生れの東京育ちなんです、お父さんが考えるような、そう簡単に出来るわけがない。
祖父　しがみついているほどの価値があるものか、都会とは、社会とは、あの、人が溢れかえっている東京とは一体なんだ。
夫　価値は……。
祖父　今、お前がしがみついてる都会生活がぐらつき始めてんだぞ。
夫　そう簡単に結論づけないでください。
祖父　もっと創り上げることをやるこった。



夫　作ってきたつもりです、この家だって。
祖父　そんな次元の事をいっているんじゃねぇ。
夫　わかってますよ。
祖父　分かっちゃあいねえ、はあ、満員電車さ乗ってるだけだ。
夫　……。
祖父　お前を見てると、はあ、自分てものが全くない。
夫　自分を殺さなければ生きて行けないんです、今の世の中。
祖父　良雄はそれさ逆らっていたとは考えた事はねえのか。
夫　それは……。
祖父　みんな同じ流れに押し流されている。

妻が現れる。

妻　良子は出ていったわ。
夫　出ていったって、あてでもあるのか。
妻　お父さんには気持ちが落ち着いてから改めて挨拶するそうです。これから、暫く自分で生活するっていってました、おじいちゃんにも宜しくって。
夫　自分で生活するっていったって。学生の身分で仕事している訳じゃない、今日の今日まで脛を齧っていたんだ。
祖父　心配要らん。十分男を知ってんだ。もう、立派な大人だ。
妻　止めて下さい！　男だの女だの。
祖父　世の中、男と女さ。

老婆が現れる。

老婆　ハイ、ワタシ、女デス。
夫　（ギョッとして）……あなた……？
妻　良雄は……？
老婆　良雄クンハ学校ヘ行キマシタ。
妻　学校。
夫　まさか、半年も行かなかったというのに。
妻　やっぱり誘拐したのですね、どこへ隠したんです！
老婆　コノ人変デスネエ。何ヲ言ッテイルノデス。
妻　（夫へ）普段着で出たんですよ、そんなことってあります？
祖父　今日、何が起きても不思議はねえ。
夫　しかし……。
妻　（電話の受話器を取り、一一〇通報をしようとする）警察を呼びます。
老婆　（電話のフックを押え）学校行クノ当リ前、長い間行カナカッタノガ行ケタンダカラ学校行ッタノ喜ブコト当リ前。
祖父　なるほど、理に適っている。
妻　（電話はあきらめ）では……。私確かめてまいります（去る）。
祖父　連れ戻すような馬鹿な真似だけは、はあ、しなさんなよ。
老婆　（祖父へ）アナタ一太郎サンデスネ。
祖父　（咄嗟に、惚けて）一太郎さん？　さっき挨拶したでしょうが、隣の親父　と。
老婆　アナタ、一太郎サンデハナイ。
祖父　そうです、隣の親父です。
老婆　正直ニ答エテクダサイ。
祖父　正直ですとも。若い連中の一家だから、あんたのような訳が分からん人が来たんで相談相手というか、お役にたてればと、まあ、そんなわけですな。
老婆　（夫へ）本当デスカ。コノ人、一太郎サンデナイノデスカ。
祖父　疑い深い方ですなあ、あんたも。
夫　（曖昧に）え。ええ、まあ……。
祖父　一太郎、さんと言ったがな。その人は、本当に実在する人ですかね。あんたは、何か勘違いしているんじゃねえのかな。どうなん

です。

**老婆**　ソンナコトナイ。ワタシノ国、ワタシノ村ニヤッテ来タ兵隊ノ人書イテアル書類ノ中ニ榊原一太郎サンノ名前、チャント、アリマシタ。

**祖父**　同姓同名ということもある。

**老婆**　同姓同名？　知リマセン。ソウイウコトハ……。

**祖父**　同ず名字、同ず名前です。よくあるんだよ、そういうことが。

**夫**　（精一杯のお芝居で）……実は……あなたがお尋ねの父の一太郎さんは、一昨年死んだんです。

**祖父**　（嫌な顔）うむ？

**老婆**　嘘イケマセン。アナタ、サッキハ一太郎サン田舎ニ居ル、イイマシタ。田舎行クト息子ノ所ニ行ッテル。ソレガ今度ハ死ンダトイウ。ドウイウコトデスカ。アナタ方ハ。

**祖父**　どういうことって……そう、死んだ。気の毒なことをした。

**夫**　嘘じゃない……おっしゃる通り一太郎は私の父でした。寄る年波には勝てませんでした。過去にどのようなことがあったかは分かりません、どの様な生き方をしてきたか、ましてや戦争中と言えば私の生まれる前のことです。戦争中のことは殊更に口を噤んで私ども子供達に聞かせたり話したりするようなことはありませんでした。それがせめてもの、父の償いの意識だったのではありませんか。墓場へみんな持っていったんですよ。

**老婆**　ソレ、オカシイデス。ナンデモ包ミ隠スコト、日本ノ美徳ソレ違いマス、大キナ間違イデス。

**祖父**　ま、とにかく……そらあ墓場へ持ってってたか、どっかへ捨ててきたか、そんなこたあ生きてる者の勝手な想像だ。輪廻転生、お国もそうだが仏教の教えでは、次の世は、うじ虫に生まれてくるかもしれね。

**夫**　うじ虫は死んだ人につくんですよ。

**祖父**　そんなことは判っている。

**老婆**　ソレ、イクツモイクツモ見マシタ。戦争負ケタトキ私、ビルマ、イマシタ。今ノミヤンマーデス。日本兵ト一緒逃ゲテ逃ゲタ。逃ゲル途中、食べ物モ水モアリマセン。食べ物ノ代ワリニ日本軍隊カラ渡サレタノ青酸カリト手榴弾、手デ投ゲル爆弾デス。次カラ次ヘト死ンデイキマシタ。日本兵、ソシテ私ト同ジナ仲間中国人、朝鮮人、フイリピン人ノ従軍女子報告隊ノ死体ニ、ウジ虫ガツイテ……。

夫、吐き気を催す。

祖父の顔色が次第に変わっていく。

**老婆**　ワカリマシタ。一太郎サン、モウイナイナラ、息子サンデイイデス。コレヲ見テクダサイ。

老婆は、テーブルの上に次から次と札束をカバンから取り出して積み重ねる。

**夫**　これは……？

**老婆**　日本人兵隊、私ヲ抱イタ度ニ、沢山沢山クレタ。大事ニ大事ニ貯メタ。戦争終ワッタラ、コレガミンナ紙屑ニナッテイタ。デモ、ワタシハ今マデ大事ニ　トッテオイタ、紙屑ヲ。

**夫**　紙屑？　何です、これは。

**祖父**　（苦渋の表情）軍票という奴だ。日本の軍人だけが使える金だ。

**老婆**　ソウ、紙屑。日本ノ兵隊ダケガ使エル金。戦争負ケテ役ニタタナクナッタ。ソレ大事ニモッテタナンテ、私馬鹿ヨネ、オ馬鹿サンヨ……ネ。

**祖父**　（精一杯の苦渋の皮肉、自嘲でもある）味な歌を知ってる。

**老婆**　私、日本ノ歌、モットモット知ッテイマス。

老婆、突然に「海行かば」を歌いだす。



祖父、感にたえて「天皇陛下ばんざーい」と叫んで平伏した。

**夫**　どうしたんだ、お父さん。

**老婆**　（歌うのを止めて）オ父サン？

**夫**　お父さん……謝っているんだね、謝って……

**老婆**　謝ルダケガ解決デハナイ、（両手を差し延べて、祖父の手を取ろうとする）コウシテ……オヤ、オカシイデスネ。

祖父、コロリと転がる。

**老婆**　オヤ、オトウサン。（しゃがみこんで心音を確かめて）死ンデイマス。

**夫**　まさか……ごまかすんじゃないよ、お父さん（揺さぶり確かめる）……死んでる。　何と言う事だ（茫然）

電話のベル。暫く鳴る。

**老婆**　電話デスヨ、電話。

**夫**　うるさい！

**老婆**　ウルサイトハ、ナンデスカ！

**夫**　（鳴り止まない電話の受話器を取り、ほとんど怒鳴るように）なんですか！　誰？　……いまそれどころでは……え、良雄の先生……先程は……よかった？よかあないんです、こっちは！……とにかく、ええ、え、後ほど改めて……。（受話器を置き放心状態）

**老婆**　ボンヤリシテナイデ、ドクター、オ医者サンニ電話ナサイ。

**夫**　分かってます！（電話のダイヤルをプッシュする）

——　暗　転　——

（二）

前場から七か月の後のクリスマスが近い夜。
家具等が片付けられ、ダンボール箱の山。
明りの入ってないクリスマスツリー。
妻と娘がダンボール箱に食器類を紙に包んで詰めての引っ越し作業中。

**娘**　（足元にある小箱を取り上げて）これは？

**妻**　ああ、それはそこのダンボール箱の中（ツリーのそばの箱を指す）。

**娘**　わかった。

**妻**　あ、その箱の脇にあるの、それはこっちへ持ってきて。

**娘**　（ツリーを見あげて）これ、私のせいより大きくなった。

**妻**　おまえが三歳になった年からだから……少しずつ少しずつ大きくしていった……クリスチャンでもないのに。

**娘**　はい（手にしたものを妻に渡しながら）そういう拘りが好きなんだよね、我が家は……。でも、思い切ったなあ。正直のところ私、もう駄目かと思った。

**妻**　何が？

**娘**　お父さんとお母さん。

**妻**　そうなって欲しかった？

**娘**　そんなことないよ。

**妻**　良雄が立ち直ってくれたのに、別れるなんて事をしてはいられないでしょう……さて、あとはお勝手道具だ。（新聞紙の山を運んできて）これに一つずつ包むのよ。

**娘**　ほんとに奇跡だよね。

**妻**　あの日、先生がこられてその後にお婆さんが見えて、大きな心の変化があったことだけは事実ね。

**娘**　吹っ切れる何かがあったんだ、みんな。

妻　吹っ切れもするよ、あの日は本当に大変。お前が出ていった後、良雄が学校へ行ったとおばあちゃんがいうんだけど、それが信じられなくてね……。

娘　確かめに学校へ行った？

妻　まさか……それじゃあ、親馬鹿丸出しじゃないか。

娘　そりゃあそうね。

妻　そうだろう……戻ってみたら、おじいちゃんは事切れていて、それあ大騒ぎだった。知り合いのないこっちでお葬式をあげるわけにもいかないし……。

娘　おばあちゃんはどうしたのよ。

妻　それがねえ、外国人とは思えないほど手際がいいのよ。ご近所のお手伝いの奥さん方を仕切っての裏方仕事やら来客の接待やらをチャンチャンと進めてくれてね、ほとんど見ず知らずの田舎でよ。

娘　へえー、田舎までついていったんだ、おばあちゃん。

妻　そう。それで、終わったら消えていた。

部屋のなかに、祖父の幽霊が忽然と現れる。
以下、妻と娘には祖父の幽霊の存在はもちろん分からない。

祖父の幽霊　てへっ！　どこまでも追っ掛けてきやがって、あのばばあ。

娘　おじいちゃんも立つ瀬がないわね。

祖父の幽霊　その通りだ、良子ちゃん。だから腹さ据え兼ねですんなりとあの世さ、まだ行けんのよ。

娘　本当は日本人じゃないの？

妻　わからない。とにかく良雄が立ち直るきっかけを作ってくれたことだけは間違いなかった。

娘　救いの神、てわけだ。

祖父の幽霊　とんでもねえ、化け者だありゃあ。

娘　（大きな箱を開けて、おもちゃのピアノを取り出して）こんな物まで取ってあったんだ。

妻　そうよ。初孫が生まれたって、それはそれは大喜びでねえ、次から次といろんな物を送って下さったのよ。

祖父の幽霊　（悦に入って）そうともさ、わしが送ったんだよ。

娘　へえ（箱の中を掻き回して）いろんな物があるんだ。

妻　それ、あなたのもだから、持ってっていいわよ。名前が書いてあるだろう。

娘　うん。（ポンとキイを叩く）

娘、良雄と書いてあるもう一つの箱を開けて、バットやおもちゃの鉄砲など　を出していじくっている。

祖父の幽霊　それも、わすが良雄さ買ってやったさ。

妻　……あの子にとってはあの事件がいい恢復のきっかけだった。どうしても田舎の学校へ行くと言い出してね、こっちではいやだって。あの日、突然学校へ行ったとはいっても、教室までは入れないで会議室で一人ぽつんとしていたみたいだったから。

祖父の幽霊　そこだよ。なんたって、都会生活が性に合わなかったのさ、あの子には。

娘　やっぱり……

妻　何？

娘　ううん、何でもない。

妻　母さんのこれまでのやり方が間違っていたって言いたいんだろう。

娘　……かな。

祖父の幽霊　いや、良江さん、あんたは一生懸命やってきた、あのいい加減なお調子者の良一を精一杯支えて一家を守ってきた。この通り感謝してるんだ、だが……。

妻　同じおなかを痛めた子なのに……、



娘　片っ方はお調子者で、片や不器用で、実直面目で？

祖父の幽霊　わしゃあ、そこまでは言わんよ。だが、良雄に期待を掛けすぎたことは確かだなあ、いんや我が子さえ期待するのは間違っちゃあいねえ、いねえが……ちょっと子育てを焦り過ぎた。つまり、畑さ例えるなら、ちょっとな土さ肥やしのやり過ぎだった。

妻　よし、と。（仕事のきれ目だ）おまえが手伝ってくれたんで、早く済みそう……お茶でもいれようか。

娘　私がいれる……紅茶がいいか。ケーキを買ってきたから。

祖父の幽霊　それはええ。わしも、およばれすっかねえ。

妻　（ケーキの箱を開け、小皿に二つ取り分ける）わあ、おいしそう。

祖父の幽霊　（手を空に泳がせて）わしの分は……？　このうちはどういうことだ、仏壇がねえならねえでいいから、せめて、わしの写真ぐれえ飾ったらどうなんだ、え。

祖父の幽霊の前には何もない。

娘　（お茶をいれながら）紅茶の好きな彼……別れたんだ、奥さんと。

妻　（ケーキを食べながら）学校は？

娘　（同じくケーキを食べながら）止めた。

妻　そう……たいへんだねえ。

娘　けっこう、翻訳の仕事や何かで忙しいの。

妻　……一緒に、なるの？

娘　彼はそう言うんだけど……。

妻　なぜ？

祖父の幽霊、妻や娘の茶碗に手を出すが、そのときに限って口へ運ぶので掴む事ができずに手を空に泳がすだけである。

娘　まだ気持ちの上で整理がつかないから。とにかく、学校を終えなければって言ってるの。その時に考えるって。

恨めしそうに見ているだけの祖父。

娘　けど不思議な人ねえ。

妻　だれ？　おばあちゃん？

娘　ええ。

妻　何だったんだろうね。結局おじいちゃん何も言わないで死んじゃったし……。

祖父の幽霊　言わなかったわけじゃない。

娘　寝覚めが悪いわよねえ、なんとなく。はっきりしないままでなんて。おじいちゃんだって、何か言いたかったんだろうなぁ。

祖父の幽霊　（伝わらないもどかしさに焦れて）ちゃんと書き残してあるって。あのばあさんに限っては不明だがな。だが、だが……ありゃあ象徴的存在ではあった。

妻　そうねえ……そういえば良雄からね、珍しくはがきがきてね。

娘　電話はなかったしら、おじいちゃんの家には。

祖父の幽霊　電話ぐらいあるよ。

妻　あるわよ。だから珍しいのよ。

娘　へーえ。

妻　ほら、田舎のうちの裏に古い蔵があったのを、お前覚えているだろう。

娘　小さい頃、良雄と中へ入ってお化けがでるってキャアキャア騒いだところね。その蔵がどうしたの？

祖父の幽霊　見つけたのが、良雄は？

妻　はがきには……そうだ、あったはずよ（近くにある小箱の中からはがきを取り出して読む）。蔵の中は歴史の宝庫だ。丹念に書き残した、おじいちゃんの膨大な日記を発見した。これを読むだけでも充実した生活です。

**祖父の幽霊**　その時、わしは日本人として、取り返しのつかんような罪を南の国の人々に与えた、犯した一部始終が書いてある日記だ。そうか、見つけたんだな良雄は。よし。

**娘**　それだけ？

**妻**　いいえ、そのうえ、最もよき理解者が現れました。もちろん学校にも休まずに行っているからお父さんお母さん心配いりません。では、さようなら。

**祖父の幽霊**　それでええんだ、それで。良雄があの日記に熱中しているってえなら何をか言わんや老兵は消え去るのみ、だ。

**娘**　ふーん？

**妻**　（考え込む）まさか……。

**娘**　何よ？

**妻**　理解者、というのはおばあちゃんのことじゃないだろうか……？

**娘**　まさか……？

**妻**　（自分の思いを打ち消したい）そう、そうよね。

**娘**　そうよ、田舎でいいお友達ができたんじゃないの。

**妻**　そうね、そりゃあそうだわよね。

**娘**　それよりか私、お母さんたちの方が心配。

**妻**　何が？

**娘**　この家売って、荷造りしてしまって……良雄のために田舎へ行くんでしょ……。

**妻**　それもあるけど。

**娘**　お父さん、よく決心したわね。

**妻**　私がお願いしたの。

**娘**　だって、毎日の生活があるのよ。

**妻**　分かってます。

**娘**　分かってて行くなんて無謀だわよ。本当に、この家をすてて平気？

**妻**　捨てるとかどうとかではなく良雄を一人で置いとくわけに行かないでしょ。

**娘**　引っかかるなあ。お百姓なんか出来るの？

**妻**　出来るかどうかやってみなければ……

**祖父の幽霊**　それでええ、それでええんだ。これからは、はあ、自分自身できつんと決めるこった。それがわかったんで、もうは、行きます。行きますとも、あの世へ。さよなら、さよなら。（消える）

**妻**　それに何もお百姓さんをやるとは決まっていないし。

**娘**　決まってなかったら尚更じゃないの。

**妻**　あんただって一人暮らしができたんだろう。

**娘**　それは同じ都会だもの、なんとかなるわよ。

**妻**　出来るかどうかとか都会の人は無理だとか、決め付けないで頂戴。……もう決めたんだから、父さんと。

**娘**　そうだわ、そうよね。

玄関のインターホーンが鳴る。

？　と顔を見合わせる妻と娘。

**妻**　誰かしらね……。

**娘**　見てくる、私が。（と、玄関のほうに消える）

挨拶と招じ入れる声がして、娘と女教師が現れる。

**妻**　まあ先生。

**女教師**　ご無沙汰しました、その節は……本当に、お役にたちませんで。

**妻**　とんでもございません。良雄もやっと……先生がうちにお見えになったのがきっかけというか……さっきも良雄の噂をしていたところなんですよ。手紙がきましてね、元気で学校に通ってるって、

**女教師**　手紙、私にも来たんです……。



**妻**　先生にも……そうですか、それはそれは、やっと先生のご苦労があの子にも分かってきたんですね。

娘、先生に紅茶を勧める。

**女教師**　（軽く会釈して）実はそれが、気になって突然お邪魔したんです。

**妻**　気になるって何か？

**女教師**　これなんです。（と、手紙を渡す）

妻、手紙を読む。娘、後ろから覗き見る。

**妻**　（読み終えて）これが何か？

**娘**　良雄も大人になったんだ。先生に感謝しているじゃない。

**女教師**　ええ、それはそうなんですが、最後のところ、どう思われます？

**妻**　最後……お世話になりました、遠くの空からさようなら……これが？

**女教師**　ええ、遠くの空から……さようなら……。

**妻**　まさか……？

**女教師**　ええ、私も、まさかとは思うんですが？

**娘**　……お砂糖もっと入れましょうか？

**女教師**　は？　ああ、ええ、ありがとう。

**妻**　（もう一度手紙を見て考え込む）そんな。

**女教師**　いま多いでしょう、気になって気になって。

**妻**　（きっぱりと）いいえ、あの子に限ってそんな事はありません。これを読んで見てください。私宛にきた手紙です、

女教師、手紙を読む。

**女教師**　（読み終わって）ありがとうございます。取り越し苦労でした、すみません。

**妻**　（不安に駆られて）まさか……（電話に近付く）

**娘**　母さん……もしも、だったら出るわけ無いわよ、電話。

**妻**　（受話器を持ったまま）どうしよう。

**女教師**　……あたし、一所懸命のつもりでした。いえ、一所懸命やりました。けど、心底子供を理解してこなかった。自分の物差しで相手を決め付けていたんです。子供の心、悩みを受け止めるゆとりもないままに毎日の仕事をただ機械的にこなしてきた……そのために良雄くんを学校から弾き飛ばしてしまったんです。

**娘**　（いらついて）だから、どうだというのよ。

**女教師**　行きます、行ってきます。

**妻**　どこへですか。

**女教師**　良雄くんのところへです。

**妻**　（途方に暮れて）先生……。

**娘**　学校へ連絡を取るのが先よ。まだ学校がある時間だわ。

**女教師**　そうでした。

**妻**　（かけようとして）電話番号が分からない。

**娘**　聞けばわかるわよ、何と言う学校？

**妻**　（電話の前のボードに貼ってある紙を示して）これよ。

**娘**　分かった。

妻と娘が代わる。娘、電話をかける。

**女教師**　（妻へ）すみません。余計なご心配をおかけして。

**妻**　はあ（娘の電話が気になる）。

**女教師**　転校するまでに追い詰めたのは私の責任なんです。その上……。

妻　いえ、先生だけの所為では……。
女教師　いえ、そうなんです……実は……。
娘　（妻へ）分かったわよ、電話番号。
妻　あなたがかけて、私は嫌……怖い。

沈黙。電話をする娘。

女教師　実は私……気が付かなかった、というより、無視していたんです。
妻　だまっててください。
女教師　はい。
娘　（電話口へ）柿坂中学校ですね。私、今年の六月からそちらの学校にお世話になっております三年の榊原良雄の身内の者ですが……はいよっとお尋ねしたいことがありましてお電話したんですが……はい……今日、良雄は登校しておりますでしょうか。……はい、姉です、良雄の。すみません、お願いします。
妻　どうだって？　いるって？
娘　いま担任の先生に確かめてみるって。
妻　そう。

玄関のインターホーンのチャイム。

女教師　良雄君、普通の子とは全く違う世界のことをいつも考えているような子でした。だからほかの子とは歯車が合わないというか、それで……いじめがあったんです、……私見過ごしていた。いま考えると……。

再びチャイム。

妻　（ヒステリックに）聞こえていますよ。（と去る）
女教師　（唖然として口を噤むが、ぽつりぽつりと）良雄くんをを、私、体を張ってでも守ってあげるべきだったんです。いえ、彼の心を聞いてあげられる教師でなければいけなかったんです。
娘　過去の事をとやかくいっても……今が問題じゃないの。

妻と息子のガールフレンドが現れる。

娘　（電話の相手が出たようだ）はい……え、欠席！　休んでるんですか……あの、うちのほうを確かめていただけたんですか。ええ、ええ……そうでか。昨日のうちに届を。理由は？　出掛けるところがある？　それを認めたんですか？　欠席じゃない？　そんな……ええ、ええ。いかなければならない……。
女教師　行きます、私。
妻　（娘の電話を終えたのを待ち兼ねて）どこへいったって？　え？
娘　学校へは来ていないけど欠席じゃないって。高校進学の説明会時期なので学校訪問だろうって。
妻　（半分安堵して）そう。けど、そんなものかねえ。
娘　家に電話してみる？　案外いるかもしれないから。
妻　いいわ、いらない。
娘　ルミちゃん。しばらくね、元気だった？
息子のGF　おねえちゃんも。良雄から手紙がきたの……始めてなのよ、ここにいた頃は会ってくれもしなかったくせに。それで……。
妻　ルミちゃんにも？
娘　何が書いてあったの？
息子のGF　それが……（手紙を読み出す）「ルミちゃん、俺は覚悟を決めたんだ。いいかい。きっぱりと決めたんだ。そこで、君に僕の最期言葉を送ろう。」
女教師　最後の？……とにかく、私、良雄君の所へ行ってみます。



息子のGF、手紙を妻に渡す、妻、手紙を読む。
息子の声が流れる。

息子　おじいちゃんの日記の中にこんな事が書かれてあったんだ。おじいちゃんの日記だよ。
祖父の声　『骨のうた
戦死やあわれ
兵隊のしぬるや　あわれ
遠い他国でひょんと死ぬるや
だまって　だれもいないところで
ひょんと死ぬるや
ふるさとの風や
こいびとの眼や
ひょんと消えゆるや
国のため
大君のため
死んでしまうや
白い箱にて音もなく
帰っては　きましたけれど
故国の人のよそよそしさや
自分の事務や女のみだしなみが大切で
骨は骨　骨を愛する人もなし
なれど　骨はききたかった
故国の愛情のひびきをききたかった
がらがらどんどんと事務と常識が流れ
故国は発展にいそがしかった
女は　化粧にいそがしかった。
ああ　戦死やあわれ
兵隊の死ぬるや　あわれ
こらえきれないさびしさや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や』
（竹内浩三作品集・新評論刊より引用・一部省略）

妻　ルミちゃんさようなら……（手紙を読み終えて、手紙を娘に渡す）
娘　……。日大芸術科卒昭和二十四年ルソン島にて戦死、二十三歳武内浩三の詠う……。おじいちゃんの戦友だったとか？
息子のGF　（自分の思考の世界に拘る）良雄の馬鹿！
娘　（手紙を見つめたまま）……何よ、これ。いつまで拘ってるんだよ、良雄は？　良雄の頭の中は、まるで、時間が止まっている見たいじゃない、冗談じゃないよ。
女教師　（これも、自分の思考の世界に拘る）私、良雄くんが転校したときも、心の片隅のどこかで……申し訳ありません……。厄介払いしたような……。そんな教師として考えてはいけないような……そんな、汚い根性を持った……。
娘　いまさら戦争がそんなに……あいつ、おばあちゃんにすっかり洗脳されてしまったんだろうか。
女教師　行きます。自分の心を拭い去るためにも、そうしなければ。
妻　いきましょう、私も。
息子のGF　良雄のところなら私も行く。
娘　ルミちゃんも？
息子のGF　うん。
娘　学校あるんでしょ。
息子のGF　平気。冬休み、すぐだから。小母さん、いいでしょ。
妻　ありがとう……でも。

息子のGF　いいのよ、あいつにパンチ食らわしてやるんだから、小母さん。
女教師　私一たん家へ帰ってまた伺いますので、それまでお待ちいただけますか、そんなに時間は取らせませんから。
息子のGF　私も、そうする。
妻　（どちらへともなく）ええ、間もなく主人が帰ると思いますので、それからだから。

挨拶をして女教師、良雄のGF消える。妻も見送って。
娘、一人残る。所在なくオモチャのピアノ弾きだす。
妻、戻ってくる、がくっと肩をを落として座る。
娘、ピアノをひくのを止め、労の目で改めて妻の顔を見る。

娘　あ、ちょっと

優しく妻の髪の毛に手をやる娘。

妻　何？　白髪？
娘　……光の加減……よかった。

間。

娘　外は雪が降ってて、暖炉にはちろちろ火が燃えていて……明かりを消してクリスマスツリーの明かりだけをつけて、わたしがピアノ、良雄がヴァイオリンをひいて、お父さんの帰りをお迎えする、そんな風景はもう二度と無い夢の事だったのかしら。
妻　そんなことはない、そんなことは……これから、もう一度つくりなおさなければ。

堪らずに妻の胸にしがみつく娘。

妻　……馬鹿ねえ、赤ん坊みたいに（娘の髪を撫でてやりながら、自分も涙をこらえる）……もう一度やり直すんだから。
娘　（涙をぬぐって）うん。

しばしの間。

妻　（聞き耳を立てて）？

良雄が入ってくる。

息子　ただいま。
妻　（驚いて）良雄?!
息子　しばらくだな、姉さん。
娘　（驚いて）良雄じゃない？　お化けじゃないの？
息子　なんとか生きてるよ、一度は死のうと思ったけどさ。
娘　なにいってるの、あんたの先生心配してきたんだから、変な手紙出すから。会わなかったその辺で。ルミ子ちゃんもよ。
息子　先生？　ああ、花子先生か。
妻　（驚きから喜びに変じて）……よかった、お父さんも、もうすぐ帰ってらっしゃるし、もう一度このうちでやり直しなんだわ、四人で。
息子　四人じゃないよ。もう一人いるんだ。
妻　だれでもいいわ。昔に戻るんだもの。
娘　もう一人？

老婆が現れる。



老婆　マタ来マシタヨ、私デス。覚エテイマスネ。
妻　あなたは?!（絶句する）……。
息子　と、言うこと。だからお別れに来たんだ。
娘　だから？　だからって……そうなのか……？
妻　お別れって、では、おばあちゃん、こんどこそ？！
老婆　エエ。帰リマス、サヨナラデス。
娘　それで、良雄……遠くの空から……て？
息子　うん、おばあちゃんと一緒に南の国へ行くことにしたんだ。
老婆　送ッテクレルソウデス、ソシテズーット南ノ国デ一緒ニ住ンデクレルソウデス。
息子　そうなんだ。だ・か・ら、こうなのさ。きっぱりとけじめをつけるためにね。

突如、息子はおもちゃの銃剣で、妻と娘に戦いを挑む。それに呼応して妻と娘も戦争ごっこに興じているが、やがて、老婆は手にしたファミコンのリモコン操作で息子を操り、操られる息子は妻と娘を段ボール箱に押し込めていく。

娘　（押し込まれながら）そんな馬鹿な！
妻　（同じく押し込まれながら）そんな、そんな……理不尽な！

妻と娘、次第に箱の中に押し込まれて行く。
老婆は、リモコン操作の手を緩めない。その操作に息子は思考が停止した人形のように操られている。
そこへ夫、現れる。

夫　ただいま……（良雄と老婆に気付き、声をのむ）

華やかにクリスマスツリーに明かりが入る。

息子は、夫を同じようにダンボール箱にいれ、銃剣で刺す。
夫、箱の中に蹲る。

夫　俺達、何もわるいことしていないのに……一体、何が、誰がこんなことを企んだんだよ！

祖父の亡霊が、再び現れる。

祖父の亡霊　なんてえざまだ、なんという……にもかかわらず手も足もだせねどは?!（と、歯ぎしりして消える）

息子、一区切りして、老婆のリモコン操作も終わる。

息子　（老婆にへつらって）終わったよ、おばあちゃん。
老婆　ハイ、終わりマシタネ。キレイに終わりマシタ。
息子　そう、終わった。さあ、行こう。
老婆　イイエ、サヨナラデス……親兄弟ヲ殺ストハ、一緒デキマセン。バイバイ、良雄チャン。（といって、さっそうと去る）
息子　え！　まさか?!　まさか?!　……そんな……。

ツリーの明かりだけが眩く光って、あたりは闇に閉ざされてビートのきいた今日的音楽が劇場を押し潰すかのように鳴り響く。と、死んだはずの夫、妻、娘、息子が仮面を着け、おもちゃの鉄砲を持つて立ち上がり観客に向て連射するうちに幕。

★　★　★

劇団埼芸第68回公演作品
会場　浦和市民会館ホール
日時　一九九六年五月二十五日（土）十九時
　　二十六日（日）十三時半

# 劇評

## 劇団支木『千年の丘』

# 再生の重い意味の形象化

きしだ　みつお

劇団支木は、七月十八・十九の両日、青森演劇鑑賞協会創立四十周年記念企画の第二弾として、北野茨作「千年の丘」を堅倉憲の演出で上演し、ついで二十日には、劇団第四十回定期公演（昼、夜）としてこの作品を続演、画期の注目すべき舞台をつくった。

三内丸山遺跡を望む「千年電気工事店」が、このドラマの舞台である。父親の七回忌を切っ掛けに、久し振りに集まった四人の兄第姉妹。彼らは一様に生きる上で喘いでいる。一流大学を出て商社勤めの長男亀夫は、息子の反抗の責任を妻と押し付け合い、酒浸りの毎日だ。食えない劇作家稼業の次男文夫は、生活を妻に頼っているが、その妻との関係も終焉は近い。二度の離婚歴をもつキャリアウーマンの妹翡翠は、七回忌をすっぽかして翌日現れるが、その日常は愛に飢えている。静夫と結婚し家業を継いだ長女の糸子は、静夫の〝心の病〟で心労は重なるばかり。彼らの生活は押しなべて破綻している。

久し振りに顔を合わせた彼らの遠慮を知らぬ遣り取りは、次第に互いに負った傷を浮き彫りにしていく。揶揄はあっても、同情はない。舞台は入院中の静夫の自殺未遂事件で、急転して終幕へと進む。入院見舞から一足早く戻った翡翠は、静夫に代って店を切り盛りしてくれている従業員の良二に、「糸子姉さんと一緒にならないんなら、あたしを抱いて！」と迫る。拒絶する良二。彼は肉体関係もあった糸子への愛と静夫への罪悪感にさいなまれているのだ。走り去る翡翠に救いはない。

やがて病院から戻ってくる家族。母親のサキは亀夫夫婦を前に、お前たちの息子浩一が北海道旅行の帰りに立ち寄って、こう告げていったと伝える。自分は北海道で自立して働く。両親には絶対別れて欲しくないのだと。亀夫夫婦には僅かに救いの光が射す。病院から夜おそく戻ってくる糸子は、店を辞めようと退出する良二に出会う。彼に去られては経営は成り立たない。糸子は取りすがるが、去って行く良二。糸子は救いを失う。糸子を助け起こした文夫は、芝居は辞め妻とも別れるのだという。彼にも最早救いはないのだ。



終幕、糸子の長男賢太郎は、父静夫に会うのを恐れ、見舞に行ったらいいかどうかを母糸子に相談する。糸子は自身に言い聞かせるように言う。「決めなくちゃ——ひとりで」と。糸子のこの短い最後のセリフは救いを失った家族への、内なる励ましのメッセージとしての響きを、高く放つ。チェーホフの劇「ワーニャ伯父さん」の終幕に似た感動が伝わってくる。生きることの切なさに、寡黙に堪える人間への感動だ。

支木は再生の重い意味の形象化に見事に成功した。成功の第一要因は、演出の堅倉憲が大胆に公開稽古を設定したりして、反応を周到に手探りしながら、他方では生に執着するカタクラな演出を貫いたことにあった。第二には、サキ（奥崎日砂子）、亀夫（伊藤一郎）、文夫（山村亮一）、翡翠（宮本遙）、糸子（小山内紀子）らを中心とする演技陣の熱演とアンサンブルの絶妙さにあったといえよう。序幕辺りに挿入の津軽弁の場は、舞台を弾ませる役割を果していて効果的だった。舞台美術は具象を貫きながらも、非具象の世界を広げて舞台に奥行きを持たせ、人間の大地を明るいグレーとしながら、周囲の壁や家を茶で包んだコントラストは、舞台を格調高く支えたことも見逃せない。この劇によって支木は、専門劇団水準のハードルを超えた。

（劇作家）

## 劇団京芸

# 『国語元年』

## ―京都弁でのひとりごと―

尾川原　和雄

カウチポテトでテレビドラマ見てたらええのに、なに思てこんなとこへ芝居見に来たんやろ。固い床の上に座らされて、前や隣の人の身体さわらんよう気へつけて…俺、やっぱり井上ひさし好きなんやろな。どこがて、セリフ。気のきいたおもしろいセリフがポンポン出てくるとこ。さすが浅草で渥美清や長門勇と丁々発止、言葉のやりとりを修行した劇作家、どんな洒落たセリフがいつとび出すか、ぞくぞくしてくるねん…まあ退職して暇やいうこともあるけど、それが楽しみで京芸の芝居「国語元年」見に来たん。

そやけど笑えなんだら困るなあ。おもろいセリフやけど、役者がしゃべるとおもろないいうこともあるやん。ひと言のセリフでも大事にせなあかん、それぞれ深い意味があるねん…それはそやけど、客はそんな裏の意味まで考えて見てたらしんどうてかなん。芝居は楽しんで見るのが、俺の主義やねん。ええ芝居はあとからじんわりときいてくる…京芸の役者は真面目で熱演型やさかい、かえって心配やな。

息子のGF　いいのよ、あいつにパンチ食らわしてやるんだから、小母さん。

女教師　私一たん家へ帰ってまた伺いますので、それまでお待ちいただけますか、そんなに時間は取らせませんから。

息子のGF　私も、そうする。

妻　（どちらへともなく）ええ、間もなく主人が帰ると思いますので、それからだから。

挨拶をして女教師、良雄のGF消える。妻も見送って。

娘、一人残る。所在なくオモチャのピアノ弾きだす。

妻、戻ってくる、がくっと肩をを落として座る。

娘、ピアノをひくのを止め、労の目で改めて妻の顔を見る。

娘　あ、ちょっと

優しく妻の髪の毛に手をやる娘。

妻　何？　白髪？

娘　……光の加減……よかった。

間。

娘　外は雪が降ってて、暖炉にはちろちろ火が燃えていて……明かりを消してクリスマスツリーの明かりだけをつけて、わたしがピアノ、良雄がヴァイオリンをひいて、お父さんの帰りをお迎えする、そんな風景はもう二度と無い夢の事だったのかしら。

妻　そんなことはない、そんなことは……これから、もう一度つくりなおさなければ。

堪らずに妻の胸にしがみつく娘。

妻　……馬鹿ねえ、赤ん坊みたいに（娘の髪を撫でてやりながら、自分も涙をこらえる）……もう一度やり直すんだから。

娘　（涙をぬぐって）うん。

しばしの間。

妻　（聞き耳を立てて）？

良雄が入ってくる。

息子　ただいま。

妻　（驚いて）良雄？!

息子　しばらくだな、姉さん。

娘　（驚いて）良雄じゃない？　お化けじゃないの？

息子　なんとか生きてるよ、一度は死のうと思ったけどさ。

娘　なにいってるの、あんたの先生心配してきたんだから、変な手紙出すから。会わなかったその辺で。ルミ子ちゃんもよ。

息子　先生？　ああ、花子先生か。

妻　（驚きから喜びに変じて）……よかった、お父さんも、もうすぐ帰ってらっしゃるし、もう一度このうちでやり直しなんだわ、四人で。

息子　四人じゃないよ。もう一人いるんだ。

妻　だれでもいいわ。昔に戻るんだもの。

娘　もう一人？

老婆が現れる。



女優が江戸下町言葉、彦根生まれの男優が薩摩言葉。その他にも生地と違う始めての方言をしゃべらされた人が多いんや思うけど、それぞれ存在感があったからええのん違う。会津弁の強盗て、言葉がわからんので相手が脅えない、そしたら強盗にならへんもん。笑ろたなぁ…法律的にはどうなんやろ。

俺の使こてる言葉は厳密にいうと京言葉やない。俺は伏見の生まれや。よその土地の人にはわからんやろけど、伏見の人間は京と伏見を区別している。江戸時代伏見は大阪・奈良への交通の要衝、宿場であり淀川の港町、酒造の町、堺や長崎と肩を並べて繁栄してた商業都市やったん。それを裏辻芝公民のような調子のええ京の人間にころっとだまされて、昭和六年京都市に合併されたんや。それ以来、六大都市やの百万都市やのと京の方が威張るばっかりで…最近は地下鉄工事でゼネコンいいなりの高い金払ろたり、化け物みたいな京都駅作ったり…冗談でなしに明治時代に戻って伏見市独立運動起こしたろか思てる人もいるねん。

それがどうやて…別にどういうことないねやけど…大が小を呑み込んでいく。小より大の方がなにをやるにも効率がええ。歩行者よりもトラック中心の交通網を作った方が生産効率がええ。大きく支配した方が行政効率がええ。なんによらず全国統一基準を作った方が効率がええ。「全国統一話言葉」を作ったのもそれや。標準語が正しい言葉で方言は悪い言葉…現にそう教えてる学校がある。カウチポテト（カウチに寝ころんでポテトチップを食べながら）やチョベリバ（超ベリーバッド）など、つぎつぎに奇妙な非標準語を造語するコギャルたちの抵抗姿勢？はなかなかのもんや。とにもかくにも、芝居が終わる頃にはいつの間にか足の痛みも忘れさせてくれてたのだから、京芸もなかなかのもんや。

# 96年 全リ演西会議 演劇講座

豪華なレセプション

## 癒しに通じる演技
### ――演技の部――

畑野　稔

現代は確かに病んでいる。政治も経済も教育も、そして社会全体も、すべてその埒外に置かれているものはない。我々が劇をやる意味は、この病んでいる社会の中に幾条かの、健やかな営みの光を求めることに在るのかも知れない。またそのこと自体が、気づかぬ中に自身も病む者の一員に組み込まれている理不尽さへの抵抗となっているといえるのかも知れない。

いずれにせよ〝病む者〟には〝癒し〟が必要となる。それは集団にも、集団構成の一人である個人にも求められるものである。

講師　高山図南雄氏

今回の講座の演技の部、この癒しに視点が当てられていたと考えてもいい。講師の日大芸術学部高山図南雄教授は、演出家であり、さらにドラマ・セラピーに強い関心を持たれ、その体系化に努力されているその道での第一人者である。

プログラムは、集まったみんなの中から適当な相手を見つけ、お互いに五分間自分のことを話し合い、その相手のことをみんなに紹介する他己紹介から始まり、感性を磨くことを課題とした一人一人のポーズ。続いて前の人の取ったポーズを次の者が補ってポーズを取り、次々と補うポーズで、何かの形を作り上げることが行われた。これはスタニスラフスキー・システムの基礎の一つであると共に、自らがポーズをどう捉えるか、そして集団で創る形の中に欠けているものを、何であると見るか、自らの心の在りようが問われる問題でもある。

即興演技を楽しむ受講者

次にグループを作り、グループによって儀式――結婚式でも葬式でも何でもよい――を即興で演じる実習も行われた。周りから見れば可笑しくてたまらないようなことでも、演じる者は大まじめにやることが求められた。なおこの儀式は、グループを二回組み替えて行われたが、方法はあくまでも即興である。最後には椅子に座って力を抜くリラックスの実習がつけ加えられた。感性を大切にするこの実習の中で、本当に涙を流す人も出てくる状況だった。

この一連の指導は、高山教授が、スタニスラフスキー・システムの基礎をかなり忠実にふまえて実施されたと考えていい。もちろん高山教授がその専門家である為であることは言を埃たないが、むしろ今回の高山教授の意図は、病む社会の中で自身も気づかぬ中に病まされている我々の、自らの力による癒しの方法の提示にあったのではないかと思われる。その結果がリラックスの実習の中で涙を流す人も出てくることにつながったのではないだろうか。今回示された一連の方法を振り返る時、それがロールプレイも含むサイコ・セラピーの手法に驚くほど酷似していた。人間を丸ごと表現する為の演技の訓練が、人間の内部に潜む病巣を晒し癒すことになるのは、当然といえば当然かも知れない。スタニスラフスキー・システムが、そのまま癒しの方法ににつながることを再確認させられた講座でもあった。

# ☆　衣裳の仕事　☆

講師　法月　紀江

裏の仕事の中で「衣裳」を正面から取り上げた講座は今回が初めての試み。講師は、大阪芸大の講師で一昨年伊藤喜朔新人賞を授賞された法月紀江先生。法月さんは緒方規矩子さんに師事。

主として創作バレー・オペラの衣装製作の他、演劇では「劇団京芸」や栗原省演出のミュージカル作品、「いこら」の衣裳などに大胆なデザインを提供されて来た。講座には猿渡公一・前橋圭以子・七瀬佳恵（福岡現代劇場）、園山土筆・有田美由樹・三島操子（劇団あしぶえ）、柳辺義彦・佐藤栄子（劇団息吹）、熊本　一・宮嶋裕子（劇団大阪）、河野元子（関西芸術座）、樋口伸廣・鐘ケ江里子（劇団かすがい）、梶武史（劇団四紀会）、吉本雅子（劇団演劇街）、四ツ橋千代（劇団コーロ）、栗原省（劇団いこら）の皆さんが参加。劇団責任者や演出家が並ぶ顔触れには講師も最初は大緊張であった。

講師の作品の説明

脚本を繰り返し繰り返し読んで自分のイメージを作っていく課程が詳細に話され、次にデザインまでのうんざりするくらいの作業、各場面のイメージの絵コンテ、各場面をコトバにする作業（それらをなるべくラフにザラ紙にボールペンで。のちに法月さんのラフスケッチなど見せて頂き一同「うーん」）登場人物のイメージが次第に形になって見えてくる段階等々。彼女はいつか自分のイメージの海を自由に泳ぎまわっていた。

お話を聞きながら、受講者もいつの間にか想像力の世界に引き込まれ創造の原点を手探りしていることに気付く。

そこまでは良かったのだが、一日目の終わり、テキスト『フィガロの結婚』『河童詫証文』の「プランを書け」それについての「あなたのコンセプトをまとめてください」と宿題。さあ、ベテランの皆さんも必死で、おそらくこんな



に「衣装」を通じて創造そのものに取り組んだことはないくらい緊張し、充実した講座でした。後に法月さんから次のコメントが事務局に寄せられました。（栗原省）

「この度は《衣装の仕事》に眼を向けて下さって有難うございました。とても大切な分野であると誰もが意識しながら、中々手を付け難いのは、舞台美術の視覚的な分野であるにもかかわらず「キャストの一部」と位置づけてしまうのが原因と思われます。

講座の御依頼を受けたとき、多分求められるであろう《すぐに役立つ衣裳づくり》について随分頭を悩ませました。私自身《簡単に出来た》覚えは一度もなく、考えれば考えるほどに自分自身の仕事の内容とはかけはなれて、だんだん惨めな気持ちになりついにボヤキ始める私に、いつも私の無理な注文を引き受けさせられている製作者（縫い手）の杉山浩美が『これ迄一度も簡単に出来てへんのやから《簡単にはでけへん》と言うたったらえやないか』と言うのです。それを聞いて私はフツと肩の力が抜け《簡単に出来ない、すぐ役立たない、決して楽しくない衣裳の仕事》の講座の準備をしました。

どうぞ、身体をみがき上げ、鍛え、本を良く読んで、日々観察を怠らず、演劇創造に対する自分の意見をもち、それをぶつけ合い、いい作品を作ってください。

法月　紀江　拝

# 『衣裳の仕事』に参加して

福岡現代劇場　七瀬　佳恵

今回は法月先生の衣裳の講座を受けたのであった。とてもおもしろく、プラスになったと思う。でも内容がとてもナイーブだったり、抽象的だったり、イメージの問題だったりと、何と表現していいものやら非常に伝えにくいのです。

講座の中で「なるほど」と思った事は、例えば一人の人間がいたとして、その人を背の高い人、背の低い人、あるいは子供に見せたい時の色使いや肩幅の事、又その中で役者の顔の大小や身長、体格、肌の色等で同じプランの衣裳でも変化する事。観せ方として、心理的な事と物理的な事をあわせて効果的に考えて行く事。又、布の素材もパターンとしてすけているものいないもの、光っているものいないもの、軽いもの重いものといった物の中から必要な物と、はずしても大丈夫な物とを選択していく事等々、すぐ実践できそうな事からとりあえず頭にインプットしておこうと思う事まで色々でした。

そしてもうひとつ極めつけは強烈でした。衣裳的見地から行くと、「役者の体形」、つまり太りすぎ、やせすぎ、姿勢が悪いなどによって、見せていい所と隠さなくてはなら

ない所が出てくる。その分、布が沢山必要になります。お金もかかります。

また、経営的見地から行くと、少しでも低予算でいいものを仕上げたい、とこうなります。この両方の問題をクリアにするにはどうしたらよいか!! ナント答えは簡単だったのです。答えはひとつ「役者が体をみがく事です。」法月先生はこうおっしゃった。

ガガーン! そうだったのかあ、実は私、去年の夏から8kg太ってしまっていたのです。

福岡に帰ってくると、さっそく秋の公演「きつねとぶどう」の衣裳デザインを考え、一人一人絵にして仕上げて行く。キャラクターによっては一対パターン用意してみる。絵の具もパレットも筆も用意し、少しづつ色付けをして行く。絵の具は18色三千円もして、ちょっとクラクラしたがなるほどきれいな色でうれしい。あっ「きれいな色」と言ってはいけない。先生に叱られたばかりだった。元い、高い分だけ発色もよく発色もよく発色もよく…えーっと、それから発色もよく…。つべこべ考えているうちになにしろ絵は出来上がった。ド下手ながら必死で仕上げた自分の絵は、なにやらとても愛らしく感じる。でも本当にヘトヘト! こんなに苦しくエネルギーのいるものかと、あらためて法月先生を尊敬しました。

そしてついに我劇団の演出猿渡に見せる時がやって来た。とっても上手に描けて、特に靴が上手に書けて嬉々として猿渡に見せると「あっこの靴いらない」「えーっちょっと待って下さい。せっかく図画工作〝2〟の私が大枚はたいて夜も寝ずに、それもこんなに上手に描けたのに、それはないー。」と、本来の趣旨を忘れて抗議したい思いをぐっとこらえて「では、どんなくつでしょう?」と具体的にイメージを聞いてみる! こう展開して行くわけです。

この様に絵を書き衣裳プランを立てるという事は、伝えにくいイメージを視覚的表現、つまり、手段として人に具体的に伝えることが出来るわけで、とても大切なことなのだと自分なりに身をもって実感しているしだいです。

頭から爪の先までトータルで描いて行くという事は、どこが抜けているのか、何が足りないのか、自分もまわりの人達もよく理解できるというわけです。みなさんも絵、とりあえずとにかく描いてみて下さいね。必ず何か発見があると思いますよ。

☆ ☆ ☆

## 劇団かすがい 鐘ケ江 里子

全リ演で初めての衣裳講座ということで、興味を持って参加した。

まず最初に、法月さんの今までの作品の写真を見せていただいた。「フィガロの結婚」「蠅の王」「雪の女王」〝モダンダンス〟など。なかでも、「フィガロの結婚」は、作った時期の違う二種類の作品があり、イメージ(色使いなど)の全く違う作品であった。

二日目は、実際に衣裳プランを立ててみる。あらかじめ読んでいた「フィガロの結婚」と「河童詫び証文」について、どちらかの作品を選んで、プランをたててみる。次に、好きな登場人物をひとつ選んで、自分の身体を使って絵を書いてみる。なかなかパッとイメージがわかず、悩む。

そして、学生の書いた「河童詫び証文」の衣裳プランを見せていただいた。さすがに大阪芸大の学生だけあって、それぞれに個性のある作品であった。それから、法月さんの作った衣裳の実物を見た。

衣裳を作るにあたっては、素材の選び方、透ける−透けない、軽い−重い、光る−光らないなどの違い、布の織り目を考えた裁断の仕方などもポイントのひとつである。

法月さんはまず、衣裳担当としてのイメージを、演出とは別で持つそうである。衣裳も一つの芝居を作る要素である(今まで私たちは手がまわらないという理由から、つい後回しにしがちであったが。)裏方、表方、それぞれがその作品に対する思いを持つことの大事さを、あらためて思った。

もうひとつ、役者の身体をみること、どこに肉がついているか、ついていないかなど、身体の特徴を知ること。身体は、大人と子どもではバランスが違う。例えば「雪の女王」のゲルダの衣裳で、肩のきりかえを首に近いところにもってることで、肩幅を小さく見せ、少女らしく見せることができる。また、衣裳の色づかいによって大きく見せたり小さく見せたりもできる。

一番印象に残っているのが、衣裳の基本になることで、今まで考えなかったこととして、役者の肌の色がものの基本の色になるということ。そして、本来なら役者の身体自体が衣裳であるのが一番よく、衣裳は、見せたくないところをかくすものであるということ。役者としては、人に見せられる肉体を作らなければならないのかな、と感じた。また、一昨年、京都で開いた装置の岡島さんと共通しているようにも思う。

『河童詫び証文』のイメージ
―――― 出来たぞ! ――――

# 事務局だより

## 全日本演劇フェスティバル
## 神戸での開催を決定！

来年夏の全日本演劇フェスティバルの件で、緊急に全リ演議長団会議を開きました。九月十四、十五日、神戸市内の劇団四紀会館稽古場で。

神戸での開催は、大震災の影響が大きいため時期を一年延長したうえで実現に向けて努力しましたが、諸事情で断念せざるを得なくなり、代わって大阪での開催の可能性を探ってきました。しかし、会場と助成金の見通しがたたなくなったため、西会議の四紀会が中心になり再度神戸での開催に向けて準備をしてきました。そして緊急に議長団会議を開き、検討することにしたものです。議長団会議は、いろいろ話し合った結果、次のような結論を出しました。

一、大震災の神戸の復興と連帯を願ってという意味合いから、多少困難があっても神戸での開催に踏み切る。

二、日程、会場は次のとおりとする。

日時　一九九七年八月二十九日（金）、三十日（土）、三十一日（日）

会場　神戸市、アートビレッジ（客席二三二）
リハーサル室、練習室、喫茶コーナー等有。

宿泊　タワーサイドホテル、舞子ウィラ
※会場、宿泊所ともJR神戸駅から徒歩

三、参加費　二泊分を含め一人　一万六千円（予定）

四、出演団体　東　二集団
西　二集団
地元　一集団

希望、推薦を募り、十月末をめどに決定する。出演資格は全リ演加盟集団にこだわらない。韓国の劇団にも参加を打診してみる。

五、講演
木村光一（演出家）、桂米朝（落語家）、茂山千之丞（狂言）氏のうちどなたか。

六、助成金
助成金がないと成り立たないので、開催地の県、市をはじめ、文化庁、芸術文化振興基金、東洋信託銀行その他に要請していく。
また、出演集団も地元自治体や企業に、神戸復興支援のためのフェスティバルに参加するから助成をと、できるだけ働きかける。

七、日本アマチュア演劇連盟（NADA）にも共催をよびかけ、名実ともに全日本規模のものとする。



八、名称
全日本演劇フェスティバル　in　KOBE
集まろう！　神戸へ　（スローガン）

九、役員
実行委員長　仲　武司（関西芸術座）
事務局長　梶　武史（四紀会）
事務局　全リ演西会議
同　兵庫ブロック
兵庫劇団協議会

## 役員は再選

役員は、西会議の事務局次長に清原清次さん（劇団大阪）が就任されたほかは全員再選されました。

## 「演劇会議」のこと

「演劇会議」誌の編集、発行については、これまで東会議が中心になってすすめてきました。萩坂さんから引き継ぐとき三年くらいで東西で交代する約束でした。来年で三年になることから、第九十五号から西会議の方に担当を移行することになりました。

これは、議長団会議で東会議から申し入れがあったもので、西会議では早急に検討することになりました。

## 消費税反対の声明

全リ演はこのほど開いた総会で、消費税率の引き上げに反対する声明を決議し、九月七日に発表、同日付けでテレビ、ラジオ、新聞、政党など二十一団体に送付しました。

全リ演加盟の各種団はそれぞれの地域で運動を広げてください。

## 消費税の引き上げに反対します

一九九六年九月七日
全日本リアリズム演劇会議
議長団代表　こばやしひろし
仲　武司

政府は来年四月から消費税の税率を現行の三％から五％に引き上げることを決めました。もしこれが実施されれば、四人家族で年間十八万円もの負担になるといわれています。不景気の中で、これ以上に税率が引き上げられれば国民の活力はなえるばかりか、小さな企業や商店にとってはまさに死活問題と言わざるを得ません。

私たち演劇に携わる者も、消費税が導入されてからの数

# 全日本リアリズム演劇会議住所録

## 東　会　議

| B | 劇　団　名 | 住 | 所 | 電　話 | F A X |
|---|---|---|---|---|---|
| 北海道ブロック | 劇団さっぽろ | 063 | 札幌市西区宮の沢3条4丁目14-8 | 011-663-6259 | 011-663-8198 |
| | 劇団新劇場 | 065 | 札幌市東区伏古11条2-396-47 | 011-784-9908 | |
| | ドラマシアターども | 067 | 北海道江別市高砂町37-90 安念智康方 | 011-384-4011 | |
| 奥羽ブロック | 劇団弘演 | 036 | 青森県弘前市品川町1 ブラジル内 | 0172-35-4670 | |
| | 劇団支木 | 030 | 青森市長島町4丁目21-3 | 0177-77-4677 | 0177-77-4677 |
| | 黒石演劇研究所 | 036-03 | 青森県黒石市乙徳兵衛町51 加賀谷方 | 0172-52-4097 | |
| | 劇団やませ | 031 | 青森県八戸市大字鮫町字下松笛場14-183 柾谷方 | 0178-33-3850 | |
| | 劇団未来半島 | 035 | 青森県むつ市緑町26-2 （株）丸二物産内 仁木方 | 0175-24-1189 | |
| 東北ブロック | 劇団山形 | 990 | 山形市東青田町5丁目8-5 | 0236-32-4105 | |
| | 劇団だいこん座 | 997 | 山形県鶴岡市青柳町42-32 たんぽぽ保育園内 | 0235-24-1688 | |
| | 仙台小劇場 | 980 | 仙台市青葉区五橋1丁目5-13 平和友好会館2F | 0222-64-2340 | |
| 関東ブロック | 劇団群馬中芸 | 371-01 | 群馬県勢多郡富士見村大字赤城山大河原626-498 未来スタジオ | 0272-88-2700 | |
| | 劇団埼芸 | 362 | 埼玉県上尾市日の出町4-508-1 | 048-777-4430 | |
| | 劇団久喜座 | 346 | 埼玉県久喜市中央1-3-13　江原方 | 0480-21-0664 | |
| | 青年劇場 | 160 | 東京都新宿区新宿2-9-20　間川ビル6F | 03-3352-6922 | |
| | 劇団銅鑼 | 175 | 東京都板橋区成増5-1-2　米丸ビル | 03-5997-9461 | 03-5997-9463 |
| | 東京芸術座 | 177 | 東京都練馬区下石神井4-19-11 | 03-3997-4341 | 03-3904-0151 |
| | 劇団展望 | 166 | 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32 | 03-3393-2739 | |



年間どれほど苦しめられてきたことでしょう。消費税の分だけ劇団収入が減り、劇団の運営はピンチです。ほとんどの劇団員が劇団からの給与は年間百五十万円以下というひどい状態です。これ以上引き上げられてはたまりません。

消費税は文化に低い国に未来はありません。軍事や住事などにお金を投入しないで、もっと国民のためになる文化や福祉に使うべきです。

私たちは、消費税率の引き上げに反対です。そして、消費税そのものの撤廃を要求します。

以上

☆　☆　☆

## 推薦文

この度、北海道演劇集団の仲間でもある「ドラマシアター」がリアリズム演劇会議に加盟することになり、ここに推薦します。

会員諸氏を中心に北海道江別市で、1981年創立された「ども」という名称は安念氏のネーミングからきています。創立以来、稽古場は三回ほど替わりましたが、この集団は、脚付作者であり演出家でもある代表者の安念氏の指導のもとに、ほぼ毎日稽古を積み重ねています。

民家や倉庫やアパートなどを借りて自分たちの手で改装し、稽古場兼小屋として劇団の公演は原則としてそこでやるほかありません。「ども」が共鳴できるイベントや他劇団の公演、コンサートなどが日常的に行われ、地域の大きな文化的な拠点となっています。また、安念夫妻が同じ建物内で経営し、たまり場や情報交換の場となっているのも強みです。

「ども」と安念氏は、徹底的に地元にこだわり、楽しい大衆演劇的芝居づくりを目指しています。地元を素材にした安念氏の創作劇五本は全て上演されました。代表作にはが「とど山第三分教場」「ジリーズ」、「北海道境団」「」がえしの系譜」などがあります。

前回の道演集江別演劇祭の開催に大きな原動力となりました。現在、団員数は十二名。今度の総会には、安念氏は病気治療のため、参加できませんが、今後ともよろしくお願いします。

一九九六年八月

全日本リアリズム演劇会議事務局殿

劇団さっぽろ代表　林中直樹

ドラマシアター「ども」　――――連絡先――――
北海道江別市高砂町三七―九
安念智康方　電話〇一一―三八四―四〇一一

| B | 劇団名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|---|
| 関東ブロック | 演劇集団石るつ | 134 東京都江戸川区西葛西 3-15-8-701 境野修次方 | 03-3804-0507 | |
| | 演劇集団土くれ | 105 東京都港区虎ノ門 1-12-1 第一法規ビル福田事務所内 | 03-3508-0104 | 03-3508-0140 |
| | 劇団阿修羅 | 157 東京都世田谷区南烏山 2-33-15 川崎方 | 03-3309-8633 | |
| | 京浜協同劇団 | 211 神奈川県川崎市幸区古市場 2-109 | 044-511-4951 | 044-533-6694 |
| | 劇団蒼生樹 | 220 神奈川県横浜市西区伊勢町 3-133-824 濱田方 | 045-242-3584 | |
| | 三浦半島劇団海 | 238-01 神奈川県三浦市南下浦町菊名 56 | 0468-88-3142 | |
| 山静ブロック | 劇団やまなみ | 400 山梨県甲府市青沼 1-8-5 梅津方 | 0552-33-9556 | |
| | 劇団静芸 | 420 静岡市昭府町 1 丁目 10-37 | 054-273-0604 | |
| | 劇団からっかぜ | 431-02 静岡県浜松市篠原町 21505 | 0534-49-0937 | |
| | 劇団火の鳥 | 421-21 静岡県安倍口団地 5-38-308 泉地守方 | 054-296-1297 | |
| 中部ブロック | 岡崎演劇集団 | 444 愛知県岡崎市元欠町 3-10-3 浅井方 | 0564-21-2614 | |
| | 劇団名芸 | 468 名古屋市天白区平針 1 丁目 1808 | 052-803-2922 | |
| | | (457 名古屋市南区汐田町 11-8(栗木)急ぎ、小包類は) | 052-821-3691 | |
| | 劇団名古屋演集 | 451 名古屋市西区庄内通 4-16-3 | 052-524-5975 | |
| | 劇団名古屋 | 456 名古屋市熱田区新尾頭町 2-2-19 | 052-682-6014 | |
| | 劇団上野市民劇場 | 518 三重県上野市丸の内 共同ビル 3F | 0595-23-5252 | |
| | 劇団すがお | 511 三重県桑名市森忠睦美丘 1058 | 0594-31-4210 | 0594-31-4210 |
| | 劇団夜明け | 508 岐阜県中津川市北野丸山 | 0573-65-4937 | |
| | 劇団はぐるま | 500 岐阜市西野町 1 丁目 11 番地 | 058-265-1852 | |

## 西会議

| B | 劇団名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|---|
| 大阪ブロック | 関西芸術座 | 557 大阪市西成区岸ノ里東 2-10-2 | 06-661-2112 | 06-661-2060 |
| | 劇団潮流 | 557 大阪市西成区松 1-6-17 橘モータープール内 | 06-658-2315 | |
| | 劇団未来 | 536 大阪市城東区成育 1-4-25 | 06-939-5777 | |
| | 劇団きづがわ | 551 大阪市大正区泉尾 4-2-7 | 06-553-7991 | |
| | 劇団大阪 | 542 大阪市中央区谷町 7-1-39 新谷町第 2 ビル 103 | 06-768-9957 | 06-268-9957 |
| | 劇団コーロ | 546 大阪市東住吉区公園南矢田 2-4-7 | 06-695-6401 | |
| | 人形劇団クラルテ | 559 大阪市住吉区南加賀屋 3-1-7 | 06-685-5601 | |
| | 大阪府職劇所 | 540 大阪市中央区大手前元町 大阪府職労第 2 書記局 | 06-941-0351 | |
| | 劇団息吹 | 578 東大阪市中野 224-14 | 0729-64-4441 | |
| | 座わだち | 572 寝屋川市東神田町 22-21 安田様方 | 0720-28-1349 | |
| 京都ブロック | 劇団京芸 | 612 京都市伏見区納所北城堀 31-18 | 075-631-2609 | |
| | 人間座 | 606 京都市左京区下鴨東高木町 11 | 075-721-4763 | |
| | 人形劇団京芸 | 611 宇治市白川鍋倉山 35-20 | 0774-21-4080 | |
| 和歌山 | 演劇集団和歌山 | 641 和歌山市和歌浦南 1-1-14 | 0734-45-4537 | |
| 神戸ブロック | 劇団四紀会 | 650 神戸市中央区元町通 2-9-1-612 | 078-392-2421 | 078-392-2422 |
| | 劇団どろ | 652 神戸市兵庫区大開通 7-4-7 谷垣ビル 4F | 078-576-6488 | |
| | 神戸職演連 | 650 神戸市中央区下山手通 9-9-7 西藤ビル | 078-351-6969 | |
| | 劇団かすがい | 660 尾崎市昭和通 1-17-1 石和久ビル 3F | 06-489-8984 | 06-489-8984 |
| 中国ブロック | 劇団月曜会 | 730 広島市中区榎町 4-27 岩井様方 | 082-234-9656 | |
| | 劇団若者座 | 755 宇部市松山町 4-10-24 東洋鍼灸院内 | 0836-21-7468 | |

## 友好劇団

| 劇団名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|
| アートステージくしろ | 085 釧路市貝塚1-6-19 加藤たけはる方 | 0154-42-8009 | |
| 劇団新芸 | 047-02 小樽市銭函町3-23-162 鹿角優一方 | 0134-62-3254 | |
| 劇団河童 | 090 北見市幸町8-3-4 扇谷国男方 | 0157-24-3357 | |
| 劇団湖（うみ） | 068-21 三笠市本郷町578-9 加藤元方 | 01267-2-3044 | |
| 釧路演集 | 085 釧路市寿2-5-1 中山知征方 | 0154-23-6551 | |
| 劇団ペルソナ | 062 札幌市豊平区平岸4条12-8-4 秋本博行方 | 011-811-9036 | |
| 函館創芸 | 040 函館市川原町2-5 長谷川潔方 | 0138-53-7520 | |
| 劇団海鳴り | 094 紋別市潮見町2-3-40 我孫子正好方 | 01582-3-3238 | |
| 演劇集団未踏 | 121 東京都足立区梅島1-9-1 | 03-3880-0034 | |
| 演劇サークル麦の会 | 133 東京都江戸川区北小岩7-3-20 | 03-3659-8704 | |
| 川崎演劇塾 | 214 川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12号504 | 044-951-9819 | |
| 劇団津演 | 514 三重県津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方 | 0592-26-1089 | |
| 演劇研究所 | 420 静岡市秋山町2-1715 | 054-271-0177 | |
| 劇団はにわ | 461 名古屋市東区矢田町3-9 アーバンドリーム矢田町401 下高原方 | | |
| 劇団たけぶえ | 915 福井県武生市四郎丸町2-2 | 0778-23-0147 | 0778-23-4095 |
| 演劇集団 瞬（とき） | 602 京都市上京区芦山寺通り千本東入ル北玄蕃町51-7 山脇様方 | 075-414-8624 | |
| 演劇集団 あり | 683 米子市昭和町23-2 宮倉様方 | 0859-33-9302 | |
| 劇団・自立の会 | 520 大津市横木1-10-17 谷田様方 | 0775-23-1891 | |

| B | 劇団名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|---|
| ッ中国ブロク | 演劇サークル・トラム | 753 山口市大字吉敷2025 | 0839-20-2835 | |
| | 劇団演劇街 | 753 山口市中園町1-3 やの舞台美術内 | 0839-24-0075 | |
| | 劇団あしぶえ | 690-21 島根県八東郡八雲村平原481-1 | 0852-54-2400 | 0852-54-2411 |
| 四国 | 劇団こじか座 | 790 松山市木屋町4-35-1 酒井様方 | 0899-24-3415 | |
| 九州ブロック | 福岡現代劇場 | 810 福岡市中央区薬院1-6-5-410 | 092-751-7982 | |
| | 劇団生活舞台 | 815 福岡市南区長丘2-15-4-401 平原義行様方 | | |
| | 劇団道化 | 818-01 福岡県太宰府市大字太宰府2629-10 | 092-922-9737 | |
| | 劇団テアトルハカタ | 812 福岡市博多区上川端10-15-901 ローズマンション9F | 092-271-5090 | 092-282-4513 |

## 個人加盟

| 氏名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|
| 桜井 裕子 | 921 石川県金沢市山科3丁目6-10 早川方 | 0762-44-2802 | |
| 大橋 喜一 | 210 神奈川県川崎市幸区小向仲野町3-2-406 | 044-533-3779 | |
| 岡田 和義 | 176 東京都練馬区羽沢2-12-8 | 03-3991-1723 | |
| こうじ谷 一郎 | 924 石川県松任市若宮町2-4 | 0762-75-2755 | |
| 大原 穣子 | 215 神奈川県川崎市麻生区万福寺2-14-5 | 044-966-8125 | |
| 川島 柳一 | 270 千葉県松戸市金ケ作57-57 | 0473-84-6207 | |
| 小松 徹 | 663 西宮市宮前町8-8 ネオハイツ宮前町401 | 0798-36-8341 | |
| 栗原 省 | 643-01 和歌山県有田郡吉備町庄684-32 | 0737-52-5963 | |
| 又川 邦義 | 563 池田市豊島北2-4-6 共栄マート | 0727-62-5675 | |
| 阿部 好一 | 565 吹田市千里山西3-30-16 | 06- 385-3330 | |

| 議長団 | 劇団名 | 住所 | 電話 | FAX |
|---|---|---|---|---|
| こばやしひろし | 劇団はぐるま | 501-01 岐阜市寺田852 円成寺 | 0582-51-0490 | |
| 後藤 陽吉 | 青年劇場 | 184 小金井市貫井南町5-12-13 | 0423-81-1590 | |
| 中沢 研郎 | 京浜協同劇団 | 211 川崎市幸区古市場2-109 | 044-555-4066 | |
| 中野 健 | 劇団支木 | 030 青森市長島4-21-3 劇団支木内 | 0177-77-4677 | 0177-77-4677 |
| 仲 武司 | 関西芸術座 | 606 京都市左京区上高野上荒蒔町1-1 | 075-701-2570 | |
| 藤沢 薫 | 劇団京芸 | 615 京都市西京区樫原内垣外町25-1-A403 | 075-391-5039 | |
| 梶 武司 | 劇団四紀会 | 673 兵庫県明石市東野町1-5-1009 | 078-911-1513 | 078-911-1513 |
| 渡渡 公一 | 福岡現代劇場 | 814 福岡市早良区有田2-10-4 | 092-831-1696 | |
| **事務局** | | | | |
| 城谷 護 | 京浜協同劇団 | 211 川崎市幸区東古市場9-21（事務局長） | 044-544-3737 | 044-544-3737 |
| 浅野真理子 | 劇団はぐるま | 500 岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内 | 0582-65-1852 | |
| 加納美千子 | 〃 | 〃 | | |
| 熊本 一 | 劇団大阪 | 542 大阪市中央区谷町7-1-39-103（西会議事務局長） | 06-768-9957 | |
| 田中 実 | 劇団息吹 | 581 八尾市山本町南7-6-7（事務局次長） | 0729-99-9437 | |
| 清原 正次 | 劇団大阪 | 570 守口市金下町1-12-13（事務局次長） | 06-993-3113 | |
| **編集委員** | | | | |
| 早川 昭二 | 劇団飛鳥 | 168 杉並区和泉1-9-12-201（編集長） | 03-3323-8943 | |
| 境野 修次 | 演劇集団石るつ | 134 江戸川区西葛西3-15-8-701 | 03-3804-0507 | |
| 石垣 政裕 | 仙台小劇場 | 983 仙台市太白区西中田5-23-1 | 022-264-2340 | |
| 栗原 省 | 劇団いこら | 643-01 和歌山県有田郡吉備町庄684-32 | 0737-52-5963 | 0737-52-5963 |
| 赤松比洋子 | 劇団きづがわ | 565 吹田市竹谷町33-3 古川方 | 06-388-7513 | |
| 楠本 幸男 | 演劇集団和歌山 | 640 和歌山市加納271-14 | 0734-73-7589 | |



# 編集後記

●『演劇会議』発行所の場を提供してくれた、吉川複写工業（株）が不景気の嵐に晒され、無念にも倒産。境野の見の振り方もなかなか決まらず、『演劇会議』発行の維続（最終的には全リ演全体、もしくは関東ブロックの責任で発行の手だてはあるはず）と己れの演劇活動の持続、生活問題等、気持は急されてお尻が落ちかない日々があった。

●五十半も過ぎた男にそうそう働き口はない新聞広告の就職、求人チラシを見て適応する仕事がみつからない。ビルの清掃ぐらいが御の字。しかし芝居の稽古等その分野での活動は休むことなく持続、端目ではのんびりしているように映る。いたって本人は深刻なのだが―（まア、家族に与える負担は大きいのだ、頭が上がらないこともちろん自覚しているのだが―）。

●しかし、私は運のいい人間だ、神は捨ててはいなかったのだ。江東地域の医療関係の人の紹介で、ネットワーク「ゆめ工房」という職場で働くことが出来た。工房の所長であるK氏とは、江東勤労者フェスティバル等の活動で毎年、ご一緒しているので、気さくに私を受け入れてくれた。この『工房』は、障害者（児）運動の場であり、印刷・製本の職場なのである。営利が目的ではなく、あくまでも運動を主体とする場なのだ。

●私自身の仕事として『演劇会議』発行のメドもつくようになり、ホットした。しかし、いざ、企画、編集、割り付けと場の違いで、とまどい等もあり、また、日常労働と創造活動が重さなり、従来より遅れての発行となってしまった。劇団通信等、早々に原稿を寄せて頂いた劇団、個人の方々には不本意なことと思っている。深くお詫びする次第だ。

●企画の階段で、リアリズムシリーズの原稿依頼など予定した人との行き違い等があり、急拠西会議のリアリズム少委員会に提出された栗原論文を活用することになった。栗原氏には『演劇会議』用に新たに改稿、整理をお願いした次第。氏には心から感謝しています。

●今号は東・西会議報告、長編の戯曲、リアリズム・シリーズ等で活字が多く、頁数も一二〇頁をはるかに超えてしまった従って原稿の削除等、手を入れた所もあります。（劇団通信等）

●劇団支木の中野健氏より送られた、北野茨・作『千年の丘』（劇団支木公演）は次号に掲載の予定です。

●京浜協同劇団の城谷氏から不発送の個人読者があったと連絡があり、早速お送りしましたが、以後気をつけます。

●『演劇会議』発行所が下記（奥付）に変更になりました。今後ともよろしくお願いいたします。

（文責・境野）

演劇会議 第92号 1996年12月15日発行
定価 700円（送料240円）
編集委員 早川昭二 境野修次 石垣政裕 栗原 省 赤松比洋子 楠本幸男
発行所 演劇会議発行所
〒134 東京都江戸川区西葛西3―15―8―701 境野修次方
電話 03(3804)0507
誌代振込先（郵便振替） 口座番号 00200―4―78639
全日本リアリズム演劇会議事務局（〒211 神奈川県川崎市幸区古市場2―109（京浜協同劇団・城谷護）